北埋調報145

深川市

内園6遺跡

内大部川改修工事に伴う発掘調査報告書

平成11年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

深川市

内園6遺跡

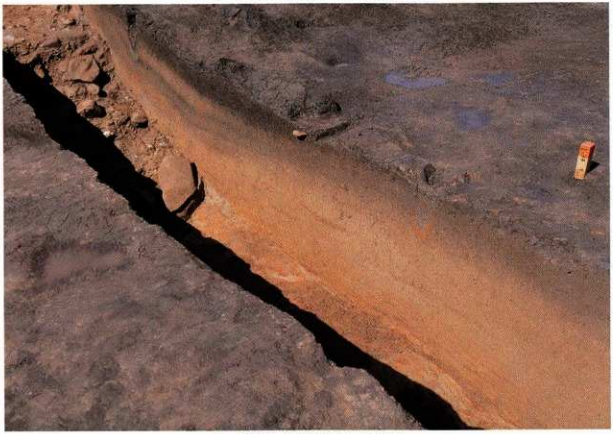
内大部川改修工事に伴う発掘調査報告書

平成11年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

調査区遠景（東から）

1　流路1土層断面（南東から）



2　流路2土層断面（南東から）

1　P－41土層断面（東から）

2　S－5（東から）

1　包含層土器出土状況（東から）

2　包含層土器出土状況（南東から）

3　復原掲載土器

例　言

1．本書は、内大部川改修工事にともない、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成11年度に実施した、深川市内園６遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書（第145集）である。
2．遺跡の地番は、北海道深川市音江町字内園435番地ほかである。
3．調査は、第２調査部第２調査課が担当した。
4．本書の編集は、第２調査部第２調査課末光正卓が担当した。
5．文責者については、文末に記した。
6．現場の写真は末光正卓と石井淳平が、遺物の写真撮影は末光正卓が担当した。
7．炭化物の放射性炭素年代測定は、株式会社地球科学研究所に依頼した。
8．石器等の石質鑑定は石井淳平が行った。
9．出土資料は、深川市教育委員会で保管される。
10．調査にあたっては、下記の機関および人々の御協力、御助言をいただいた。

北海道教育庁文化課、深川市教育委員会　葛西智義、富良野市郷土資料館　杉浦重信　澤田健、芦別市星の降る里百年記念館　長谷山隆博、旭川市教育委員会　瀬川拓郎　友田哲弘、市立名寄市図書館　氏江敏文、函館市教育委員会　野村祐一、留萌市海のふるさと館　福士廣志、稚内市教育委員会　内山真澄、北海道開拓記念館　平川善祥　右代啓視、北海道開拓の村　野村崇、宮宏明

記号等の説明

1．遺構に関して、本文及び図表中では次の略号を使用した。また、遺構番号は平成７・８年度の深川市教育委員会による調査で確認された遺構の続き番号とした。

P：土壙、柱穴・杭穴　F：焼土　S：集石遺構　D：石器埋納

P：19から　F：45から　S：４から　D：１のみ

2．実測図、拓影図の縮尺は、原則として次のとおりで、スケールを付けてある。

遺　構　１：40　復原掲載土器　１：４　破片掲載土器　１：３　土製品　１：２

剥片石器　１：２　磨製石斧　１：２　礫石器　１：３　石製品　１：２

3．実測図中の方位は真北を示し、レベルは標高（単位m）を示す。

4．遺構の規模については、次の要領で示した。なお、一部破壊されているもの等については、現存長を（丸括弧）で示した。

5．土層の表記は、基本土層についてはローマ数字で、遺構覆土等の部分的な層位についてはアラビア数字で示した。

6．土層等の色調、含有物の混在状況（面積割合）については『新版　標準土色帖』(1996年版）を用いて表記した。

目　　次

カラー図版
例言
記号等の説明
目次
図目次
表目次
図版目次

Ⅰ　調査の概要
1　調査要項……1
2　調査体制……1
3　調査の経緯……1
4　調査結果の概要……3

Ⅱ　遺跡の位置と環境
1　位置と環境……5
2　周辺の遺跡……5

Ⅲ　調査の方法
1　発掘調査の方法……9
(1)　グリッドの設定
(2)　調査の手順と方法
(3)　遺物の取上げと実測
2　土層……11
3　整理の方法……14
(1)　土器
(2)　石器
(3)遺物と記録類の保管
4　遺物の分類……17
(1)　土器
(2)　石器

Ⅳ　遺構と出土遺物
1　概要……21
2　土壙……21
3　柱穴・杭跡……27

4 焼土……31
5 集石遺構……31
6 石器埋納……36
7 遺構出土の土器……36
8 遺構出土の石器……44

Ⅴ 包含層出土の遺物
1 土器……51
(1) 概要
(2) 出土状況を記録した土器
(3) 復原掲載土器
(4) 破片掲載土器
(5) 土製品
2 石器……77

Ⅵ 自然科学的手法による分析結果
放射性炭素（C_{14}）年代測定結果……99

Ⅶ まとめ
1 流路の変遷と段丘面の利用について……101
2 土器の出土のあり方について……106
3 石器について……111

写真図版

引用参考文献

報告書抄録

図 目 次

図1　平成11年度発掘調査区の変更範囲……2
図2　1999年度内園6遺跡調査区及び近辺の遺跡……4
図3　内園6遺跡の位置と周辺の遺跡……6
図4　調査の手順……9
図5　グリッド設定図……10
図6　Ⅳ層調査範囲……10
図7　基本層序柱状図……11
図8　土層模式図……11
図9　33ラインメインセクション……12
図10　石鏃・つまみ付きナイフ計測模式図…15
図11　石器整理作業の手順……15
図12　遺構配置図……22
図13　流路1縦断セクション……23
図14　土壙(1)……25
図15　土壙(2)……27
図16　柱穴・杭跡(1)……28
図17　柱穴・杭跡(2)……29
図18　柱穴・杭跡(3)……30
図19　焼土……32
図20　集石遺構4……33
図21　集石遺構5……33
図22　集石遺構6……34
図23　集石遺構7……35
図24　石器埋納……36
図25　遺構出土土器(1)……37
図26　遺構出土土器(2)……39
図27　遺構出土土器(3)……41
図28　土壙・柱穴出土石器……45
図29　集石遺構出土石器(1)……46
図30　集石遺構出土石器(2)……47
図31　石器埋納出土石器(1)……48
図32　石器埋納出土石器(2)……49
図33　土器出土分布図(1)……52
図34　土器出土分布図(2)……53
図35　土器出土分布図(3)……54
図36　土器出土分布図(4)……55
図37　出土状況を記録した土器(1)……59
図38　出土状況を記録した土器(2)……60
図39　出土状況を記録した土器(3)……61
図40　出土状況を記録した土器(4)……62
図41　出土状況を記録した土器(5)……63
図42　出土状況を記録した土器(6)……65
図43　出土状況を記録した土器(7)……66
図44　復原掲載土器……68
図45　破片掲載土器(1)……68
図46　破片掲載土器(2)……69
図47　破片掲載土器(3)……71
図48　破片掲載土器(4)・土製品……72
図49　器種別使用石材構成比棒グラフ……77
図50　石器出土分布図(1)……78
図51　石器出土分布図(2)……79
図52　石器出土分布図(3)……80
図53　石器出土分布図(4)……81
図54　包含層出土石器(1)……85
図55　包含層出土石器(2)……86
図56　包含層出土石器(3)……87
図57　包含層出土石器(4)……88
図58　包含層出土石器(5)……89
図59　包含層出土石器(6)……90
図60　包含層出土石器(7)……91
図61　包含層出土石器(8)……92
図62　包含層出土石器(9)……93
図63　包含層出土石器(10)……94
図64　遺構の位置と流路の変遷……102
図65　流路の変遷と段丘面利用の推移……103
図66　ランクの分類方法……106
図67　土器のライフサイクル……108
図68　埋納遺構出土石器……115
図69　石器素材分析結果(1)……116
図70　石器素材分析結果(2)……117
図71　内園3・6遺跡遺物分布図(1)……118
図72　内園3・6遺跡遺物分布図(2)……119

表 目 次

表1　内図6・3遺跡土層対比表……13
表2　遺構出土復原掲載土器観察表……42
表3　遺構出土破片掲載土器観察表……43
表4　遺構出土掲載石器一覧表……50
表5　包含層出土土器点数表……51
表6　包含層出土復原掲載土器観察表
　　（出土状況記録分）……74
表7　包含層出土破片掲載土器観察表
　　（出土状況記録分）……74
表8　包含層出土復原掲載土器観察表……74
表9　包含層出土破片掲載土器観察表……75
表10　包含層出土土製品観察表……76
表11　包含層出土掲載石器一覧表……95
表12　包含層遺物グリッド別集計表……98
表13　内図6遺跡出土石器集計表……112

図 版 目 次

カラー図版

1　調査区遠景（東から）
2—1　流路1土層断面（南東から）
2—2　流路2土層断面（南東から）
3—1　P—41土層断面（東から）
3—2　S—5（東から）
4—1　包含層土器出土状況（東から）
4—2　包含層土器出土状況（南東から）
4—3　復原掲載土器

モノクロ図版

1—1　調査風景（南から）
1—2　流路2調査風景（北から）
2—1　調査風景（南西から）
2—2　調査風景（西から）
2—3　調査風景（南から）
2—4　Ⅳ層土器出土状況（北東から）
2—5　Ⅳ層土器出土状況（東から）
3—1　33ラインメインセクション
　　（J～K　南東から）
3—2　33ラインメインセクション
　　（M～O　南東から）
3—3　流路1縦断方向セクション
　　（北東から）
4—1　P—19土層断面（南から）
4—1　P—38土層断面（南から）
4—1　P—41土器出土状況（東から）
4—1　P—41土層断面（東から）
4—1　P—41完掘状況（東から）
5—1　P—43土層断面（西から）
5—2　P—44土層断面（南から）
5—3　P—49土層断面（東から）
5—4　P—59土層断面（北から）
5—5　P—66確認状況（北から）
5—6　P—67土層断面（南から）
5—7　P—67完掘状況（南から）
5—8　P—86炭化物確認状況（南から）
6—1　P—21土層断面（南から）
6—2　P—22土層断面（南から）
6—3　P—23土層断面（南から）
6—4　P—33土層断面（南から）
6—5　P—54土層断面（西から）
6—6　P—56土層断面（南から）
6—7　P—72土層断面（南から）
6—8　P—88土層断面（器たから）
7—1　S—4（南東から）
7—2　S—5（東から）
7—3　S—5土層断面（南から）
7—4　S—6（東から）
7—5　S—7（南西から）
8—1　P—41出土土器（復原）
8—2　P—41出土土器（復原）
8—3　P—41出土土器（復原）
8—4　P—67出土土器（復原）
9—1　P—19出土土器（復原）
9—2　S—7出土土器
9—3　S—7出土土器
9—4　S—7出土土器

9—5　P－19出土石器
9—6　P－19出土石器
10　P出土土器
11　P出土土器
12　P・S出土土器
13　S出土土器
14—1　P－67出土石器
14—2　P－91出土石器
14—3　S－4出土石器
14—4　S－7出土石器
14—5　P－41出土石器
14—6　S－7出土石器
14—7　S－7出土石器
15—1　S－5出土石器
15—2　S－6出土石器
15—3　S－7出土石器
15—4　S－7出土石器
16—1　P・S出土石器
16—2　D－1出土石器
17　D－1出土石器
18—1　包含層出土土器（復原）
18—2　包含層出土土器（復原）
18—3　土器出土状況（東から）
18—4　土器出土状況（東から）
18—5　包含層出土土器（復原）
19—1　土器出土状況（南から）
19—2　包含層出土土器（復原）
19—3　土器出土状況（北西から）
19—4　包含層出土土器（復原）
19—5　土器出土状況（北から）
19—6　包含層出土土器（復原）
20—1　土器出土状況（南から）
20—2　包含層出土土器
20—3　包含層出土土器（復原）
20—4　包含層出土土器（復原）
20—5　包含層出土土器
21—1　土器出土状況（東から）
21—2　包含層出土土器（復原）
21—3　土器出土状況（東から）
21—4　包含層出土土器（復原）
21—5　土器出土状況（東から）
21—6　包含層出土土器（復原）
22—1　土器出土状況（南西から）
22—2　包含層出土土器（復原）
22—3　土器出土状況（東から）
22—4　包含層出土土器（復原）
22—5　土器出土状況（上部　北から）
22—6　土器出土状況（下部　南から）
23—1　包含層出土土器
23—2　土器出土状況（東から）
23—3　包含層出土土器
23—4　土器出土状況（北から）
23—5　包含層出土土器
23—6　土器出土状況（東から）
23—7　包含層出土土器
24—1　包含層出土土器（復原）
24—2　包含層出土土器（復原）
24—3　包含層出土土器（復原）
24—4　包含層出土土器（復原）
24—5　包含層出土土器（復原）
24—6　包含層出土土器（復原）
24—7　包含層出土土器（復原）
25—1　包含層出土土器（復原）
25—2　包含層出土土器（復原）
25—3　包含層出土土製品
25—4　包含層出土土器
26　包含層出土土器
27　包含層出土土器
28　包含層出土土器
29　包含層出土石器
30—1　包含層出土石器
30—2　包含層出土石器
30—3　包含層出土石器
31—1　包含層出土石器
31—2　包含層出土石器
32　包含層出土石器
33　包含層出土石器
34—1　包含層出土石器
34—2　包含層出土石器
35　包含層出土石器
36—1　包含層出土石器
36—2　包含層出土石器
36—3　包含層出土石器
36—4　包含層出土石器
37—1　包含層出土石製品
37—2　表採石器
37—3　表採・Ⅳ層出土石器
38　内園6遺跡周辺の空中写真

Ⅰ 調査の概要

1 調査要項

事 業 名：内大部川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：北海道旭川土木現業所
受 託 者：財団法人北海道埋蔵文化財センター
遺 跡 名：内園６遺跡（北海道教育委員会登載番号Ｅ―10―53）
所 在 地：深川市音江町字内園１―１ほか
調査面積：2,000㎡
調査期間：現地発掘：平成11年９月１日～10月30日
　　整理作業：平成11年11月１日～平成12年３月27日

2 調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター

理事長		大澤　満
専務理事		宮崎　勝
常務理事		木村　尚俊
第２調査部	部長	鬼柳　彰
第２調査部第２調査課	課長	高橋　和樹（発掘担当者）
	文化財保護主事	末光　正卓（発掘担当者）
	文化財保護主事	石井　淳平

3 調査の経緯［図１］

内大部川の氾濫防止を目的とし、蛇行部分の直線化や河積の拡大を図る、河川改修工事に伴う発掘調査は、平成６年度の旭川市教育委員会による、内大部川右岸、旭川市神居古潭７遺跡の調査によって開始された。1,178㎡を対象とした平成６年度の神居古潭７遺跡では、右岸中腹の狭長な平坦面に、縄文時代後期中葉を主体とする一括土器や焼土層などが検出されている。明確な遺構が少ないこと、土器の多さに比して石器が少ないことなど、この遺跡の特異性が指摘されている（友田　1995）。

翌平成７年度からは左岸の深川市内園６遺跡、内園３遺跡の発掘調査が深川市教育委員会によって進められた。平成７年度には、内園６遺跡のうち2,434㎡が調査され、河川沿いのＡ地区では、縄文晩期の土壙や焼土、チップ集中などの遺構や多数の遺物が出土、段丘奥側のＤ地区では、縄文中期前半の土壙や集石、焼土、押型文や縄文施文土器などのほか、縄文後期中葉の捨場や土壙、焼土などの遺構や多数の遺物が検出された（葛西　1996）。

平成８年度には内園６遺跡の1,415㎡を対象とする第２次調査が継続され、Ａ地区では引き続き縄文晩期の焼土や遺物、Ａ地区とＤ地区に挟まれたＣ地区からは、縄文後期中葉の作業場や焼土、多数の遺物のほか、縄文晩期の土壙や焼土も検出された。また、埋没した流路１・流路２の存在も確認され、西側の流路１には縄文後期の、東の流路２には縄文晩期の遺物のまとまりがみられることが判明した（葛西　1997a）。

さらに一年置いた平成10年度には、内園６遺跡の南に隣接する内園３遺跡のうち1,630㎡が調査さ

れた。ここでは縄文中期後半の住居跡や土壙、焼土などの遺構や遺物のほか、縄文後期中葉の土壙や焼土、集石、石器素材埋納跡などの遺構や多数の遺物、縄文晩期の土壙や遺物などが検出されている（葛西　1999）。また、一部不明瞭ながら流路1、流路2の存在も認められ、流路1からは縄文後期を主体とする多くの遺物が検出されている（葛西　1998b）。

続く平成11年度は内大部川改修に伴う発掘調査の最終年度で、北海道教育委員会と深川市教育委員会による協議の結果、㈶北海道埋蔵文化財センターが調査を担当することになった。調査対象地は、平成7・8年度内園6遺跡調査区と平成10年度内園3遺跡調査区とに挟まれた、旧内大部橋の敷地部分2,000㎡で、東西に長い、ほぼ矩形の調査区が設定されていた。ところが調査着手以前に、調査予定地の西端部で、盛土による管理用通路造成工事が先行して進められたため、9月6日北海道教育委員会文化課大沼調査班主査を現地に迎えて、旭川土木現業所と調査区の線引き見直しについて協議、管理用通路部分を対象地から除外することが決定された。代わりに南方では、内園3遺跡の平成10年度調査区のうち、標高差が大きく法面保護のために未調査に終わった旧国道の盛土裾部周辺や、電柱があって掘開が保留された地区などを加え、北方では、内園6遺跡の平成7・8年度調査区南縁部と、平成11年度調査区の北縁部との不整合をカバーすることとし、最終的な発掘調査区は図1に示す範囲となった。

なお、内大部川の河川改修工事に先立って、一般国道12号改良工事に伴う発掘調査も進められてきた。平成2年度には、新設される内大部橋の架設工事地区にあたる、内園3遺跡の1,920㎡が調査され、ここでは縄文後期中葉の土壙や焼土などの遺構のほか、縄文後期や中期を主体とする遺物が検出されている（大矢　1991）。調査区の東寄りでは古い流路が見い出され、重複して位置するフラスコ形の土壙との関係から、流路の時期は後期以後とされたが、流路埋没後に土壙が掘り込まれたものと想定すると、流路は後期以前に形成されたものと判断される。

平成3年度には旭川市神居古潭7遺跡の発掘が開始され、130㎡が調査された。土壙1基と縄文後期中葉を主体とする土器などが検出され、段丘中腹の狭長な平坦面に立地する、やや特異な遺跡の様相が注目される契機となった（友田　1992）。

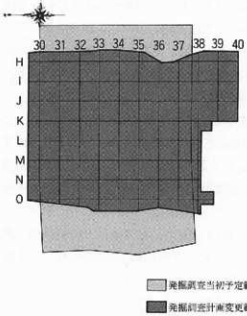


図1　平成11年度発掘調査区の変更範囲

平成4年度には神居古潭7遺跡400㎡の調査が継続され、やはり縄文後期中葉を主体とする一括土器や配石などの発見があり、特殊な空間がさらに意識されてくる（友田　1993）。平成6年度には河川改修に伴う調査とは別に、国道改良に伴って神居古潭7遺跡の上位平坦面570㎡が調査され、縄文早期後葉の短期的な生活址の存在などが報告されている（瀬川　1995）。なお、この上位平坦面にはストーンサークルがあったが、開墾によって既に破壊されてしまったという（瀬川　1990）。

4　調査結果の概要

平成11年度の内園６遺跡の調査は、内大部川改修工事用地のうち、旧内大部橋が架設されていた旧国道12号の盛土部分を中心とする地区で、前節に説明したように、内園６遺跡の平成７・８年度調査区と、内園３遺跡の平成10年度調査区とに挟まれた2,000㎡を対象としたものである。

地形的には内大部川下流域の左岸に形成された段丘地形に立地しており、盛土を施した上に国道が造られていたため、調査済の内園３遺跡や内園６遺跡が開墾や水田造成による削平を受けたりして、必ずしも状態が良くなかったのに比べ、思いのほか遺構や包含層の保存状態は良好であった。

段丘は、古い流路の変遷と相俟って、３～４段が形成されている。流路は大まかには、葛西(1999)が説くように「縄文時代中期から徐々に東側に移動し、縄文時代晩期以降、ほぼ、現在の位置になったようであ」り、「河道の変化とともに、利用面も移動した」（２頁）ことが推定される。

土層は、層位的には大きく次のⅠ～Ⅴ層に識別される。Ⅰ層：盛土・表土・耕作土、Ⅱ層：黒色土、Ⅲ層：漸移層、Ⅳ層：黄褐色砂を主体とする河川堆積層、Ⅴ層：礫主体の砂礫層。Ⅴ層の下に基盤の砂岩・泥岩層が分布する。包含層の主体はⅡ・Ⅲ層で、Ⅳ層を挟る各流路には、流路を再び埋没させた土砂が堆積している。そこには多量の遺物が遺存しており、人為的な廃棄場としての利用が想定されることは、これまでの調査でも繰り返し指摘されている。平成11年度の調査でも、流路１では縄文後期の、流路２では縄文晩期の遺物が集中して出土する傾向が認められ、流路がそれぞれ廃棄場として機能していたと推定されることは、これまでの調査例と同様である。

平成11年度の内園６遺跡の調査では、縄文時代後期中葉を主体に、晩期後葉や中期前半期などの遺構、遺物が検出された。遺構には、土壙28、柱穴・杭跡48、焼土15、集石４、石器埋納１などがあり、流路１と流路２の間の第２段丘面に分布するものが多かった。遺構の多くは縄文後期中葉の所産と思われ、晩期の土壙や焼土も少数ながらみられる。

土壙には、ほぼ完形の土器３個を伴い、覆土が埋め戻されたと思われるP―41のように、墓と推定されるものもあるが、多くは掘り込みが浅く、性格は不明である。柱穴と焼土には一体と考えられる配置を示す例があり、これらは平地式住居を構成するものと思われる。集石は流路１内に見い出されたもので、礫を方形に配置し、下部に土壙を伴う集石５は、墓壙の可能性が高いようだ。石器埋納は、黒曜石製の調整された剥片31点がまとまって検出されたものである。

土器は19,000点近い数が得られている。その90％以上が縄文後期に属するもので、晩期が７％弱、中期の押型文も僅かながら検出されている。縄文後期の土器は、中葉の手稲式、ホッケマ式が主体で、この他、ウサクマイC式や堂林式の類例もみられる。堂林式としたものは、口縁部に突瘤文と刻みの両者を施したもので、地域性や後期後葉への移行期を示唆する例として、良好な資料となろう。

石器類の出土数は7,000点に近い。器種的には、石鏃、石槍・ナイフ、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、R・Uフレイク、石斧、たたき石、すり石、石皿・台石など各種のものがあり、とくに石鏃やスクレイパー類、石斧や石皿・台石などの類例が多いようだ。剥片石器の石材には黒曜石が多く利用されている。

その他、オロシガネ状の土・石製品が検出されていることも、縄文後期中葉を主体とする遺跡に特徴的な事例で、内園６遺跡のほか、対岸の神居古潭７遺跡にも共通する現象といえよう。

神居古潭７遺跡では縄文後期中葉の豊富な一括土器の出土例に比して、石器類の少なさが際立ち、遺跡の性格の特異性が指摘されている。内園６遺跡では、明確な竪穴住居跡の検出はないものの、平地式住居を思わせる遺構をはじめ、土壙や焼土なども比較的多く、石器類も質、量ともに多いことなどから、この地が、生活の拠点として安定的に利用されていたことが窺えた。　（高橋和衛）

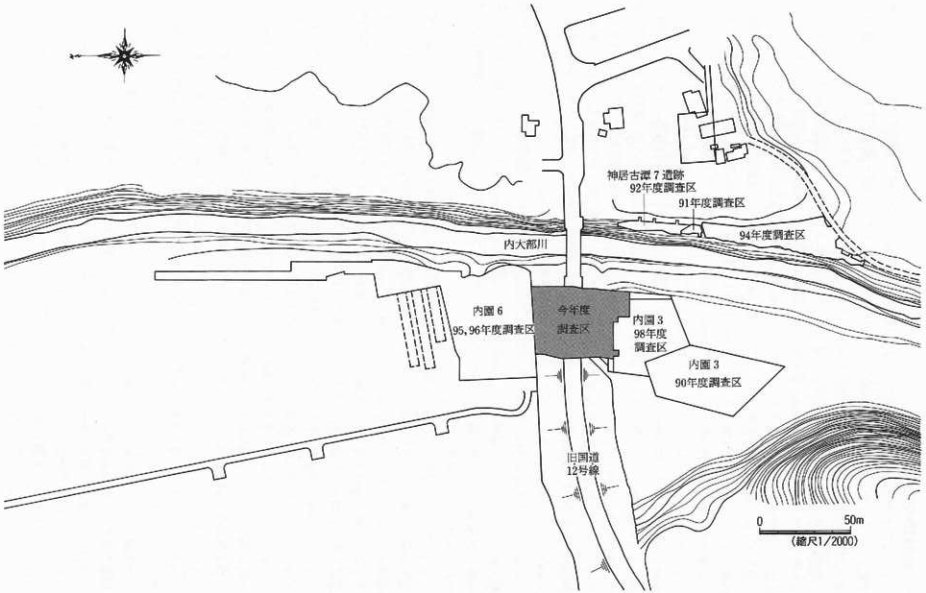


図2　1999年度内園6遺跡調査区及び近辺の遺跡

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　位置と環境［図３］

内園６遺跡は深川市街地の東方約11km、内大部川下流域の左岸段丘上に位置する。内大部川は北海道最大の長流である石狩川の支流で、深川市と旭川市の境界を画して北流したのち西へ折れ、内園６遺跡から700ｍ程下ったところで石狩川本流に合流している。内大部とはアイヌ語ナイ・タ・ユペ（Nai-ta-yupe　沢の鰊鮫）で、石狩川の絶壁の下で捕った鰊鮫を舟でこの沢へ運び入れて陸へ揚げたことに由来するとされるが、本当は意味が分からないと書きたいという（山田　1977）。内園地区は深川市に合併される以前は音江村の一部で、内園とは“内大部園生”の頭文字をとった命名、園生とは“草木の生えている園”の意味で、整然とした畑作地帯を高台から眺望したことに因むという（深川市　1977、葛西　1997a）。このように古くは畑地や果樹園の多い土地柄だったが、昭和初年代以降、大規模な灌漑工事によって水田化が促進されてきた。内園３・６遺跡の一帯では、昭和40年代に水田造成工事が進められ、地形が大きく改変されたが、前章にも触れたように、今回の調査区となった旧内大部橋付近では、盛土下に旧地形が比較的良好に保存されていた。内大部川右岸の上位平坦面などは、標高も70ｍ台と高く、現在も果樹園として利用されている所が多い。

地質的には、新第三紀中新世川端層に相当する幌新砂岩、泥岩層を基盤とし、これを覆う第四紀沖～洪積世の氾濫原堆積物および段丘堆積物（礫・砂・シルト・粘土等）によって構成されており（北海道旭川土木現業所　1995）、とくに左岸については、旧河道（流路）の変遷に伴った、数段の段丘地形が発達、時代の推移とともに、縄文人が活動の拠点となる段丘面を移していったことが、これまでの発掘調査によって明らかとなってきた。

2　周辺の遺跡

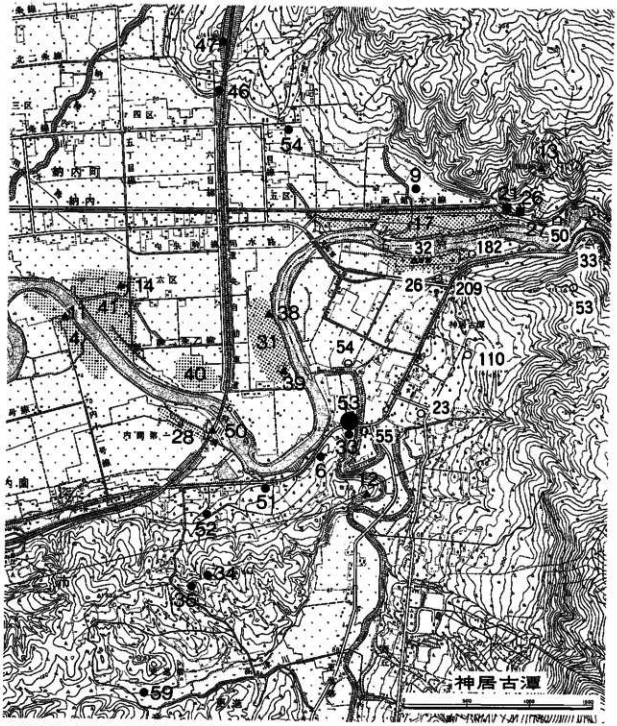
深川市音江地区から内園、納内、旭川市神居古潭にかけての石狩川沿いの一帯は、多数の竪穴住居跡やチャシ跡が群在する、遺跡の豊富な地域として古くから知られている（河野　1918）。明治に遡る先人の調査の足跡については、北海道縦貫自動車道建設工事に係る深川市納内６丁目付近遺跡の発掘（北埋文　1989a・1990）などを契機に、西田茂（1991）が詳しく紹介している。

内大部川下流域に所在する内園３遺跡、内園６遺跡、神居古潭７遺跡は互いに隣接しており、葛西智義（1999）が説くように、ひとつの遺跡ともいえる存在である。これらの遺跡やその周辺に分布する深川市、旭川市の諸遺跡については、国道改良や河川改修に伴う発掘調査報告書において、既に解説されているところであるが（大矢　1991、葛西　1996など、友田　1992など）、それらを参照しつつ、図３の範囲を中心に、一応ここでも簡単に繰り返し触れておきたい。

旧石器時代の痕跡は少ないが、納内３遺跡では少量ながら細石刃核や細石刃、スポール、スクレイパーや両面加工のポイント、有舌尖頭器などが検出されている（北埋文　1989b）。

縄文時代早期前半期については、今のところ明確な資料は得られていないようだ。早期後半に至ると、石狩川本流沿いの河岸段丘に位置する納内６丁目付近遺跡で安定した集落が営まれるようになり、31軒の竪穴住居跡が見い出されている。早期後半には、神居古潭７遺跡でも短期的な生活址が検出されており（瀬川　1995）、内園３・６遺跡などでも僅かながら該期の資料が得られている（大矢　1991、葛西　1996・1999）。

縄文前期の所産と推定される竪穴住居跡は、納内６丁目付近遺跡で１軒検出されており、神居古潭15遺跡の平成11年度調査でも、竪穴住居跡などが発見されている（氏江　1999）。これらはいずれも



旭川市の遺跡　●縄文時代■擦文時代▲アイヌ文化期

登載番号	遺跡名	登載番号	遺跡名	登載番号	遺跡名
E-10-4	内園遺跡	E-10-27	納内7遺跡	E-10-46	納内2遺跡
E-10-6	内園峠遺跡	E-10-28	内園2遺跡	E-10-47	納内3遺跡
E-10-9	納内5遺跡	E-10-31	納内遺跡	E-10-50	内園2チャシ
E-10-11	北内園チャシ	E-10-33	内園3遺跡	E-10-51	内園4遺跡
E-10-12	内園チャシ	E-10-34	更進1遺跡	E-10-52	内園5遺跡
E-10-13	神居岩チャシ	E-10-35	更進2遺跡	E-10-53	内園6遺跡
E-10-14	納内5丁目チャシ	E-10-38	納内北チャシ	E-10-54	納内4遺跡
E-10-17	東納内遺跡	E-10-39	納内南チャシ	E-10-55	更進3遺跡
E-10-21	東納内2遺跡	E-10-40	納内6丁目付近遺跡		
E-10-26	納内6遺跡	E-10-41	納内5丁目付近遺跡		

旭川市の遺跡　○縄文時代□擦文時代△アイヌ文化期

登載番号	遺跡名
F-01-23	神居古潭8遺跡
F-01-26	神居古潭1遺跡
F-01-32	神居古潭チャシ
F-01-33	神居古潭左岸チャシ
F-01-50	神居古潭2遺跡
F-01-53	神居古潭5遺跡
F-01-54	神居古潭6遺跡
F-01-55	神居古潭7遺跡
F-01-110	神居古潭9遺跡
F-01-182	神居古潭10遺跡
F-01-209	神居古潭15遺跡

図3　内園6遺跡の位置と周辺の遺跡　※この図は国土地理院発行の1：25000地形図「神居古潭」に加筆して作成したものである。

石狩川本流沿いに所在する遺跡で、内大部川流域における縄文前期の活動は、盛んなものではなかったようだ。

縄文中期前半の遺跡としては、押型文土器文化を主体とする土壙群や集石、焼土といった遺構や遺物が多数発見された納内３遺跡をはじめ、納内６丁目付近遺跡や内園峠遺跡（大矢　1993）、東納内遺跡（葛西　1997b）、神居古潭８遺跡（斉藤　1979）などが挙げられ、内園３・６遺跡でも、比較的多くの焼土や遺物が検出されている。中期後半の資料は、納内６丁目付近遺跡、納内３遺跡、内園峠遺跡などで、それぞれ少量検出されており、内園３遺跡では、住居跡や土壙、焼土など遺構の存在も報告されている（葛西　1999）。

縄文後期初頭の余市式系の土器は、内園峠遺跡などで僅かに知られている。後期前葉の資料も、内園峠遺跡や内園３遺跡（大矢　1991）などにみられるが、量的にはさほど多いものではない。

縄文後期中葉は、神居古潭５遺跡のストーンサークル（瀬川　1990）や、有名な国指定史跡音江の環状列石（駒井　1959）が造られるなど、縄文人の活動が俄かに活発化した段階で、内園３・６遺跡や神居古潭７遺跡もこの時期が主体である。開墾のため配石は破壊され、板状礫の多くが散逸してしまったが、神居古潭７遺跡の上位面にもかつてストーンサークルがあり（瀬川　1990）、配石下の墓壙は残っている可能性が高いという。内大部川から石狩川本流に至る神居古潭地区では、縄文人の活動がとくに盛んで、その様相は中川コレクション（北海道開拓記念館開設準備事務所　1970）や水澤コレクション（斉藤　1969、友田　1992、斉藤ほか　1994）などの豊富な資料からも、窺い知ることができる。

縄文後期後葉以降の遺物は、東納内２遺跡などに散見されるが、量的には激減し、晩期中葉に至るまで、遺跡の分布は稀薄となる。しかし、縄文晩期後葉には再び復活し、遺跡数の増加がみられる。内園峠遺跡や内園４遺跡（大矢　1992）では、住居跡や土壙、焼土などの遺構とともに、晩期後葉の遺物が多数検出されており、東納内２遺跡（福田ほか　1977）や内園２遺跡（北堀文　1988）、納内３遺跡などでも、遺構や遺物が発見されている。内園３・６遺跡でも土壙や焼土などのほか、比較的多数の遺物が見い出されており、神居古潭７遺跡の上位平坦面でも該期の一括土器が得られている。

東納内２遺跡や内園２遺跡、納内３遺跡、納内４遺跡（氏江　1999）などの遺構、遺物には、縄文晩期末から続縄文時代初頭のものが含まれるが、それ以後の続縄文時代については、資料が乏しい。

擦文時代に入ると、冒頭に紹介したように、内園遺跡、内園２遺跡、納内遺跡、納内６丁目付近遺跡、東納内遺跡、神居古潭１遺跡など、多数の竪穴住居跡群を有する遺跡が、石狩川本流の両岸に連綿と残される。瀬川拓郎（1996）は、擦文時代にこのような大規模な集落が営まれた背景には、内陸部の擦文社会が、交易の対価となるサケ・マス漁に大きな比重を置いた生業へ転換していった経緯があることを論述している。納内６丁目付近遺跡では円墳の記録があり、蕨手刀が出土している（葛西ほか　1993）。納内３遺跡では、須恵器の短頸壺の出土なども注目されている。内園３・６遺跡でも、僅かながら擦文土器の断片が得られているが、本流筋の隆盛とは異なり、内大部川流域における擦文人の活動は、限定的なものに過ぎなかったようだ。

河野常吉（1918）の測量図には、アイヌ文化期の面崖式チャシを示す、半円形の壕なども記されている。石狩川流域のチャシは漁猟権や交易ルートとも強く関連するといわれ（本堂　1977）、アイヌ文化期においても、サケ・マス漁の重要性は変わらなかったに違いない。神居岩チャシや内園チャシのような高所に位置するチャシは、祭祀の場としての利用を、より考慮する必要があるかも知れない。なお、内園チャシについては、チャシではない可能性もあるといわれる（葛西　1998）。納内遺跡出土の兜や鉄刀などは、アイヌ文化期を代表する遺物といえよう（葛西ほか　1992）。　（髙橋和樹）

Ⅲ　調査の方法

1　発掘調査の方法［図4～6］

(1)グリッドの設定

1995・96年度の内園6遺跡A～D地区、1998年度の内園3遺跡で使用されたグリッドを踏襲した。5ｍ四方の方眼に南北軸にアルファベット、東西軸にアラビア数字をふり、北東角の座標をグリッド名称とした。座標軸は平面直角座標系第Ⅱ系により、X＝－31.700が43ライン、Y＝－5.00が0ラインに一致する。　（石井淳平）

(2)調査の手順と方法

調査の進行は以下のフローチャートの通りである。

図4　調査の手順

調査区は旧国道12号線の直下にあたり、厚さ約5ｍの盛土がなされていた。盛土の下には厚さ10～30cmの旧耕作土が存在し、この盛土と旧耕作土を重機を使用して除去した。さらに重機が除去できなかった10cm程度の表土を人力で除去した。表土の除去後、遺構・遺物の出土状況を把握すること、段丘の形成過程と構造を明らかにすることを目的とし、33ラインに沿って幅1ｍ、深さ1～1.5ｍのトレンチを東西方向に設定した。調査区の南北側は攪乱が激しく、33ライン付近が最も旧地形をよく残していることからこの位置に設定した。さらに、流路1の堆積状態を観察するために、35、37ラインに沿ってもトレンチを設定した。また、これらのトレンチは片側の壁を0.5ｍ幅のセクションベルトととして残し、Ⅱ・Ⅲ層調査終了まで土層の観察に利用した。トレンチ調査で遺構は確認できず、遺物は第2段丘面が最も多く出土することがわかった。また、これまでⅣ層の黄褐色砂層は無遺物層として報告されてきたが、このトレンチ調査でⅣ層からⅢ群とⅣ群の土器が出土した。遺物量は少ないものの、Ⅳ層も調査をする必要があると判断した。このため、従来の包含層（Ⅱ・Ⅲ層）の調査が終了した段階で地形測量を行い、Ⅳ層の調査を進めることとした。

調査区内には落差が1～2ｍ程度の三段の段丘が存在し、低い方から第1、第2、第3段丘と呼称した。完掘時には段丘の傾斜が相当な急勾配になることが予想され、土砂の排出が困難になるおそれがあったため、上位の段丘から低位の段丘に向けて調査を進めた。

Ⅱ・Ⅲ層の掘り下げは遺物の出土量に応じてスコップと移植ごて・手鍬を使い分けた。第1・第3段丘面は遺物量が少なかったため、掘り下げにはスコップを主に使用した。第2段丘面は流路1を中心に遺物量が多かったため、掘り下げには移植ごて・手鍬を主に使用した。また、流路1には人為的な改変（削平、埋め戻し）がなされている可能性があると判断し、流路1の構造を把握するために縦方向にセクションベルトを残して調査を進めた。

Ⅳ層の厚さは１ｍ～３ｍあり、調査区内全てを調査することはできなかった。そこでトレンチ調査で遺物が多く出土した、段丘崖の下と、33ライン沿いを幅約５ｍ、深さ0.5～１ｍ掘り下げて調査した。

（石井淳平）

⑶遺物の取り上げと実測

遺物の取り上げは、多量に出土する遺物を迅速に取り上げる必要性から、グリッド単位の取り上げを行った。特に重要だと判断した遺物群や遺構出土遺物の一部は遣り方測量による出土状況図の作成や地点計測を行い、出土標高を測定して取り上げた。また、Ⅳ層の遺物出土状況を詳細に把握するため、33ライン沿いの５ｍ幅の区域から出土した遺物は試験的に位置と標高を記録して取り上げた。

現場での実測図面は縮尺20分の１を基本とし、遺物出土状況図、集石遺構の平面図は縮尺10分の１、全体図、地形図は100分の１で作図した。また、掲載したコンター図は１ｍメッシュで測定した標高値から計算し作成した。

（石井淳平）

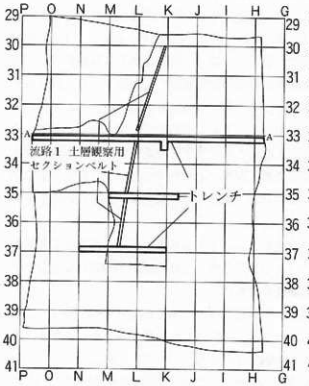


図５　グリッド設定図

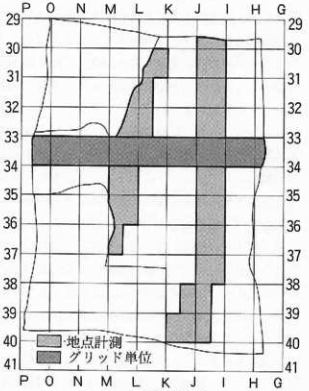


図６　Ⅳ層調査範囲

2　土層［図7～9　表1　図版3］

土層は「土性区分」、「土色」に重点を置いて分類し、以下のように基本層序を設定した。

Ⅰ層：盛土・耕作表土

Ⅱ層：黒色土

Clay Loam（埴壌土）黒色（7.5YR2/1）層界　上：明瞭、下：漸変

礫の混入は原則としてないが、部分的にはあり　細礫～巨礫の混入５％程度　円～亜円礫未風化の泥岩、チャート、風化した砂岩

酸化鉄と考えられる明褐色（7.5YR5/8）を呈する膜状の軟結核が上位部分にあり

乾燥するとクラックを生じる。粘着性弱　堅密度堅

流路部分では間層をはさみ三つに分かれた状態で観察される。

Ⅲ層：漸移層　土性区分から二つの層に細分されるが、時間的な前後関係は不明である。

Ⅲ１層

Heavy Clay（重粘土）黒褐（7.5YR3/1）～灰褐色（7.5YR4/2）層界

上：漸変、下：判然

礫の混入は原則としてなし

乾燥するとクラックを生じる。粘着性弱　堅密度すこぶる堅

Ⅲ２層

Sandy Loam（砂壌土）褐色（7.5YR4/3）層界　上下：判然

細礫の混入20％程度　円～亜円礫　風化した堆積岩

乾燥するとクラックを生じる　粘着性なし　堅密度すこぶる堅

Ⅳ２層とは色調で識別される。

Ⅳ層：河川堆積層　土性区分から四つの層に細分されるが、時間的な前後関係は不明である。

Ⅳ１層：細砂と粘土からなる層

細砂主体の層（Ⅳ２層）と粘土主体の層（Ⅳ３層）の互層

Silty Laom~Loam（シルト質壌土～壌土）

にぶい黄褐色（10YR5/4）

礫の混入は原則としてなし　白色を呈する風化軽石らしき細砂の混入あり

図７　基本層序柱状図

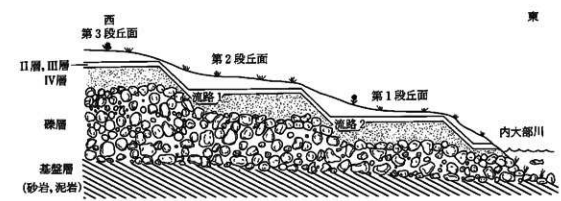


図８　土層模式図

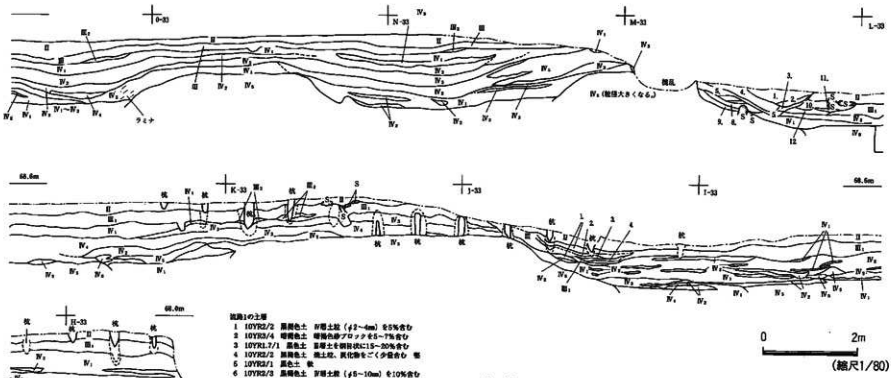


図９　33ラインメインセクション

図８の説明

調査区内には内大部川によって形成された三段の段丘面があり、低い方から順に第１段丘面、第２段丘面、第３段丘面とした。第１、第２段丘面の段丘崖沿いで増水時の水の通り道と思われる流路を検出した。この流路は95、96年度内園６遺跡の調査で検出されたものと同じもので、先の調査で使用された名称を踏襲し、第１段丘面上の流路を流路２、第２段丘面上の流路を流路１とした。

粘着性弱　堅密度軟

厳密にはⅣ2層とⅣ3層に分けられるが、Ⅳ2層の堆積が薄い場合等は両者を包括する層名として用いている。

Ⅳ2層：細砂主体の層

Sandy Loam（砂壌土）にぶい黄褐色（10YR5/4）

礫の混入原則としてなし

粘着性なし　堅密度しょう

Ⅳ3層：粘土主体の層

Heavy Clay（重粘土）にぶい黄褐色（10YR4/3）

礫の混入原則としてなし

粘着性強　堅密度すこぶる堅

Ⅳ4層：斑紋・結核のみられるⅣ層

これの本来の層はⅣ1層とⅣ3層であるが、Ⅳ3層が多い。酸化還元反応によるもの

Silty Loam~Loam~Heavy Clay（シルト質壌土～壌土～重粘土）灰黄褐色（10YR5/2）

斑紋・結核：最大が1cm程度、25%、管状、赤褐色（2.5YR4/8）

粘着性弱～強　堅密度堅

Ⅴ層：砂・礫主体の層

土石流堆積物層　砂30%＋礫70%程度　細礫～巨礫　円～亜円礫　未風化の泥岩、チャート、風化した砂岩等

粘着性なし　堅密度しょう

表1　内園6・3遺跡土層対比表

本年度 内園6		96年度 内園6 98年度 内園3	96年度 内園6B・C地区	95年度 内園6D地区	95年度 内園6A地区	90年度 内園3	遺物の有無
Ⅰ層		Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ～Ⅲ	混入する場合あり
Ⅱ層		Ⅱ	Ⅱ	Ⅱa	Ⅱ－黒、Ⅱ－2	Ⅳ・Ⅴ	包含層(Ⅳ・Ⅴ群)
Ⅲ層	Ⅲ 1	Ⅲ	Ⅲ	Ⅱb	Ⅱ－3	Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ	包含層(Ⅳ群)
	Ⅲ 2	Ⅲ	Ⅲ	Ⅱb（Ⅲa）	Ⅲ	Ⅶ	無遺物層
Ⅳ層	Ⅳ 1	Ⅳ	—	Ⅲb	（Ⅲ）	（Ⅶ）	包含層(Ⅳ群)
	Ⅳ 2	Ⅳ	Ⅲb	Ⅲb	Ⅲ	（Ⅶ）	無遺物層
	Ⅳ 3	Ⅳ	—	Ⅲb	—	（Ⅶ）	包含層(Ⅳ群)
Ⅴ層		Ⅳ	（Ⅳ）	Ⅳ	Ⅳ	—	無遺物層

Ⅳ・Ⅴ層の層界は次のとおりである。

Ⅳ1層とⅣ2層；漸変 Ⅳ2層とⅣ3層；判然 Ⅳ3層とⅣ4層；判然 Ⅳ4層とⅤ層；明瞭

Ⅳ1層とⅣ3層；判然 Ⅳ2層とⅣ4層；判然 Ⅳ3層 と Ⅴ層；明瞭

Ⅳ1層とⅣ4層；判然 Ⅳ2層 と Ⅴ層；明瞭

Ⅳ1層 と Ⅴ層；明瞭

第Ⅰ層は旧国道12号の盛土、及び耕作表土である。後者には縄文時代の遺物の混入が認められた。第Ⅱ層は黒色土で、縄文時代後・晩期を主体とする遺物包含層である。流路では間層をはさむ堆積状況を示しており、細分されることも考えられたが、平面及び間層がみられない断面での認識は、困難であったため分層は行わなかった。また、流路部分に堆積していたものは「流路Ⅱ層」と呼称した。第Ⅲ層は漸移層で、粘質土であるⅢ1層からは主に縄文時代後期の遺物が出土した。第Ⅳ層は細砂と粘土から構成される層である。各層がある程度の厚みを有する場合に、Ⅳ2・Ⅳ3層に細分した。Ⅳ4層は地下水等の影響による酸化還元反応を受けている部分である。第Ⅳ層の粘土部分からは、主に縄文時代後期の土器が出土した。また第3段丘面では、この層中に薄い腐植層が複数認められた。第Ⅴ層は砂・礫から構成される層で、様々な粒径のものがランダムに堆積しているのが認められた。大型重機で掘り下げを試みたが、掘り抜くことはできなかった。数mの厚さで堆積しているものと推測される。過去の調査例同様、今回の調査でも段丘の崖下に流路が二本確認された。流路1はⅣ層ブロックの堆積が認められること、各層の層界が明瞭であることから人為的に埋め戻された可能性がある。一方、流路2は自然堆積の様相を示している。また、本年度の調査区の周辺は、隣接する内園3遺跡を含め、すでに深川市教育委員会により調査が完了している。本年度の基本層序を、過去の調査例に対比させたものを表1に示した。各担当者の見解の相違もあろうが、大方このようにまとめられるであろう。

（末光正卓）

3　整理の方法

(1)土器

現地では、取り上げた遺物について「取上げ台帳」（一次台帳）を作成し、これをもとに整理作業を進めた。水洗して乾燥させた後、時期とランク分類を行って「遺物登録台帳」（二次台帳）に登録し、遺物カードを作成した。また、遺物番号は出土位置を記録した遺物にのみ与えている。注記の内容は、原則として深川市教育委員会の方法を踏襲した。遺跡名の内園6遺跡を「内6」と略記し、発掘区（グリッド名でハイフンなし）あるいは遺構名（遺構略号と番号でハイフンを用いる）、出土層位、遺物番号の順で記入した。層位で流路Ⅱ層のものは「リⅡ」と略した。なお、注記はA、B1、B2、Cランクのものを対象とし、D、E、Fランクのものは、接合作業時に必要に応じて行うこととした。これらの作業が終了した遺物は、遺構出土のものは遺構ごとに収納し、包含層出土のものは時期、ランクごとに分け、それぞれをグリッドごとに収納した。それから現場作業終了後、江別市にある埋蔵文化財センターの整理作業棟に搬送し、本格的な整理作業を開始した。

はじめに土器の接合作業を行った。作業は同じ時期（群単位）のものどうしと、これに未分類のものも含めて行った。ランクではA、B1、B2、Cのものを中心に進めていき、D、E、Fランクのものは必要に応じて用いることとした。Aランクのものは、出土したグリッド（遺構の存在するグリッド）から隣接するグリッド（とそこに位置する遺構）、そして周辺のグリッドへと広げるように接合する破片をさがした。B1、B2ランクは同部位での接合を試み、復原可能な個体の把握に努めた。Cランクのものは出土グリッド（遺構の存在するグリッド）内と隣接するグリッドで接合を行い、あ

る程度破片がまとまったもののうち、復原できる可能性が高いと考えられるものを優先して作業を進めた。掲載する資料は、復原個体はすべて、破片のものは特徴が認識しやすい口縁部や底部を中心に抽出し、実測図、拓影図、写真（6×7サイズのみ）により記録化を行った。また、掲載するものすべてを対象に観察を行い、一覧表を作成した。

また、これらの作業と併行して、集計作業、分布図の作成などを行い、さらに、登録台帳に記載した事項について、コンピューター上のデーターベースに入力した。

整理作業の終了した遺物は北海道教育委員会の「出土品の区分についての基準」等に従い分類、収納した。出土状況記録の精度で1・2級のものと3級のものに区分した。3級としたものは表面採集のものや未注記のものがある。未注記としたものは注記がされていなかったもの、整理作業の段階で器面の剥落などにより出土のあり方に関する情報を得ることができないもの等である。1・2級のものについては、さらに報告書掲載と未掲載のものに分け、それから、遺構ごと、包含層のものは時期、ランク、グリッドごとに収納した。

（末光正卓）

(2)石器［図10・11］

「遺物登録台帳」作成までの作業工程は土器と同じである。整理作業のうち、登録台帳作成までを現場で行い、残りの作業は江別で行った。

包含層の石器は器種ごと、遺構出土の石器はそれぞれの遺構ごとに通し番号入りのカードをつけて1点づつ管理した。報告書に掲載した石器一覧表の「整理№」がこの通し番号と一致する。ただし、「Rフレイク」、「Uフレイク」、「フレイクチップ」、「礫」には個別の番号はつけていない。

報告書掲載遺物の抽出は可能な限り各器種の出土比率に近くなるように行ったが、残存度合いが器種によって異なるため、報告書掲載遺物の器種ごとの比率は必ずしも出土比率を反映していない。

計測は「長さ」、「幅」、「厚さ」、「重さ」について計測し、報告書掲載遺物は実測図上で計測した。「長さ」は最大長とし、「幅」、「厚さ」は互いに直行し、「長さ」を計測した軸に直行する軸で最大値をとる部位を計測した。ただし、石鏃とつまみ付きナイフは「長さ」に茎部分、つまみ部分を含めると欠損値が多くなりすぎるため、それぞれ茎部分、つまみ部分を除いて計測した。欠損部分は残存長を計測し、計測表には（丸括弧）で示した。

登録台帳に計測値・分類変更・石材・細分類を加えたものを、コンピュータ上のデータベースに入力した。報告書に掲載した全ての計測表・集計表はこのコンピュータ上のデータベースをもとに作成した。

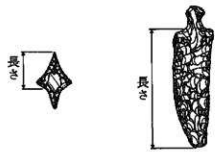


図10　石鏃・つまみ付ナイフ計測模式図

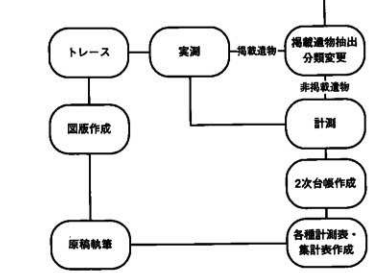


図11　石器整理作業の手順

整理作業の終了した遺物は「出土品の区分についての基準」等に従い分類、収納した。報告書掲載と未掲載のものに分け、未掲載のものはさらに出土状況記録の精度により１・２級のものと３級のものに区分した。収納は報告書掲載と未掲載に大別し、報告書掲載のものは図版毎、未掲載のもののうち遺構出土のものは遺構毎、包含層出土のものは器種毎に収納した。（石井淳平）

(3)遺物と記録類の保管

遺物類は、深川市教育委員会において保存・活用される。

現場及び整理作業で作成した図面・写真・台帳類については、当面は道立北海道埋蔵文化財センターで保管される。

図面類は(1)現場で作成した原図、(2)現場で作成した原図をもとに作成した素図、(3)遺物実測図の３種類である。このうち素図、遺物実測図は原則的には再現性のあるものだが、作成にかかる時間が膨大であること、原図には作成者以外には判読不可能な文字や記号が多用されること、原図の作成は素図の作成を前提行っており、原図だけでは意味をなさないものが存在することから、(1)～(3)は全て保存した。ただし、原図から素図を作成する過程で生じる中間図面は全て廃棄した。

原図は作成者毎に通し番号を打ち、リストを作成した。素図は通し番号を打ち、リストを作成した。遺物実測図は報告書掲載のものは土器、石器毎に報告書掲載順に図面ファイルに保存した。未掲載のものは土器は時期毎、石器は器種毎にわけて図面ファイルに保存した。

写真はフィルム種別毎にアルバムを作成し、保存した。

台帳類は取り上げ台帳（一次台帳）を破棄し、登録台帳（二次台帳）を保存した。さらに登録台帳をもとにデータベースを作成した。データベースの内容は原則的に登録台帳と一致するが、石器は各種計測値をこのデータベースに加えている。また、分類の変更等に伴う登録台帳の修正は行っておらず、修正作業は全てデータベース上で行った。したがって、より正確な内容はコンピュータ上のデータベースに記録されている。

データベースは「ファイルメーカーPro3.0JMacintosh版」で作成した。オリジナルのフォーマットの他、ＣＳＶ形式とＤＢＦ形式でもファイルを保存しており、他のデータベースソフト、表計算ソフトでも読み込むことが可能である。（石井淳平）

4 遺物の分類

(1)土器

出土した土器は、次の二つの基準を用いて分類を行った。

「時期分類基準」

「Ⅰ群」 ：縄文時代早期に属するもの
- a類；貝殻文、条痕文をもつ土器群
- b類；東釧路式系土器群

「Ⅱ群」 ：縄文時代前期に属するもの
- a類；縄文尖底土器群
- b類；円筒土器下層式とそれに併行する在地の土器群

「Ⅲ群」 ：縄文時代中期に属するもの
- a類；円筒土器上層式、サイベ沢Ⅶ式、萩ヶ岡１・２式とそれらと併行する押型文土器
- b類；萩ヶ岡３式（天神山式）、柏木川式、北筒式（トコロ６類）に相当する土器群

「Ⅳ群」 ：縄文時代後期に属するもの
- a類；余市・タプコプ式、入江式に相当する土器群
- b類；ウサクマイC式、手稲式、ホッケマ式に相当する土器群
- c類；堂林式、三ッ谷式、御殿山式に相当する土器群

「Ⅴ群」 ：縄文時代晩期に属するもの
- a類；大洞Ｂ・ＢC式に相当するものとそれに併行する在地の土器群
- b類；大洞C_1・C_2式に相当するものとそれに併行する在地の土器群
- c類；大洞Ａ・A'式に相当するものとそれに併行する在地の土器群

「Ⅵ群」 ：続縄文時代に属するもの

「Ⅶ群」 ：擦文時代に属するもの

「未分類」：時期が判断できないもの

「土製品」

「残存状態に関する分類基準」

この基準は一次整理の段階で、復原される可能性のあるものや、時期等を判断しやすい口縁部、底部の破片を把握するために設定した。また今回は、土器破片そのものの残存状態から遺跡における遺物の二次的な移動について考えることを試みた（Ⅵ章２節参照）。

「Aランク」：同一個体のものがまとまった状態で出土したもの、また、器としての形状を保っている破片

「Ｂ１ランク」：口縁部（口唇部が残存しているもの）の破片

「Ｂ２ランク」：底部（底面が残存しているもの）の破片

「Cランク」 ：胴部の破片

「Dランク」 ：器面（主に外面）が剥離・剥落している破片で、割れ口の残存状態は良好なもの

「Eランク」 ：摩耗している破片で、割れ口が接合に耐えられないもの

「Fランク」 ：百円玉程度以下の小さな破片で、接合に影響がないと考えられるもの

本遺跡ではⅢ群ａ類の押型文が施された土器、Ⅳ群ｂ類のウサクマイC式、手稲式、ホッケマ式、同ｃ類の堂林式、Ⅴ群の後半期に相当する在地の土器が出土した。 （末光正卓）

⑵石器

石鏃

先端部を両側縁からの調整により作り出し、胴部から先端部の縁が直線もしくは突型の曲線を描く石器。石槍とは主に長さで区別し、5㎝以下を石鏃に分類した。

石槍・ナイフ

石槍は先端部を両側縁からの調整により作り出し、胴部から先端部の縁が直線もしくは突型の曲線を描く石器。正しくは槍先または尖頭器と呼称すべきものである。石鏃とは主に長さで区別し、5㎝以上を石槍に分類した。

ナイフは片縁もしくは両縁に両面調整が施された石器をこのように呼称した。

石槍・ナイフという名称はこれらが破損して一部しか残存しないことが多く、その場合両者の識別が困難であることからこのように呼称した。

石錐

両側縁の調整により、錐状の突出した刃部をつくりだした石器。つまみ状の柄部をもつものが多い。石鏃、石槍、スクレイパーなど尖った先端部を持つ器種は他にも存在するが、形態が左右対称であること、部位による刃部の最大径の違いが相対的に小さいことにより、他の器種と区別した。

つまみ付きナイフ

小さなつまみ状の突起をもち主に片面に急斜度調整が施された石器。正しくはつまみ付きスクレイパーと呼称すべきものであるが、慣習的にこの名称を使用した。

スクレイパー

急斜度調整された刃部をもつ石器。

石器素材

形状は楕円形または卵形で、全体を打ち欠いて形状を整えているが、刃部と呼べる部分が存在しない石器。一見するとラウンドスクレイパーのようにみえる。用途が推定できないため素材という名称を用いたが、製作可能な石器が限定されること、遺跡から普遍的に出土する石器ではないことなど素材だとすると説明の付かない事実も多い。

両面に調整が施されるもの、片面のみに施されるもの、剥片の縁を潰しただけでほとんど加工のないもの、の三種類に細分類した。

Rフレイク

調整が施された剥片のうち、定型的な刃部をもたない石器。

Uフレイク

使用痕をもつ剥片。

石斧
　片岩・泥岩を素材とし研磨により刃部を作り出した石器。全面に研磨が施されるもの、刃部のみに研磨が施されるものがある。また、打ち欠きによって刃部を作り出したものも存在する。

たたき石
　敲打痕のある石器のうち人間がハンマーのように手でもって打ち付けることが可能な大きさと重量を持つ石器。

すり石
　すり痕のある石器のうち人間が手でもって擦ることが可能な大きさと重量を持つ石器。

石皿・台石
　敲打痕のある石器のうち人間がハンマーのように手でもって打ち付けることが困難な大きさと重量を持つ石器と、すり痕のある石器のうち人間が手でもってすることが困難な大きさと重量を持つ石器。石皿・台石という名称はそれぞれの特徴である敲打痕とすり痕を両方持つ石器が多く、両者の識別が困難であることからこの名称を使用した。また、石皿の中には砥石としての使用されていたと考えられるものが多く存在するが、石皿、砥石ともにすり痕を持つ点では共通し、両者の分類は使用痕の検討を経た上でなければ困難であると判断したため、すり痕を持つ石器は全て石皿に分類した。

フレイクチップ
　加工痕、使用痕をもたない剥片。

石核
　大きなネガティブ剥離面がいくつも形成されている石器のうち、定型的な石器に分類できないもの。

原石
　全く加工がなされていないか、外面の半分以上に自然面を残す黒曜石。

棒状原石
　原石のうち、自然面がいくつかの直線的な剥離面で構成され、細長い棒状の形態をとるもの。

石斧原材
　加工痕のない礫のうち、石斧に用いられるものと同じ石材を使用し、大きさ、形状が石斧によく似たもの。内園６遺跡では石斧の多くが、近隣で採れる緑色の片岩製であるため、石斧原材もほとんどがこの石である。

礫
　加工痕のない自然礫。報告では人為的に移動させられたと判断した礫のみを扱った。集石遺構から出土した自然礫などがこれにあたる。　（石井淳平）

Ⅳ　遺構と出土遺物

1　概要［図12・13］

土壙28基、柱穴または杭跡48基、焼土15カ所、集石遺構４カ所、石器堆納遺構１カ所を検出した。遺構は第２段丘面上に多く分布する。出土遺物の主体をしめる後期中葉の時期には河床が現在よりも高く、第１段丘面は氾濫源であった可能性が高い。そのため後期中葉の段階では主な活動の場は第２段丘面となり、第２段丘面に多くの遺構が残ったものと考えている。

土壙は断面形が浅い皿状や椀状のものが多い。土器や石器がまとめて出土するものもあり、これらは墓壙の可能性がある。

柱穴は第２段丘面に多く分布する。掘方を持つものと杭状のものとがあり、両者の分布域や配列に差はない。直径は10～20cm、確認面からの深さは最も深いもので約45cmである。明確な配列を見いだすことはできなかったが、限られた範囲に分布すること、焼土と柱穴の分布域が重なることから平地式住居の支柱である可能性が高い。

焼土はその場で形成されたものと、廃棄されたものがある。廃棄された焼土は３カ所で、残りはその場で形成されたものである。

集石は全て流路１内で検出した。S－4、5は方形もしくは円形に礫が並び、意図的に礫が配置された可能性が高い。S－5は下部に土壙が伴い、配石を持つ墓壙である可能性が高い。

石器素材堆納遺構は直径15cm程度の範囲から、調整の施された黒曜石製の剥片が31点出土したものをこのように呼称した。

また、遺構ではないが第１、第２段丘面でそれぞれ一条づつ流路を検出した。この流路は95、96年度内園６遺跡の調査で検出されたものと同じもので、先の調査で使用された名称を踏襲し、第１段丘面上の流路を流路２、第２段丘面上の流路を流路１とした。第２段丘面で検出した流路１は、(1)堆土にⅣ層土をブロック状に含むこと、(2)流路２のような黄褐色砂と黒色土の互層が観察できないこと、(3)土層の境界が明瞭である（漸移的ではない）ことから、短時間のうちに人為的に埋め戻された可能性がある。さらに、流路１の底面は何カ所かで広く削られたような痕跡があり、底面に堆積した土砂を除去していた可能性がある。流路１そのものは自然に形成されたものだが、縄文時代後期の段階で人為的な改変を受けている可能性がある。

2　土壙［図14・15　図版4～5－7］

柱穴・杭跡以外の掘り込みを持つ遺構を全て土壙とした。したがってその性格は様々なものがある。土壙は形状からその性格を特定することは困難で、堆土中の遺物の出土状況から推測した。

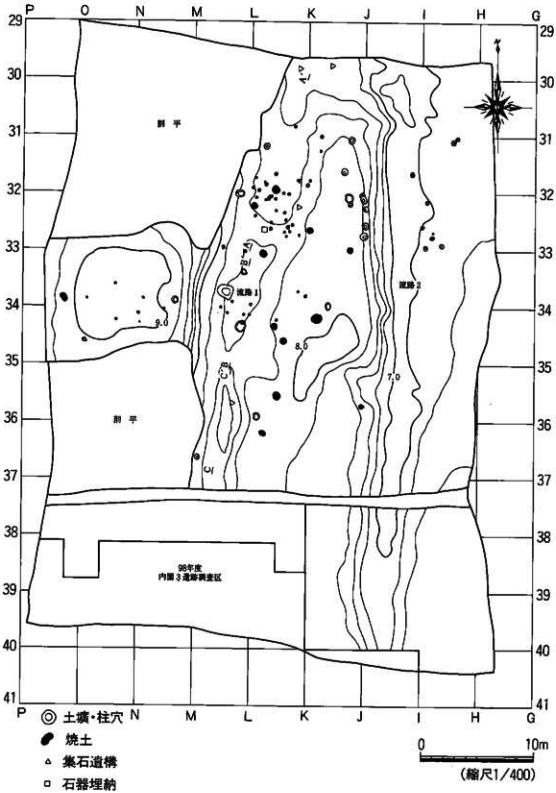
P－19

概要：流路１の落ち込み際で検出した。Ⅳ群ｂ類に属する比較的大きな土器片や石器が出土しており、これらは意図的に埋められたものと考えている。遺構の性格は墓、ゴミ捨て穴の可能性がある。

時期：縄文時代後期中葉以降

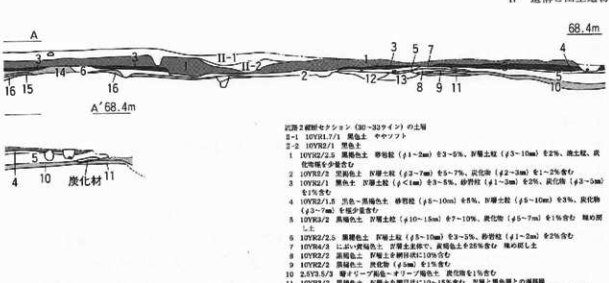
P－20

概要：第３平坦面の崖際で検出した。断面形は浅い皿状である。堆土は黒色に近く、比較的新しい時期の遺構である可能性がある。時期のわかる遺物は出土していないが、付近の包含層からは縄文時代



P
O
N
M
L
K
J
I
H
G
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
削 平
削 平
流路1
流路2
9.0
8.0
7.0
98年度
内閣3遺跡調査区
土壙・柱穴
焼土
集石遺構
石器埋納
0
10m
(縮尺1/400)

図12　遺構配置図



流路2縦断セクション（30～32ライン）の土層
Ⅱ-1　10YR1.7/1　黒色土　ややソフト
Ⅱ-2　10YR2/1　黒色土
1　10YR2/2.5　黒褐色土　砂粗粒（φ1～2mm）を3～5%、Ⅳ層土粒（φ3～10mm）を2%、焼土粒、炭化物粒を少量含む
2　10YR3/2　黒褐色土　Ⅳ層土粒（φ3～7mm）を5～7%、炭化物（φ2～3mm）を1～2%含む
3　10YR2/1　黒色土　Ⅳ層土粒（φ<1mm）を3～5%、砂質粒（φ1～2mm）を2%、炭化物（φ3～5mm）を1%含む
4　10YR2/1.5　黒色～黒褐色土　砂質粒（φ5～10mm）を5%、Ⅳ層土粒（φ5～10mm）を3%、炭化物（φ3～7mm）を微少量含む
5　10YR3/2　黒褐色土　Ⅳ層土粒（φ10～15mm）を7～10%、炭化物（φ5～7mm）を1%含む　軸の固い土
6　10YR2/2.5　黒褐色土　Ⅳ層土粒（φ5～10mm）を3～5%、砂質粒（φ1～2mm）を2%含む
7　10YR4/3　にぶい黄褐色土　Ⅳ層土主体で、黄褐色土を25%含む　軸の脆い土
8　10YR2/2　黒褐色土　Ⅳ層土を斑状に10%含む
9　10YR2/2　黒褐色土　炭化物（φ5mm）を1%含む
10　2.5Y3.5/3　暗オリーブ褐色～オリーブ褐色土　炭化物を1%含む
11　10YR3/2　黒褐色土　Ⅳ層土を斑状に10～15%含む　Ⅳ層と黒色層との漸移層
12　10YR3.5/3　暗褐色～にぶい黄褐色土　Ⅳ層土粒（φ2～5mm）を15～20%、炭化物を微少量含む
13　10YR3/3　暗褐色土　Ⅳ層土粒（φ2～3mm）を10～15%、炭化物を微少量含む
14　10YR2/2　黒褐色土　Ⅳ層土粒（φ5～15mm）を5～10%、炭化物、焼土粒（φ3～4mm）を1%含む
15　10YR3/3　暗褐色土　Ⅳ層土主体で、暗褐色土を斑状に10～20%含む
16　10YR3/2.5　黒褐色～暗褐色砂質土　Ⅳ層土主体

流路2縦断セクション（33～35ライン）の土層
1　10YR2.5/3　黒褐色～暗褐色土　Ⅳ層砂ブロック（φ5mm）を5～10%、炭化物を微少量含む
2　10YR3/1　黒色土　砂質粒（φ3～7mm）を3%含む
3　10YR2.5/3　黒褐色～暗褐色土　黄褐色砂質土と黒褐色土の互層　各層幅5～10cm　4～5枚で1堆積

流路2縦断セクション（35～37ライン）の土層
1　10YR2/3　黒褐色土　Ⅳ層粗粒の砂質土粒（φ5～15mm）を10～15%含む
2　10YR2/2　黒褐色土　砂質粒（φ2～5mm）を15%含む
3　10YR2.5/3　黒褐色～暗褐色土　Ⅳ層粗粒の砂質土　○　φ5mmを5～10%、炭化物を微少量含む
4　10YR2.5/3　黒褐色～暗褐色粘質土とⅣ10YR4.5/4　褐色～にぶい黄褐色砂質土の互層　層厚は2～10cm、5～6回堆積する

図13　流路1縦断セクション

後期に次いで晩期の遺物が多く出土していることから、縄文時代晩期の可能性がある。遺構の性格は不明。

時期：縄文時代後期中葉以降

P－35

概要：第2平坦面上で検出した。Ⅳ群b類に属する土器が出土している。遺構の性格は不明。

時期：縄文時代後期中葉以降

P－36

概要：第2平坦面上で検出した。Ⅳ群b類に属する土器が出土している。遺構の性格は不明。

時期：縄文時代後期中葉以降

P—38

概要：流路１の西側斜面で検出した。埋土は粘質で、埋め戻された可能性がある。時期のわかる遺物は出土していない。遺構の性格は不明。

時期：特定できない

P—40

概要：流路１内で検出した。埋土はⅢ層土、Ⅳ層土を多く含み、埋め戻された可能性がある。時期のわかる遺物は出土していない。遺構の性格は不明。

時期：特定できない

P—41

概要：第２平坦面上で検出した。Ⅲ層を掘り下げ中に土器がまとまって出土したため、遺構の存在に気づいた。Ⅲ、Ⅳ層土で埋め戻されており、周囲の土と区別がつきにくかった。埋土中にほとんど黒褐色土が含まれず、意図的にⅢ、Ⅳ層土のみで埋め戻した可能性がある。遺物は埋土の上部からⅣ群ｂ類に属する完形に近い土器が三個体出土している。底面付近から遺物は出土していない。遺構の形状は楕円形で、確認面からの深さは約35cmである。遺構の性格は墓壙の可能性が高い。

時期：縄文時代後期中葉

P—42

概要：流路１の西側斜面で検出した。断面形は浅い皿状である。時期のわかる遺物は出土していない。遺構の性格は不明。

時期：特定できない

P—43

概要：流路１の底面付近で検出した。遺構の埋土と流路１の埋土の区別が付きにくく、実際の掘り込み面は検出面より20～30cm高かったと考えている。断面形は浅い皿状である。Ⅳ群ｂ類の土器が出土している。遺構の性格は不明。

時期：縄文時代後期中葉以降

P—44

概要：第１段丘面上で検出した。土壙に分類したが、柱穴の可能性もある。Ⅴ群の土器が出土している。遺構の性格は不明。

時期：縄文時代晩期後半以降

P—45

概要：第１段丘面上で検出した。断面形は浅い皿状である。時期のわかる遺物は出土していない。遺構の性格は不明。

時期：特定できない

P—49

概要：流路１の底面付近で検出した。流路１の水性堆積層を切って掘り込まれ、人為堆積層に切られている。実際の掘り込み面は検出面より10cm程度高い。埋土はⅣ層土粒を含む均質な土で埋め戻しの可能性がある。時期のわかる遺物は出土していないが、縄文時代後期中葉に堆積したと考えている流路１の人為堆積層に切られることから、縄文時代後期中葉以前である。遺構の性格は不明。

時期：縄文時代後期中葉以前

P—59

概要：第２段丘西側の崖上で検出した。断面形は浅い皿状でP—60、61、62、63、64と規模、形状、

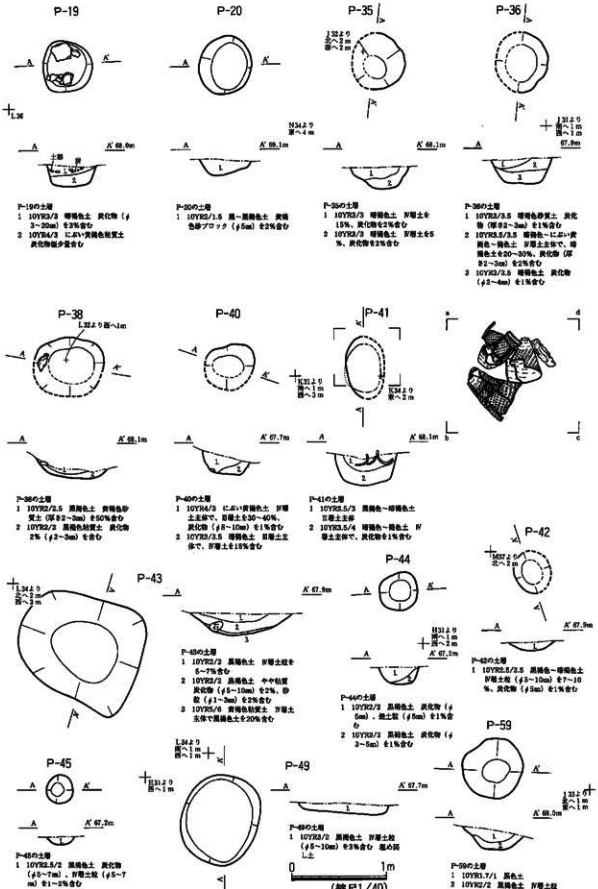


図14　土壙(1)

埋土の様子が似通っており、また第2段丘西側の崖上に並んでいることから、これらと同じ性格の遺構である可能性が高い。Ⅳ群b類に属する土器が出土している。遺構の性格は不明。
時期：縄文時代後期中葉以降

P—60

概要：第2段丘西側の崖上で検出した。P—59、61、62、63、64と規模、形状、埋土の様子が似通っており、これらと同じ性格の遺構である可能性が高い。Ⅳ群b類に属する土器が出土している。遺構の性格は不明。
時期：縄文時代後期中葉以降

P—61・62

概要：第2段丘面の東側で検出した。どちらも断面形は浅い皿状で、P—61がP—62に切られる。P—59、60、63、64と規模、形状、埋土の様子が似通っており、これらと同じ性格の遺構である可能性が高い。時期のわかる遺物は出土していない。遺構の性格は不明。
時期：特定できない

P—63

概要：第2段丘西側の崖上で検出した。P—59、60、61、62、64と規模、形状、埋土の様子が似通っており、これらと同じ性格の遺構である可能性が高い。時期のわかる遺物は出土していない。
時期：特定できない

P—64

概要：第2段丘西側の崖上で検出した。同じような規模・形状のピットが切り合う。どちらもP—59、60、61、62、63と規模、形状、埋土の様子が似通っており、これらと同じ性格の遺構である可能性が高い。遺構の性格は不明。
時期：特定できない

P—66

概要：第1段丘面上で検出した。浅い土壙で、埋土中にⅣ群b類に属する土器片を多量に含む。土器片はいずれも小片で、細かく砕いた後、土壙内に廃棄されたものである。遺構の性格は土壙の直径が約30cm強と小さいことから、墓ではなくゴミ捨て穴の可能性が高い。
時期：縄文時代後期後葉

P—67

概要：流路1内で検出した。断面形は浅い皿状で、土壙内には口縁部を打ち欠いたⅣ群b類に属する深鉢、スクレイパー等が出土している。これらは底面付近から出土しており、意図的に土壙内に埋納されたものと考えている。遺構の性格は墓壙、ゴミ捨て穴の可能性がある。
時期：縄文時代後期中葉

P—68

概要：第1平坦面で検出した。時期のわかる遺物は出土していない。遺構の性格は不明。
時期：特定できない

P—70

概要：第1段丘面上で検出した。埋土からⅤ群に属する長径10～15cm程度の土器片が数枚重なって出土した。遺構の性格は柱穴の可能性も高いが、断定できないので土壙とした。
時期：縄文時代晩期後葉以降

P—71

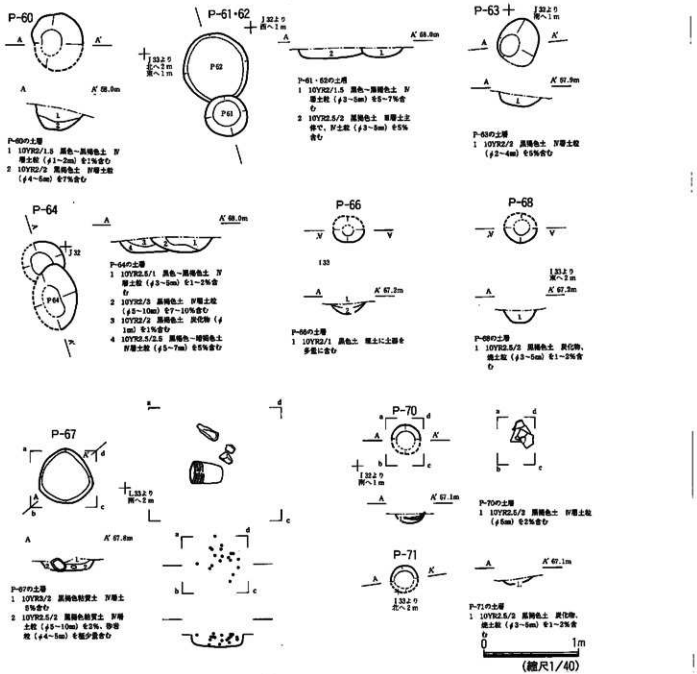


図15　土壙(2)

概要：第１段丘面上で検出した。断面形は浅い皿状である。時期のわかる遺物は出土していない。遺構の性格は不明。
時期：特定できない

3　柱穴・杭跡［図16～18　図版５－８～６］

第２段丘面に多く分布し、第３段丘面にも密度は低いが、一定数分布する。第２段丘面では特にK－31、32グリッドに集中して分布する。掘方をもつ柱穴と杭跡が存在し、両者は主に底面の形状で区別した。底面が平らもしくは丸いものを掘方をもつ柱穴とし、底面が尖っているものを杭跡とした。どちらとも判断のつかないものを「柱穴または杭跡」とした。

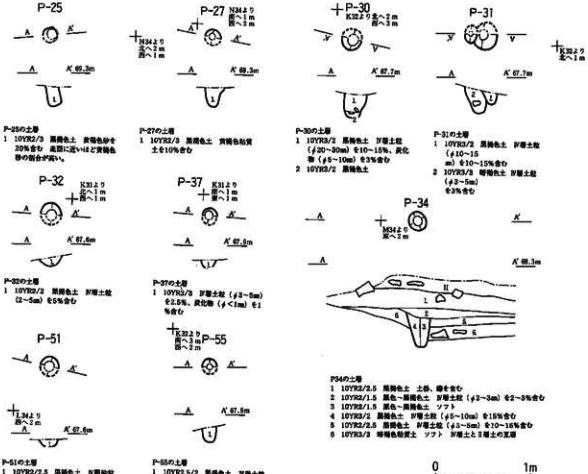

P-25
K' 69.3m
P-25の土層
1 10YR2/3 黒褐色土 炭化物が十20%含む 底面に近いほど炭化物の割合が高い。
P-27
K' 69.3m
P-27の土層
1 10YR2/3 黒褐色土 炭化物も少し土を10%含む
P-30
K' 67.7m
P-30の土層
1 10YR3/2 黒褐色土 ソフト土粒（φ20~30m）を10~15%、炭化物（φ5~10m）を3%含む
2 10YR3/2 黒褐色土
P-31
K' 67.7m
P-31の土層
1 10YR3/2 黒褐色土 N'層土粒（φ10~15m）を10~15%含む
2 10YR3/3 暗褐色土 N'層土粒（φ3~5m）を3%含む
P-32
K' 67.6m
P-32の土層
1 10YR2/2 黒褐色土 N'層土粒（2~5m）を5%含む
P-37
K' 67.0m
P-37の土層
1 10YR3/3 N'層土粒（φ3~5m）を2.5%、炭化物（φ<1m）を1%含む
P-34
K' 68.3m
P54の土層
1 10YR2/2.5 黒褐色土 土器、礫を含む
2 10YR2/1.5 黒色~黒褐色土 N'層土粒（φ2~3m）を2~3%含む
3 10YR2/1.5 黒色~黒褐色土 ソフト
4 10YR2/2 黒褐色土 N'層土粒（φ5~10m）を15%含む
5 10YR2/2.5 黒褐色土 N'層土粒（φ3~5m）を10~15%含む
6 10YR3/3 暗褐色砂質土 ソフト N'層土と1層土の混層
P-51
K' 67.6m
P-51の土層
1 10YR2/2.5 黒褐色土 N'層砂粒を5~7%含む
P-55
K' 67.5m
P-55の土層
1 10YR2.5/2 黒褐色土 N'層土粒（φ5~10m）を10%、炭化物（φ5m）を2%、焼土粒（φ5m）を微少量含む
0 1m
（縮尺1/40）
P-57
K' 67.7m
P-57の土層
1 10YR3/2 黒褐色土 N'層土粒（φ2~3m）を5%、焼土粒（φ3m）を粒少量含む
2 10YR2/3 黒褐色土 N'層土粒（φ2~3m）を7%、炭化物（φ3~4m）を2~3%、焼土粒（φ5m）を粒少量含む
P-65
K' 67.8m
P-65の土層
1 10YR3/2 黒褐色土 N'層土粒（φ3~5m）を5%含む
2 10YR3/2 黒褐色土 N'層土粒（φ3~7m）を15%含む
3 10YR3/2 黒褐色土 N'層土粒（φ5~10m）を5~7%含む
P-73
K' 67.8m
P-73の土層
1 10YR3.5/3 黒褐色~K'黄褐色土 炭化物（φ0.5~1m）を粒少量含む
P-74
K' 68.1m
P-74の土層
1 10YR2/3 黒褐色粘質土 N'層土粒（φ2~5m）を2~3%含む
2 10YR2/2.5 黒褐色土 N'層土粒（φ3~5m）を3%含む
P-75
K' 67.8m
P-75の土層
1 10YR2.5/2 黒褐色土 N'層土粒（φ5m）を5~7%含む
P-76
K' 67.7m
P-76の土層
1 10YR2.5/2 黒褐色土 炭化物（φ2~3m）を1%含む
P-79
K' 67.6m
P-79の土層
1 10YR2.5/2 黒褐色土 N'層土粒（φ3~4m）を5~10%含む
P-81
K' 67.6m
P-81の土層
1 10YR2/2.5 黒褐色土 N'層土粒（φ5~7m）を7~10%含む

図16 柱穴・杭跡(1)

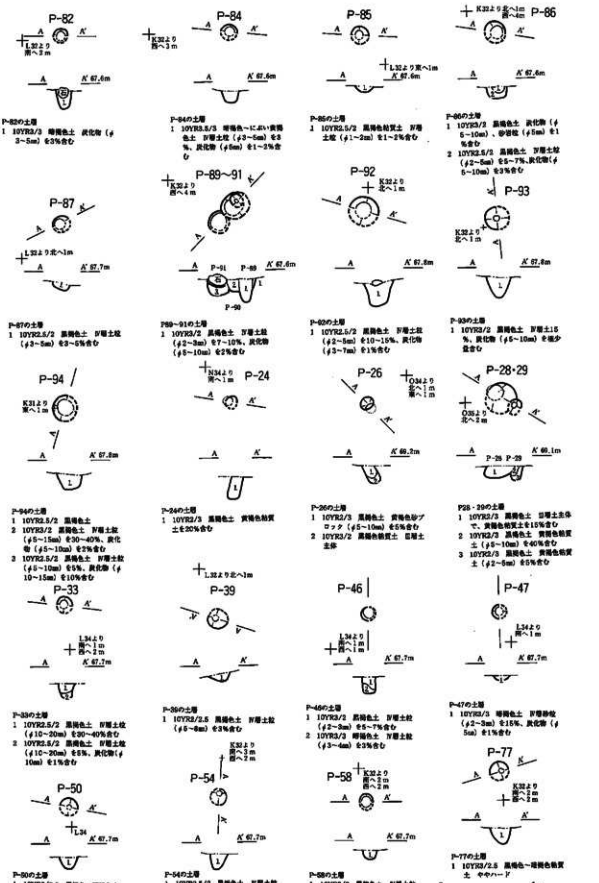
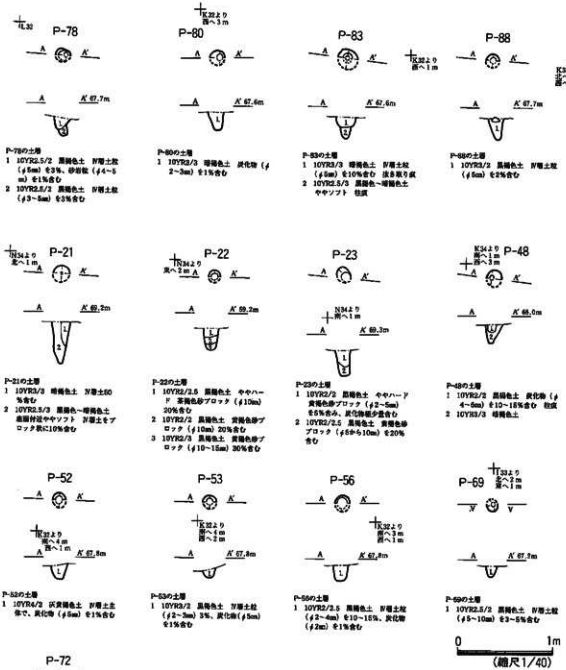

P-82
P-84
P-85
P-86
P-87
P89～91
P-92
P-93
P-94
P-24
P-26
P-28・29
P-33
P-39
P-46
P-47
P-50
P-54
P-58
P-77
0
1m
(縮尺1/40)

図17　柱穴・杭跡(2)



P-78の土層
1 10YR2.5/2 黒褐色土 N層土粒（φ5mm）を3%、砂粒粒（φ4～5mm）を1%含む
2 10YR2.5/2 黒褐色土 N層土粒（φ3～5mm）を3%含む

P-80の土層
1 10YR2/3 暗褐色土 炭化物（φ2～3mm）を1%含む

P-83の土層
1 10YR3/3 暗褐色土 N層土粒（φ5mm）を10%含む 炭多量方式
2 10YR2.5/3 黒褐色～暗褐色土 ややソフト 柱痕

P-88の土層
1 10YR3/2 黒褐色土 N層土粒（φ5mm）を2%含む

P-21の土層
1 10YR3/3 暗褐色土 N層土粒 5%含む
2 10YR2.5/3 黒褐色～暗褐色土 基盤付近ややソフト N層土をブロック状に10%含む

P-22の土層
1 10YR2/2.5 黒褐色土 ややハード 茶褐色砂ブロック（φ10mm）20%含む
2 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色砂ブロック（φ10mm）20%含む
3 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色砂ブロック（φ10～15mm）30%含む

P-23の土層
1 10YR2/2 黒褐色土 ややハード 黄褐色砂ブロック（φ2～5mm）を5%含み、炭化物細少量含む
2 10YR2/2.5 黒褐色土 黄褐色砂ブロック（φ5から10mm）を20%含む

P-48の土層
1 10YR2/2 黒褐色土 炭化物（φ4～5mm）を10～15%含む 柱痕
2 10YR3/3 暗褐色土

P-52の土層
1 10YR4/2 灰黄褐色土 N層土主体で、炭化物（φ5mm）を1%含む

P-53の土層
1 10YR3/2 黒褐色土 N層土粒（φ2～3mm）3%、炭化物（φ5mm）を1%含む

P-56の土層
1 10YR2/2.5 黒褐色土 N層土粒（φ2～4mm）を10～15%、炭化物（φ2mm）を1%含む

P-69の土層
1 10YR2.5/2 黒褐色土 N層土粒（φ5～10mm）を3～5%含む

P-72の土層
1 10YR3/2 黒褐色土 N層土粒（φ10～15mm）、炭化物（φ10mm）を10%含む
2 10YR2.5/3 黒褐色～暗褐色土 黒褐土、N層土を10%含む
3 10YR2.5/3 黒褐色～暗褐色土 N層土主体

図18 柱穴・杭跡(3)

柱穴・杭跡には円形や方形などの明確な配列は確認できなかったが、限られた範囲に分布すること、焼土と柱穴の分布域が重なることなどから、これらは平地式住居の支柱であると考えている。

柱穴に分類したものはP—25、P—27、P—30～P—32、P—34、P—37、P—51、P—55、P—57、P—65、P—73～P—76、P—79、P—81、P—82、P—84～P—87、P—89、P—90～P—93、P—94である。P—34は34ラインのグリッド境界の断面で検出したもので、流路１堆積層の中位から掘り込まれていることを確認した。後述する焼土の検出レベルもおよそこの付近であることから、流路１内で検出した他の多くの遺構の掘り込み面も流路１堆積層の中位であると考えている。

柱穴または杭跡に分類したものはP—24、P—26、P—28、P—29、P—33、P—39、P—46、P—47、P—50、P—54、P—58、P—77、P—78、P—80、P—83、P—88である。

杭跡に分類したものはP—21～P—23、P—48、P—52、P—53、P—56、P—69、P—72である。

柱穴と杭跡で分布域に差はないようである。

4　焼土［図19］

第２段丘面に多く分布し、第１、第３段丘面にも密度は低いが、一定数分布する。その場で形成されたものと、廃棄されたものがある。廃棄された焼土はF—46、F—47、f—49で、残りはその場で形成されたものである。F—51、F—54は柱穴・杭跡の分布の中心近くにあり、住居に伴う炉跡であった可能性が高い。また、F—51は赤色化層中に骨片を含む。

5　集石遺構［図20～23　図版７］

集石は全て流路１内で検出した。S—４は円形、５は方形に礫が並び、意図的に礫が配置されたものである。S—５は下部に土壙が伴い、配石を持つ墓壙である可能性が高い。一方、S—６、７は自然の落ち込みに土器片や礫を廃棄したもので意図的に礫が並べられたものではない。

４つの集石遺構の時期は、⑴流路１内で検出されていること、⑵時期のわかる遺物ではⅣ群の土器が出土していることから縄文時代後期中葉と考えている。

S—４

概要：流路１の底面付近で検出した。礫、土器片が直径約1.5ｍの環状に配置されていた。集石の半分はセクションベルト内に残されていたため、検出と作図は２回に分けて行った。図面を１枚に統合する過程で、集石が環状に配置されていることに気づいた。出土層位は流路１底面に堆積する水性堆積層の上面で、流路に廃棄が行われ始めた最初の段階に集石が行われたものと考えている。Ⅳ群の土器が出土している。

時期：縄文時代後期中葉

S—５

概要：流路１の中位で検出した。礫が方形に配置されており、他の集石と比較して礫の配置は規格性が高い。配石遺構と呼ぶべきものである。配石の下で土壙を検出し、礫はこの土壙の縁を型取るように配置されていた。出土遺物は図面上では見えていないが、配石の中に石皿が１点混入し、土壙中からスクレイパー１点が出土した。時期のわかる遺物は出土していないが、配石をもつ土壙は後期前葉～中葉の時期に北海道から東北地方までの地域で多くみられること、本遺跡出土遺物の主体は後期中葉であることから、遺構の時期は後期中葉に属すると考えている。

時期：縄文時代後期中葉

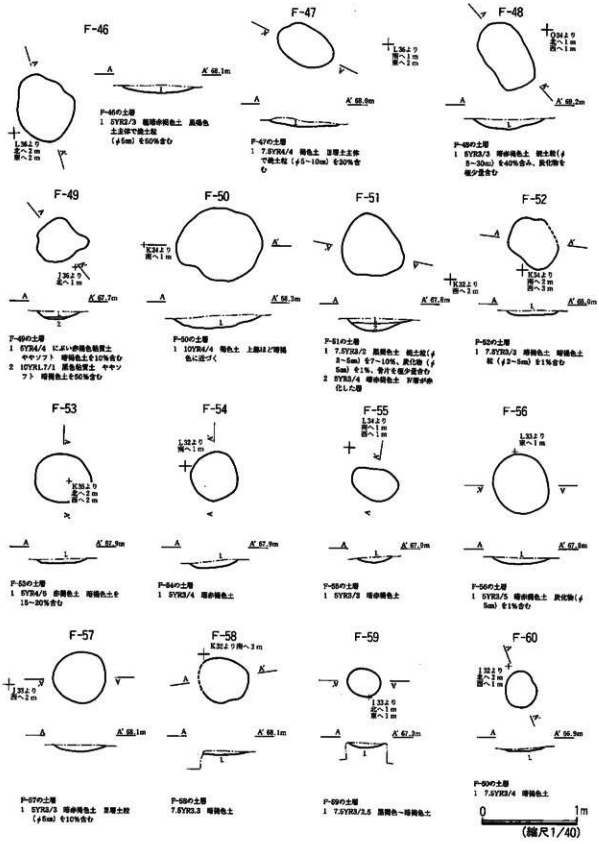

F-46
F-47
F-48
F-49
F-50
F-51
F-52
F-53
F-54
F-55
F-56
F-57
F-58
F-59
F-60
0
1m
(縮尺1/40)

図19　焼土

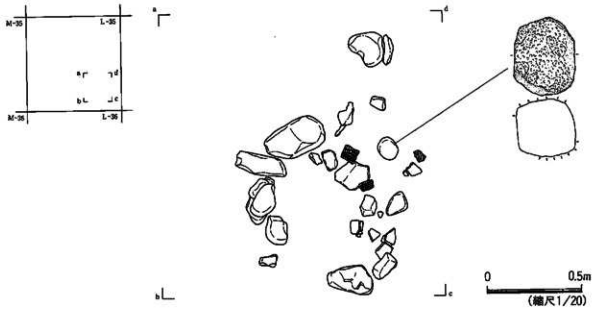


図20 集石遺構 4

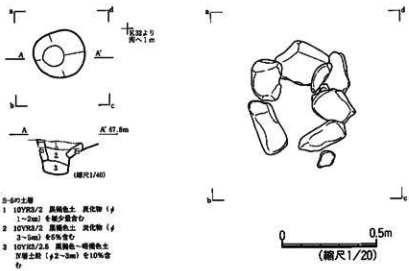


図21 集石遺構 5

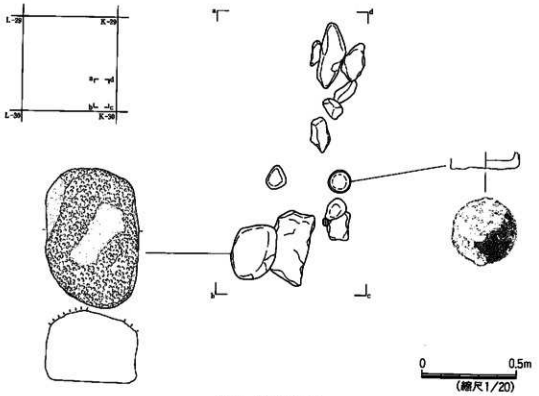


図21　集石遺構6

S—6

概要：調査区北側では流路1が若干落ち込み、S—6はこの落ち込みの底面付近で検出した。礫の配置に明確な意図は感じられず、落ち込みに土器片や礫を集中的に廃棄したものと考えている。Ⅳ群に属する土器片が出土している。

時期：縄文時代後期中葉

S—7

概要：J—29グリッドの96年度調査区との境界付近に深さ10~20cmの落ち込みがあり、S—7はこの落ち込みの底面付近で検出した。落ち込みのほぼ全面に土器片や礫片が廃棄されていた。S—6と同様、礫の配置に明確な意図は感じられず、落ち込みに土器片や礫を集中的に廃棄したものと考えている。

時期：縄文時代後期中葉

図23　集石遺構7

6　石器埋納［図24］

石器埋納は直径15cm程度の範囲から、調整の施された黒曜石製の剥片が31点出土したものをこのように呼称した。流路１の底面付近で検出し、石器を全て取り上げた後に埋納遺構だと気づいたため、出土状況は明らかではない。周辺を精査したが、掘り込みは確認できなかった。本来は掘り込みがあったが、流路１の埋土と区別できずに見過ごした可能性がある。埋納されていた石器は長径約4.5cm、短径約3.2cm、厚さ約0.8cm程度の円形または楕円形の剥片石器で、縁辺は形を整えるための調整が施されている。同様の石器埋納遺構は平成10年度の内園３遺跡でも検出されており、「石器素材埋納」として報告されている。二つの遺構は直線距離で、約60m離れている。こちらは出土状況が明らかで、ピット内に埋納したのではなく、くぼみを利用して石器を埋納したようである。

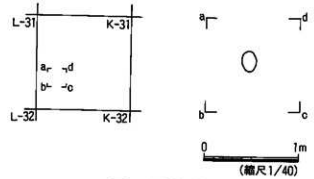


図24　石器埋納

（石井淳平）

7　遺構出土の土器［図25～27　表２・３　図版８～９―４・10～13］

土壙出土の土器

P―19出土の土器

１は、わずかに内湾する口縁部から、ゆるやかに底部へとつながる器形を呈する浅鉢である。口縁部と胴部下位は無文で、丹念にミガキが施され、胴部中位に文様帯を有する。ＬＲ斜行縄文に複数の平行する沈線文を施し、これらのそれぞれは上下のものとつなぐように弧状の沈線文が描かれている。ただし、最上段のものにはこの沈線文は認められない。Ⅳ群ｂ類の手稲式に相当すると考えられる。

P―35出土の土器

６は頸部である。胴部上位には曲線的な沈線文が施され、それに区画された中には、条の傾きが異なる縄文が施される。Ⅳ群ｂ類のウサクマイＣ式に相当すると考えられる。

P―36出土の土器

７は頸部で、交互に施された斜めの沈線文が観察される。Ⅳ群ｂ類のウサクマイＣ式に相当すると考えられる。

P―41出土の土器

２は直立気味の口縁部からほぼ直線的に底部へとすぼまる器形を呈する。器面にはＬＲ原体による施文がみられ、胴部下位は無文である。また、下位近くでは条が横走気味である。３は若干内湾気味の口縁部から底部へと直線的にすぼまる器形を呈する。口縁部には、横環する沈線文に区画された幅の狭い無文帯を有する。その下はＬＲ斜行縄文が施され、さらに下位は無文である。２・４に比べて、地文の条が横走気味にならないこと、胴部下位の無文帯が広いこと、上げ底であるという差異が認められる。胴部上位に一対の補修孔が観察される。４は胴部中位以下が残存する。器面にはＬＲ原体に

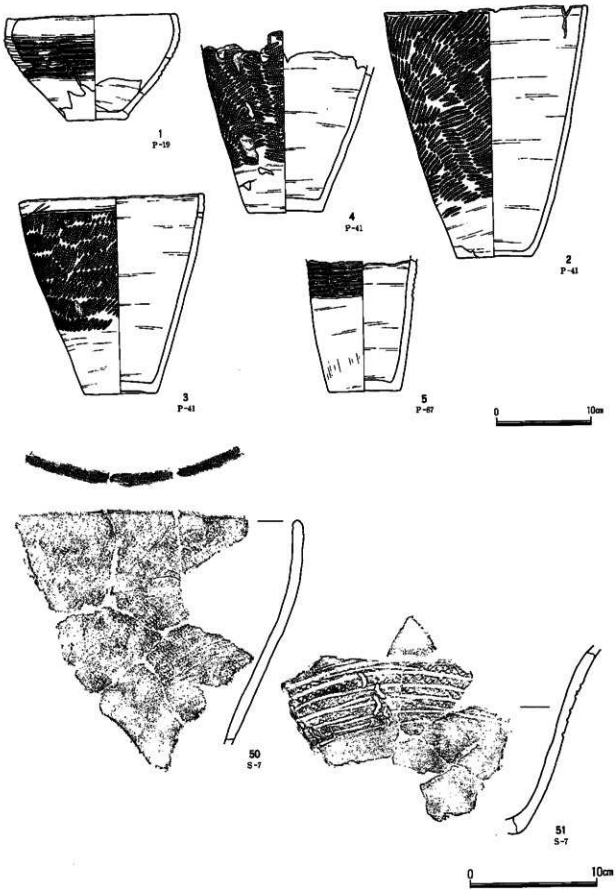


図25　遺構出土土器(1)

より地文が施され、下位は横走気味である。また、胴部中位にあたる割れ口には人為的なものと思われる「切り込み」、あるいは「孔」らしき痕跡が2カ所認められる。これらは一般的に言われている補修孔とは、その形状が異なっている。胴部中位より上部分が人為的に除かれた可能性が考えられる。2～4はⅣ群b類の手稙式に相当すると考えられる。

8は口縁部で、二本組の沈線文が縦横に施される。9はRL斜行縄文地に平行する沈線文が施される。破片上部の内面はゆるく屈曲しており、器形が変化する部分と判断される。10は胴部で、器面にはLR斜行縄文が施される。8、10はⅣ群、9はⅣ群b類の手稙式にそれぞれ相当すると考えられる。

P－43出土の土器

11は頸部で、無文帯がみられる。Ⅳ群b類のウサクマイC式に相当すると考えられる。12は複数の沈線文が施される。Ⅳ群b類の手稙式に相当すると考えられる。

P－44出土の土器

13は口縁部で、LR原体による縦走気味の縄文が施される。V群に相当すると考えられる。

P－60出土の土器

14は胴部下位の無文部分で、Ⅳ群b類と考えられる。15は摩耗している。拓影図では表現しきれなかったが、縦走する条が観察される。V群に相当するものであろう。

P－66出土の土器

16はLR原体で縄線文が複数施された後、RL原体により地文が施される。17は摩耗が著しいが、RL原体による縄線文が施される。18の口唇部にはRL原体による刻み、器面には貫通する孔が施される。19の口唇部には1段Rの撚糸による刺突文が施され、外面にかけての角にLRの原体による刻みが施される。20にはLR縦走縄文が観察される。21・22は底部である。21は丸底気味のもので、RL原体による施文がみられる。22はRL原体による縄文と横環する沈線文が一本施される。23は広い無文部分を有し、地文施文部分とは段差がある。24はLR斜行縄文が縦走気味に施される。25は注口部で、1段Lと思われる原体により縄線文が施される。24はⅣ群と推測され、それ以外のものはすべてV群に相当すると考えられる。

P－67出土の土器

5は器の形状を保った状態で出土したもので、胴部中位より上部分を欠損する。胴部から直線的に底部へとすぼまる器形を呈する。LR斜行縄文地に複数の横環する沈線文が施され、これらのそれぞれは上下のものとつなぐように弧状の沈線文が描かれる。その下は幅の広い無文帯である。また、胴部中位の割れ口はほぼ水平で、全体が軽く摩耗したような感じがある。さらに、個々の破片の割れ口らしき痕跡も認められない。水平に切り取ったのではないかと推測される。Ⅳ群b類の手稙式に相当しよう。

26～28は同一個体と考えられる。波状口縁で、口縁部に無文帯をもつ。縦走気味のLR斜行縄文地に横環する複数の沈線文を施し、それから波頂部から垂下する三本の沈線文が描かれる。Ⅳ群b類の手稙式に相当すると考えられる。

P－68出土の土器

29は胴部で、RL斜行縄文が施される。Ⅳ群b類に相当すると考えられる。

P－70出土の土器

30は粘土の貼付により突起部が形成され、その上には1段Lを用いた同心円状の圧痕文が施される。器面にはLR原体による縦走する縄文が観察される。31はLR原体による縦走する縄文が施されるが、口唇部直下の器面には施されない。ともにV群の浅鉢と考えられ、さらに同一個体である可能性があ

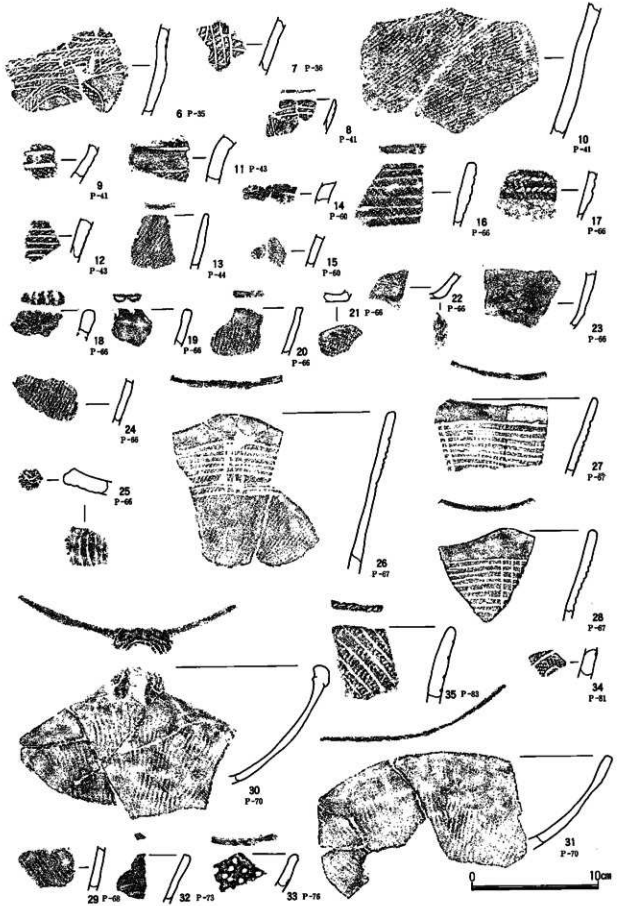

6 P-35
7 P-36
8 P-41
9 P-41
10 P-41
11 P-43
12 P-43
13 P-44
14 P-60
15 P-60
16 P-66
17 P-66
18 P-66
19 P-66
20 P-66
21 P-66
22 P-66
23 P-66
24 P-66
25 P-66
26 P-67
27 P-67
28 P-67
29 P-68
30 P-70
31 P-70
32 P-73
33 P-76
34 P-81
35 P-83
0
10cm

図26 遺構出土土器(2)

る。

P―73出土の土器

32は口縁部が無文で、Ⅳ群ｂ類の手稲式に相当すると考えられる。

P―76出土の土器

33は全体的に摩耗している。波状口縁で外面に円形の刺突文が施される。Ⅳ群ｂ類に相当しよう。

P―81出土の土器

34は胴部で、曲線的な沈線文により縄文地と無文地が区画される。縄文はＬＲであるが、条の傾きが部分的に異なる。Ⅳ群ｂ類ウサクマイＣ式に相当すると推測される。

P―83出土の土器

35は波状口縁で、ＬＲ斜行縄文地に斜め方向の沈線文が複数施される。

集石出土の土器

S―4出土の土器

36は摩耗が著しいもので、拓影図では明瞭に表現できなかったが、以下の文様が観察される。口唇部直下の器面には波頭状の、その下には波状、頸部には水平に横環する沈線文がそれぞれ二本づつ施される。Ⅳ群ｂ類のウサクマイＣ式に相当すると考えられる。37は平縁で、口縁部が無文のものである。胴部との境では器面に段を有すると判断される。Ⅳ群ｂ類の手稲式に相当しよう。

S―6出土の土器

38は底部の破片である。底面の1/4以上が剥離する。胴部へとつながる割れ口は水平で、内面が高く外面が低いという特徴が観察され輪積みの痕跡を示していると考えられる。Ⅳ群に相当すると判断される。

S―7出土の土器

39は波状口縁で、縄文地に鋸歯状の沈線文が施される。口唇部直下の器面は、口縁と平行する沈線文で区画され、幅の狭い無文帯が設けられている。40も波状口縁で、幅の広い無文帯の下は、ＲＬ斜行縄文地に鋸歯状の沈線文が施される。口頸部と胴部の外面は明瞭な段差を有する。41は摩耗が著しいものである。口唇部には粘土の貼付により突起部が形成され、その上には刻みらしき文様の痕跡が観察される。外面は、口唇部直下に沈線文が一本施される以外は無文である。42は波状口縁で、口唇部直下の器面に沈線文が施され、その間には刻みが加えられる。これは左傾き、右傾きの両者がある。また、補修孔が一対観察される。43は貼付により口縁部が肥厚し、そこに刻みが施される。器面はＬＲ原体を用い、回転方向を変えて施文した羽状縄文が観察される。44は注口部である。45は水平に横環する二本の沈線文があり、その下の無文地に曲線的な沈線文が施される。46は注口、あるいは壷の肩部と考えられる。粘土の貼付と沈線文、及びそれらの周囲に施された刻み、そして地文の羽状縄文が観察される。内面は指頭圧痕が顕著で、調整による平滑な器面が認められない。このことも器形を判断する上での手がかりとした。47はＬＲ斜行縄文が施され、その下は底部まで無文である。48は底部で、全体的に剥離した後、摩耗している。

36、39、45はⅣ群ｂ類のウサクマイＣ式、37、40、41、44、47はⅣ群ｂ類の手稲式、42、43、46はⅣ群ｂ類のホッケマ式にそれぞれ相当すると考えられる。38、48もⅣ群に相当しよう。

49～51は比較的大きな破片で、すべてⅣ群ｂ類の手稲式に相当するものである。49は器面にＬＲ斜行縄文が浅く施されるが、口唇部直下の器面と胴部下位は無文である。50は斜行縄文地に複数の沈線文と、これらを上下につなぐ曲線的な沈線文が施される。器面には補修孔が一カ所あり、これは縦長の楕円形部分が広く凹み、その中に円形の孔が貫通している。51は頸部から底部近くまでが残存する。

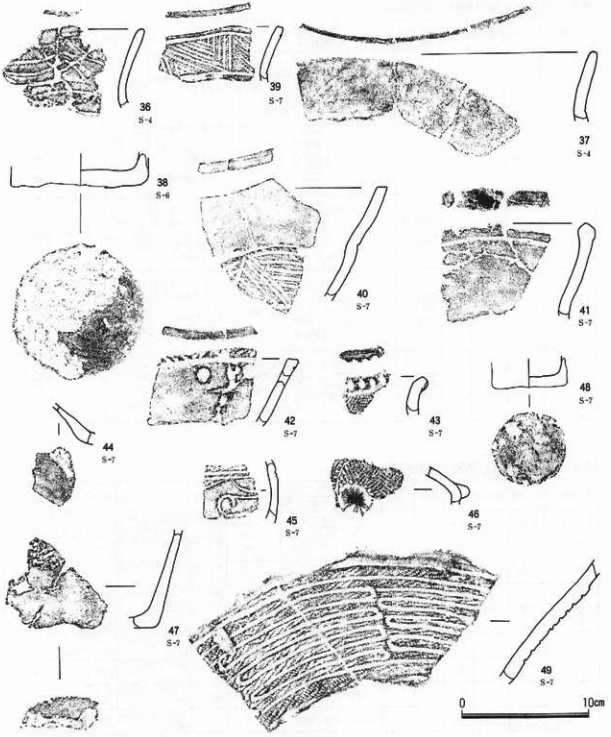


図27　遺構出土土器(3)

頸部無文帯の下は、ＲＬ斜行縄文地に複数の沈線文が描かれ、これらを上下につなぐ弧状の沈線文が施される。さらにその下位部分は無文である。　（末光正卓）

表2　遺構出土復原掲載土器観察表

図	掲載番号	出土遺構	遺物番号	層位	破片部位（器種）	接合破片数	色調 外面	色調 内面	文様	内面調整	胎土	使用の痕跡	接合破片回収遺構・グリッド	備考（時期分類）
25	1	P−19	3	覆土	口縁部〜底部（浅鉢）	16	灰黄褐〜にぶい黄橙〜褐灰色	にぶい黄橙〜にぶい橙〜褐灰色	ＬＲ斜行縄文、複数の沈線文とこれらを上下につなぐ弧状の沈線文	ミガキ	ほとんどが鉱物 粒径は小	口縁部黒色化 内外面黒色化	Ｋ−35区	（IV群ｂ類） 口径:17.8 器高:11.0 底径:6.4（cm）
〃	2	P−41	2	覆土	口縁部〜底部（深鉢）	40	橙〜にぶい橙色	にぶい赤褐〜にぶい黄橙〜にぶい褐色	ＬＲ斜行縄文	ミガキ	岩片主体（角のとれた堆積岩） 粒径は大 鉱物の粒径は中	口縁部・内外面黒色化・炭化物付着 胴部下位赤色化 にぶい赤褐色（５ＹＲ５／４）	—	（IV群ｂ類） 口径:21.4 器高:26.3 底径:8.0（cm）
〃	3	P−41	3	覆土	口縁部〜底部（深鉢）	21	灰黄褐〜にぶい橙〜にぶい黄橙〜褐灰色	灰褐〜にぶい褐〜褐灰色	ＬＲ斜行縄文、沈線文	ミガキ	岩片主体（角のとれた白色のもの） 粒径は中 鉱物は小	口縁部黒色化 内外面黒色化・炭化物付着	Ｊ−33区	（IV群ｂ類） 口径:18.5 器高:20.8 底径:7.6（cm） 胴部上位に補修孔一対
〃	4	P−41	4	覆土	胴部中位〜底部（深鉢）	17	にぶい橙〜橙色	にぶい褐〜にぶい橙〜橙色	ＬＲ斜行縄文	ミガキ ナデ	岩片主体（角のとれた堆積岩） 粒径は大 鉱物の粒径は中	内外面黒色化・炭化物付着 胴部下位赤色化？ にぶい赤褐色（5YR5/4）	—	（IV群ｂ類） 口径:— 器高:（19.1） 底径:7.8（cm） 胴部中位に人為的な切り込みあるいは孔が２カ所ある
〃	5	P−67	6	覆土	胴部中位〜底部（深鉢）	1	にぶい黄橙〜浅黄橙〜褐灰色	橙〜褐灰色	ＬＲ斜行縄文、複数の沈線文とこれらを上下につなぐ弧状の沈線文	ミガキ	鉱物主体　粒径は小　岩片も少量あり（白色） 粒径は中	内外面黒色化・炭化物付着 胴部下位赤色化？ 浅黄橙色（7.5YR8/6）	—	（IV群ｂ類）器の形状を保つ 口径:— 器高:（13.9） 底径:7.6（cm）

表3　遺構出土破片掲載土器観察表(1)

図	掲載番号	出土遺構	遺物番号	層位	破片数	接合破片数	破片部位	色調 外面	色調 内面	内面調整	文様	胎土	使用の痕跡	備考（時期分類）
26	6	P−35	—	覆土	5	5	頸部〜胴部上位	にぶい黄橙色	褐灰色	ナデ・ミガキ	縄文、沈線文	岩石主体(角のとれた堆積岩) 粒径は大鉱物の粒径は小	内外面 黒色化・炭化物付着	（IV群ｂ類）
〃	7	P−36	—	覆土	2	2	頸部？	にぶい橙色	褐灰色	ミガキ	縄文、沈線文	ほとんどが岩石(角のとれた堆積岩) 粒径は大	内面黒色化・炭化物付着	（IV群ｂ類）
〃	8	P−41	— 未注記	覆土	2 1	4	口縁部	橙〜にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ・指頭圧痕	縄文、沈線文	ほとんどが鉱物　粒径は小	—	（IV群ｂ類）
〃	9	P−41	—	覆土	1	1	胴部	黒褐色	黒褐色	ミガキ	縄文、沈線文	岩石主体(角のとれた堆積岩) 粒径は中	内外面 黒色化・炭化物付着	（IV群ｂ類）
〃	10	P−41	—	覆土	3	3	胴部	灰褐色	橙色	ナデ・ミガキ	縄文	岩石主体(角のとれた堆積岩) 粒径は大	外面　黒色化・炭化物付着	（IV群）
〃	11	P−43	—	覆土	1	1	頸部	灰褐色	褐色	ミガキ	縄文、沈線文	岩石主体(角のとれた堆積岩) 粒径は中	内外面 黒色化・炭化物付着	（IV群ｂ類）
〃	12	P−43	—	覆土	1	1	胴部	褐灰色	黒褐色	ミガキ	縄文、沈線文	ほとんどが鉱物 粒径は小	内外面　黒色化	（IV群ｂ類）
〃	13	P−44	—	覆土	1	1	口縁部	灰黄褐色	にぶい褐色	ミガキ・指頭圧痕	縄文	岩石（堆積岩?）・鉱物ともにあり 粒径は中	外面　黒色化 内面　黒色化・炭化物付着	（Ｖ群）
〃	14	P−60	—	覆土	2	2	胴部下位	淡黄橙色	黒色	ミガキ	—	岩石主体(角のとれた堆積岩) 粒径は大	内面　黒色化・炭化物付着 赤色化　橙色(7.5YR7/6)	（IV群ｂ類）
〃	15	P−60	—	覆土	2	2	胴部	にぶい橙〜にぶい褐色	橙色	ナデ？	縄文	鉱物主体　粒径は小	—	（Ｖ群）
〃	16	P−66	6	覆土	1	1	口縁部	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ・指頭圧痕	撚線文、縄文	岩石（堆積岩?）・鉱物ともにあり 粒径は中	口縁部・内面黒色化 外面　黒色化・炭化物付着	（Ｖ群）
〃	17	P−66	5	覆土	1	1	胴部	黒褐色	にぶい褐色	ナデ	撚線文	鉱物主体 粒径は中	外面　黒色化・炭化物付着	（Ｖ群）
〃	18	P−66	—	覆土	1	1	口縁部	灰褐色	にぶい褐色	ナデ	貼瘤による刻み、孔	岩石（堆積岩?）・鉱物ともにあり 粒径は中	内外面黒色化	（Ｖ群）
〃	19	P−66	—	覆土	1	1	口縁部	にぶい褐色	橙色	ナデ・指頭圧痕	貼瘤による刺突文と刻み	岩石（堆積岩?）・鉱物ともにあり 粒径は中	口縁部・内外面 黒色化・炭化物付着	（Ｖ群）
〃	20	P−66	—	覆土	1	1	口縁部	灰褐色	褐灰色	ナデ	縄文	鉱物主体　粒径は中	口縁部・内外面 黒色化・炭化物付着	（Ｖ群）
〃	21	P−66	—	覆土	1	1	底部	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ・指頭圧痕	縄文	岩石・鉱物ともにあり 粒径は小	—	（Ｖ群）

表3　遺構出土破片掲載土器観察表(2)

図	掲載番号	出土遺構	遺物番号	層位	破片数	接合破片数	破片部位	色調 外面	色調 内面	内面調整	文様	胎土	使用の痕跡	備考(時期分類)
〃	22	P-66	6	覆土	1	1	底部	にぶい褐色	にぶい赤褐色	ナデ・指頭圧痕	縄文、沈線文	岩石・鉱物ともにあり 粒径は小	内外面 黒色化・炭化物付着	(Ⅴ群)
〃	23	P-66	10	覆土	1	1	胴部	にぶい褐色	明黄褐色	ナデ・指頭圧痕	縄文	鉱物主体　粒径は中	内外面 黒色化・炭化物付着	(Ⅴ群)
〃	24	P-66	12	覆土	1	1	胴部	にぶい黄橙色	灰白色	ミガキ	縄文	岩石・鉱物ともにあり 粒径は中	内面　黒色化・炭化物付着	(Ⅳ群?)
〃	25	P-66	—	覆土	1	1	注口部	橙色	褐色	—	縄線文、撚紐の圧痕文	岩石(堆積岩)・鉱物ともにあり 粒径は小	—	(Ⅴ群)
〃	26	P-67	—	覆土	6	6	口縁部~胴部上位	にぶい黄橙~にぶい橙色	にぶい褐色	ミガキ・指頭圧痕	縄文、沈線文	鉱物主体 粒径は小	内外面 黒色化・炭化物付着	(Ⅳ群b類)
〃	27	P-67	—	覆土	2	2	口縁部~頸部	にぶい黄橙色	褐灰色	ミガキ・指頭圧痕	縄文、沈線文	鉱物主体 粒径は小	内外面 黒色化・炭化物付着	(Ⅳ群b類)
〃	28	P-67	—	覆土	1	1	口縁部~頸部	黒褐色	にぶい黄橙色	ミガキ	縄文、沈線文	鉱物主体 粒径は小	内外面 黒色化・炭化物付着	(Ⅳ群b類)
〃	29	P-68	—	覆土	1	1	胴部	黒褐色	褐色	ミガキ	縄文	ほとんど鉱物 粒径は小	外面 黒色化・炭化物付着	(Ⅳ群b類)
〃	30	P-70	—	覆土	7	7	口縁部~胴部上位	浅黄橙色	橙色ナデ・ミガキ	撚紐の 圧痕文、縄文	ほとんど鉱物 粒径は小	口唇部・内外面 黒色化・炭化物付着	—	(Ⅴ群)
〃	31	P-70	—	覆土	5	5	口縁部~胴部上位	にぶい黄橙色	明黄褐~にぶい黄橙色	ナデ・指頭圧痕	縄文	鉱物主体 粒径は小	内外面　黒色化	(Ⅴ群)
〃	32	P-73	—	覆土	1	1	口縁部	にぶい橙色	暗褐色	ミガキ	—	岩石(堆積岩)・鉱物ともあり 粒径は中	口唇部・内面 黒色化・炭化物付着	(Ⅳ群b類)
〃	33	P-76	—	覆土	1	1	口縁部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙~橙色	ナデ?	円形の刺突文	岩石主体(角のとれた堆積岩) 粒径は大	—	(Ⅳ群)
〃	34	P-81	—	覆土	1	1	胴部	褐灰色	浅黄橙色	ナデ?	縄文、沈線文	岩石(堆積岩)・鉱物ともにあり 粒径は中	外面　黒色化	(Ⅳ群b類)
〃	35	P-83	—	覆土	1	1	口縁部	灰褐色	にぶい褐色	ナデ?	縄文、沈線文	鉱物主体 粒径は大	外面　黒色化	(Ⅳ群b類)
27	36	S-4	—	流路Ⅱ	7	7	口縁部~頸部	灰黄褐色	灰褐色	ミガキ	縄文、沈線文	岩石(堆積岩)・鉱物ともにあり 粒径は大	内外面　黒色化	(Ⅳ群b類)
〃	37	S-4	—	流路Ⅱ	5	5	口縁部	浅黄橙色	浅黄橙~にぶい黄橙色	ミガキ	—	ほとんどが岩石(角のとれた堆積岩) 粒径は大	—	(Ⅳ群b類)
〃	38	S-6	7	流路Ⅱ	3	3	底部	にぶい橙色	浅黄橙色	ナデ・ミガキ	—	岩石(堆積岩)・鉱物ともにあり 粒径は大	—	(Ⅳ群)
〃	39	S-7	—	流路Ⅱ	1	1	口縁部	褐灰色	にぶい赤褐色	ミガキ	縄文、沈線文	岩石(堆積岩)・鉱物ともにあり 粒径は大	口唇部・外面 黒色化	(Ⅳ群b類)
〃	40	S-7	66 67 —	流路Ⅱ 流路Ⅱ 流路Ⅱ	2 1 1	4	口縁部~頸部	にぶい褐色	褐灰色	ミガキ	縄文、沈線文	岩石(堆積岩)・鉱物ともにあり 粒径は中	内外面 黒色化・炭化物付着	(Ⅳ群b類)
〃	41	S-7	35 —	流路Ⅱ 流路Ⅱ	7 1	8	口縁部~頸部	橙色	橙色	ミガキ	沈線文、刻み?	鉱物主体 粒径は小	—	(Ⅳ群b類)
〃	42	S-7	—	流路Ⅱ	3	3	口縁部	橙色	橙~にぶい橙色	ミガキ	沈線文、刻み	鉱物主体 粒径は小	—	(Ⅳ群b類) 補修孔一対あり
〃	43	S-7	—	流路Ⅱ	1	1	口縁部	橙色	橙色	ミガキ	縄文、刻み	ほとんどが鉱物 粒径は小	口唇部・内面 黒色化	(Ⅳ群b類)
〃	44	S-7	33	流路Ⅱ	1	1	注口部	浅黄橙色	浅黄橙色	ミガキ	—	岩石(堆積岩)・鉱物ともにあり 粒径は小	外面　黒色化	(Ⅳ群b類)
〃	45	S-7	—	流路Ⅱ	1	1	胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ミガキ	縄文、沈線文	岩石(堆積岩)・鉱物ともにあり 粒径は中	外面 黒色化・炭化物付着	(Ⅳ群b類)
〃	46	S-7	51	流路Ⅱ	1	1	胴部	黒褐色	にぶい赤褐色	ナデ?・ 指頭圧痕	縄文、沈線文、刻み、隆帯	鉱物主体 粒径は中	外面黒褐色	(Ⅳ群b類)
〃	47	S-7 未注記	101	流路Ⅱ	3 1	4	胴部下位~底部	赤褐色	にぶい褐色	ミガキ	縄文	岩石主体(角のとれた堆積岩) 粒径は大	—	(Ⅳ群b類)
〃	48	S-7	24	流路Ⅱ	1	1	底部	にぶい黄橙色	黒褐色	ナデ?	—	岩石主体(角のとれた堆積岩) 粒径は大	内外面 黒色化・炭化物付着	(Ⅳ群)
〃	49	S-7	33 63	流路Ⅱ 流路Ⅱ	1 1	2	頸部~胴部上位	灰褐色	黒褐色	ミガキ	縄文、沈線文	鉱物主体 粒径は小	内外面黒色化	(Ⅳ群b類) 補修孔一ヶ所あり
25	50	S-7	48 44 45 50 —	流路Ⅱ 流路Ⅱ 流路Ⅱ 流路Ⅱ 流路Ⅱ	3 1 1 1 2	8	口縁部~胴部下位	橙色	黒褐色	ミガキ	縄文	岩石主体(角のとれた堆積岩) 粒径は大	口唇部・内面 黒色化・炭化物付着 胴部中位赤色化 明赤褐色(5YR5/6)	(Ⅳ群b類)
〃	51	S-7	52 49 47 —	流路Ⅱ 流路Ⅱ 流路Ⅱ 流路Ⅱ	3 2 1 3	9	頸部~胴部下位	橙~にぶい黄橙色	橙~にぶい黄橙色	ミガキ	縄文、沈線文	鉱物主体 粒径は小	外面黒色化・炭化物付着 胴部中位赤色化 にぶい橙色(5YR6/4)	(Ⅳ群b類)

8　遺構出土の石器［図28～32　表4　図版9—5・6　14～17］

P—19

1は安山岩製のたたき石である。先端部に敲打痕と側面にすり痕がある。側面のすり痕は作業面ではなく、使用による摩耗の可能性が高い。2は砂岩製の石皿である。両面にすり面がある。

P—41

3は砂岩製の石皿である。両面にすり痕があるが、裏面のすり痕は使用時に地面や台と接触したことが原因の摩耗であると考えている。

P—66

4は黒曜石製の有茎石鏃で、茎部が欠損している。

P—67

7は黒曜石製のスクレイパーで、一辺を除き全て欠損している。刃部の角度が小さく、刃部は鋭い。8は調整の施された黒曜石製の剥片である。不定形な剥片の縁を打ち欠いて形を整えたものである。石器埋納遺構から出土した石器と同様のものである。9は安山岩製の台石で、断面は三角形である。5カ所に敲打痕があり、側面にすり痕がある。

P—70

5は黒曜石製の石鏃である。

P—71

6は黒曜石製のスクレイパーで、下半分を欠損している。刃部は大きな剥離を切って細かい剥離が形成されており、刃部の再生が行われている。

P—91

10は安山岩製の台石である。側面の3カ所に敲打痕があるが、その他の加工痕や使用痕ははっきりしない。

S—4

11は砂岩製のたたき石で、両側面を除く全周に敲打痕がある。

S—5

12は黒曜石製のスクレイパーで、腹面側にも若干調整が施される。S—5の下で検出した土壙内から出土した。13は砂岩製の石皿で、すり面が2カ所くぼみとして残る。

S—6

14は砂岩製の台石で、側面と底面を除く全周に敲打痕がある。

S—7

15は黒曜石製のつまみ付きナイフである。形状は三角形で、先端が尖る。左右の側縁で調整の施される面が異なる。16は黒曜石製の石核である。17は片岩製のたたき石で、先端部と側面の一部に敲打痕がある。18は砂岩製の石皿で、大部分は欠損している。おもて面の一部にすり痕が残る。19、20は砂岩製の石皿で、19は上半分が割れて出土した。廃棄後に土圧等によって割れたものであろう。石皿に分類したが、両者ともすり面がきれいに磨かれており、砥石として用いられた可能性が高い。19は中央に縦に長くすり痕があり、20は片面のほぼ全面にすり痕がある。21は砂岩製の台石である。断面は台形で、上面と側面の一部に敲打痕がある。

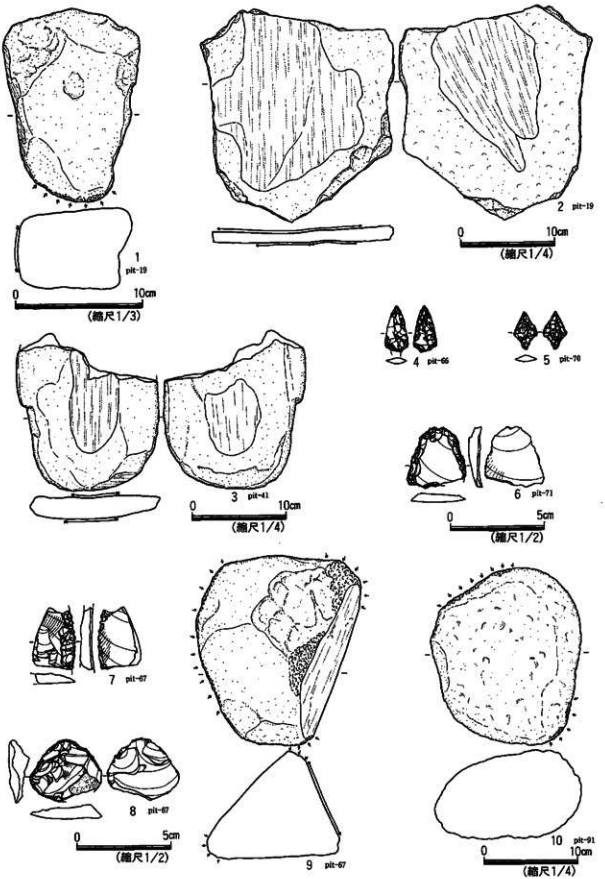


図28　土壙・柱穴出土石器

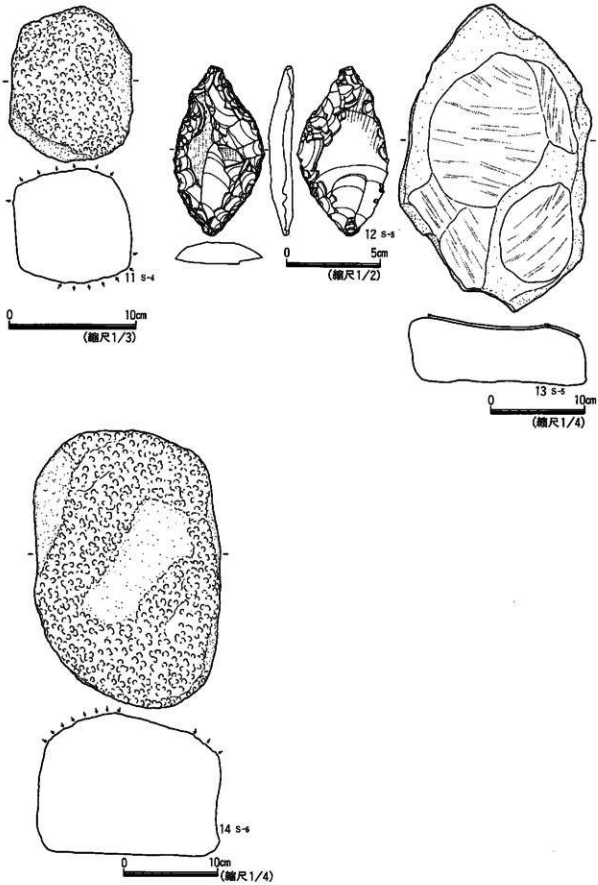


図29　集石遺構出土石器(1)

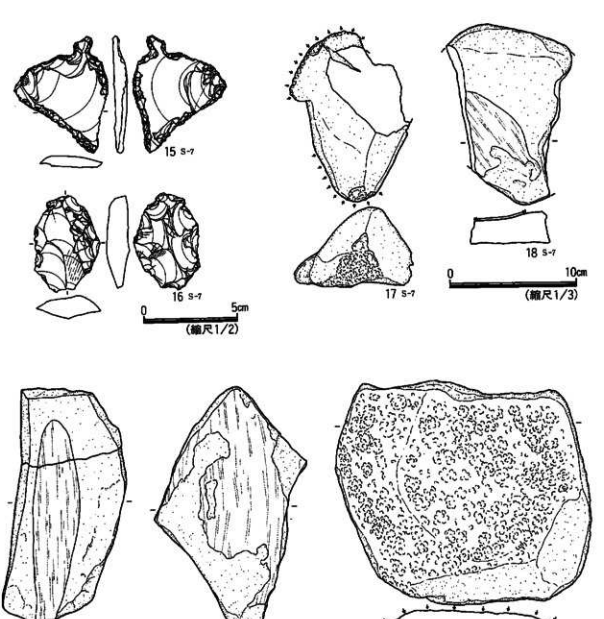


図30　集石遺構出土石器(2)

石器埋納

調整の施された黒曜石製の剥片で、長径約4.5cm、短径約3.2cm、厚さ約0.8cm程度の楕円形または卵形である。適当な大きさの剥片を打ち欠いて形を整えており、大きさや形が似通っている。スクレイパーやRフレイクに分類できるものも存在するが、一括出土したことから全て同じものとして認識されていたと考えている。機能や用途は不明であるが、調整の程度が様々なのに対し、大きさや形が

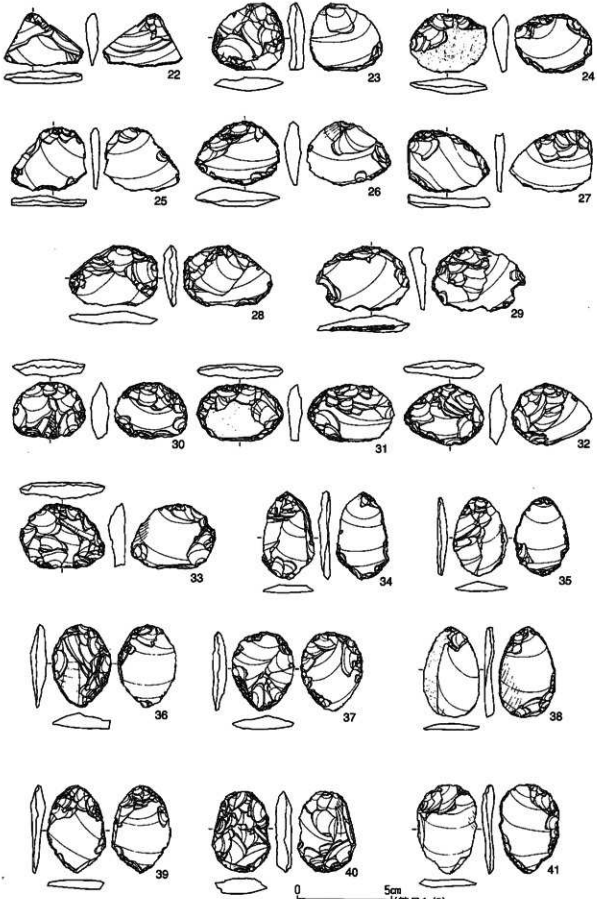


図31　石器埋納出土石器(1)

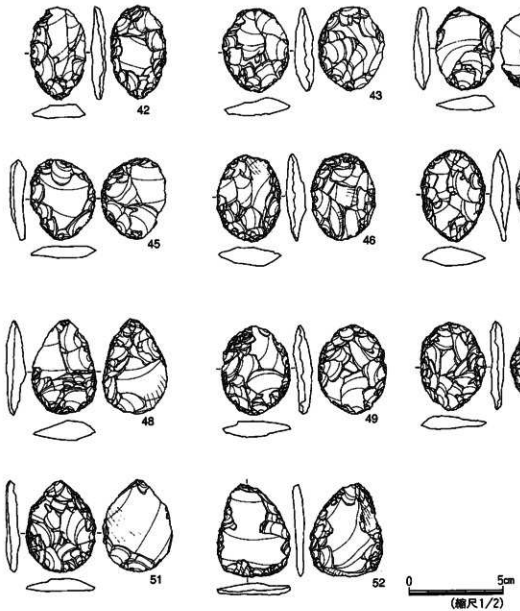


図32　石器埋納出土石器(2)

比較的統一されており、利器として使用することよりも大きさや形を統一することを目的として調整が行われた可能性が高い。また、平面的な大きさや形状を整える一方で、バルブの部分に剥離が集中すること、打点側が折り取られるか打ち欠きにより消失していることなどから、厚さも一定の厚みになるように配慮していたようである。分類は石器素材としたが、分類の項でも述べたとおり、製作可能な石器が限定されること、遺跡から普遍的に出土する石器ではないことなど素材とは考えにくい事実も多い。

整形の程度や縁辺部の調整の程度により次の３つに細分類した。

(1)　両面を調整したもの
(2)　片面のみを主に調整したもの
(3)　剥片をほとんど調整せず、縁辺部を細かく潰しただけのもの

包含層からも同様の石器が出土しているが、遺構出土のものと比較して、調整が粗雑で、大きさや形にばらつきがある。

（石井淳平）

表4　遺構出土掲載石器一覧表

図版	番号	整理No	遺構	層位	分類	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
28	1	2	P－19	覆土	たたき石	安山岩	15.30	10.80	6.40	1.65k	
28	2	1	P－19	覆土	石皿・台石	砂岩	22.50	20.50	1.70	1.07k	
28	3	1	P－41	覆土	石皿・台石	砂岩	16.10	14.90	2.50	800.00	
28	4	1	P－66	覆土	石錐	黒曜石	2.30	1.28	0.38	0.80	
28	5	1	P－70	覆土	石錐	黒曜石	1.50	1.31	0.37	0.50	
28	6	1	P－71	覆土	スクレイパー	黒曜石	(3.20)	3.10	0.60	5.33	
28	7	1	P－67	覆土	スクレイパー	黒曜石	(3.30)	(2.30)	0.81	4.86	
28	8	2	P－67	覆土	スクレイパー	黒曜石	3.88	3.40	1.15	8.60	
28	9	3	P－67	覆土	石皿・台石	安山岩	20.10	17.50	11.40	4.9k	
28	10	1	P－91	覆土	石皿・台石	安山岩	18.70	16.00	9.50	3.2k	
29	11	1	S－4	流路Ⅱ	たたき石		12.30	9.70	9.00	1.30k	
29	12	1	S－5	覆土	スクレイパー	黒曜石	9.00	4.80	1.30	46.80	
29	13	2	S－5	流路Ⅱ	石皿・台石	砂岩	32.50	20.50	7.00	5.50k	
29	14	1	S－6	流路Ⅱ	石皿・台石	砂岩	29.40	19.60	15.00	12.70k	
30	15	1	S－7	流路Ⅱ	つまみ付ナイフ	黒曜石	5.36	5.00	0.80	15.20	
30	16	2	S－7	流路Ⅱ	石核	黒曜石	5.10	3.50	1.30	18.40	
30	17	4	S－7	流路Ⅱ	たたき石	片岩	13.50	9.40	6.20	570.00	
30	18	6	S－7	流路Ⅱ	石皿・台石	砂岩	(14.30)	(9.90)	(2.50)	410.00	
30	19	5	S－7	流路Ⅱ	石皿・台石	砂岩	24.50	13.30	5.80	2.44k	
30	20	3	S－7	流路Ⅱ	石皿・台石	砂岩	26.30	16.20	3.00	1.25k	
30	21	7	S－7	流路Ⅱ	石皿・台石	砂岩	23.60	27.10	10.40	8.60k	
31	22	1	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	2.70	4.10	0.70	6.40	縁辺のみ調整
31	23	22	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	3.50	3.80	0.90	10.80	片面調整
31	24	2	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	3.10	4.10	0.80	9.60	片面調整
31	25	5	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	3.40	4.00	0.60	5.70	両面調整
31	26	3	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	3.40	4.30	1.00	11.40	片面調整
31	27	25	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	3.30	4.30	0.70	7.70	縁辺のみ調整
31	28	24	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	3.20	4.70	0.75	10.00	両面調整
31	29	6	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	3.40	4.90	0.90	10.20	片面調整
31	30	29	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	2.90	3.80	0.95	10.70	両面調整
31	31	26	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	3.00	4.50	0.70	10.50	片面調整
31	32	28	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	3.20	4.20	0.95	11.40	両面調整
31	33	27	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	3.40	4.50	0.85	12.20	片面調整
31	34	8	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	4.70	2.80	0.60	6.50	片面調整
31	35	10	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	4.20	2.90	0.55	5.40	両面調整
31	36	13	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	4.40	3.10	0.90	10.10	両面調整
31	37	15	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	4.20	3.30	0.80	8.40	縁辺のみ調整
31	38	16	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	4.80	3.00	0.50	6.10	両面調整
31	39	12	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	4.70	3.10	0.80	8.20	両面調整
31	40	4	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	4.30	3.10	0.90	11.80	両面調整
31	41	20	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	4.70	3.10	0.70	7.10	片面調整
32	42	18	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	4.90	2.90	0.70	10.40	両面調整
32	43	23	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	4.40	3.50	1.00	14.40	片面調整
32	44	30	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	4.40	3.10	0.85	10.80	両面調整
32	45	14	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	4.30	3.40	0.80	11.00	両面調整
32	46	19	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	4.60	3.40	1.00	12.90	縁辺のみ調整
32	47	17	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	4.80	3.40	1.05	14.10	両面調整
32	48	11	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	5.10	3.40	1.05	12.90	片面調整
32	49	21	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	4.70	3.60	1.00	13.10	両面調整
32	50	31	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	4.70	3.50	0.70	10.10	両面調整
32	51	9	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	4.90	3.70	0.70	12.70	両面調整
32	52	7	D－1	流路Ⅱ	石器素材	黒曜石	5.00	3.90	0.60	10.30	両面調整

単位＝cm　g

V　包含層出土の遺物

1．土器［図33～48　表5～10　図版18～29］

(1)概要

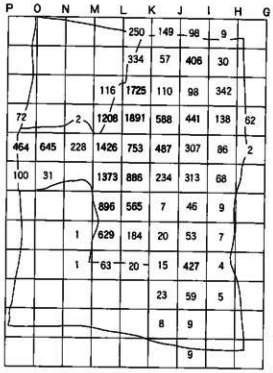
本遺跡からは、縄文時代中期（Ⅲ群）、後期（Ⅳ群）、晩期（Ⅴ群）の土器が出土した。これらについて、ランク、出土層位について表5にまとめた。なお、この概要を記述するにあたっては、一次分類のデータを用いた。

表5からは次のことが指摘できる。Ⅲ群は20点と少なく、全体の1％以下を占めるにすぎない。多くのものがⅡ層からの出土であるが、Ⅳ層からの出土も認められる。Ⅳ群は最も多く出土し、全体の約37％を占めている。Ⅱ層からの出土が最も多いが、他の群のものと比べてみると、各層からまとまった量が出土したことがうかがえる。Ⅴ群は489点で、全体の約3％である。Ⅱ層からの出土が最も多く、Ⅳ層からは全く出土が認められない。未分類のものは全体の約60％である。一次整理の段階では、確実性が低い場合、土器は時期分類を行わなかった。その結果、大半の土器を未分類として扱わざるを得ない状況となった。また、整理作業ではこれらの分類を行う時間的な余裕をもてなかった。しかし、作業を進めていく上で、未分類の土器は、そのほとんどがⅣ群のものであることが認められた。このことからも、Ⅳ群の出土量が際だって多く、Ⅴ群、Ⅲ群がこれに続くという傾向が認識される。

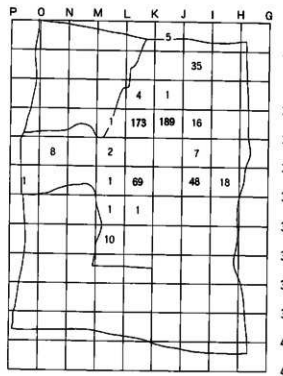
表5　包含層出土土器点数表

層位	分類	Ⅱ層	流路Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	その他（Ⅰ層・撹乱等）	合計
Ⅲ群	A						
	B 1				1		1
	B 2	1					1
	C	14			4		18
	D						
	E						
	F						
小計		15			5		20
Ⅳ群	A	247	3	195	106		551
	B 1	607	290	287	75	14	1,273
	B 2	42	2	18	10	4	76
	C	1,863	1,237	1,096	310	55	4,561
	D	6	2	93	10		111
	E	3		3	3		9
	F	29		212	48		289
小計		2,797	1,534	1,904	562	73	6,870
Ⅴ群	A	18					18
	B 1	111	14	4			129
	B 2	7					7
	C	237	72	22			331
	D						
	E	3					3
	F	1					1
小計		377	86	26			489
未分類	A	1	4	11			16
	B 1	153	32	52			237
	B 2	132	66	61	9		268
	C	2,409	704	723	23	31	3,890
	D	743	215	255	12	6	1,231
	E	1,267	261	206	6	5	1,745
	F	2,206	872	711	71	13	3,873
小計		6,911	2,154	2,019	121	55	11,260
土製品		4					4
合計		10,104	3,774	3,949	688	128	18,643

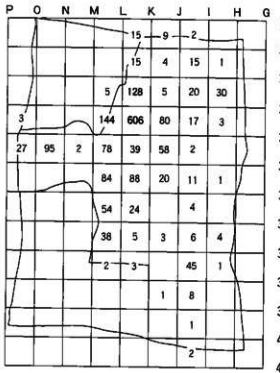
総破片



Aランク



Dランク



Eランク

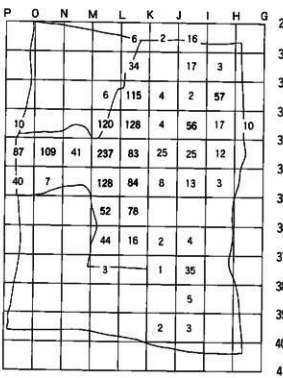
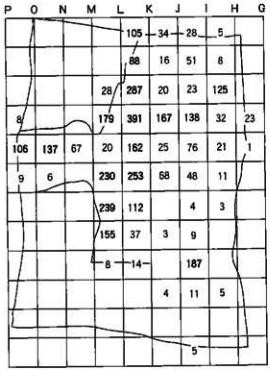
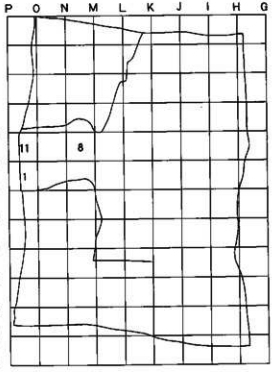


図33　土器出土分布図(1)

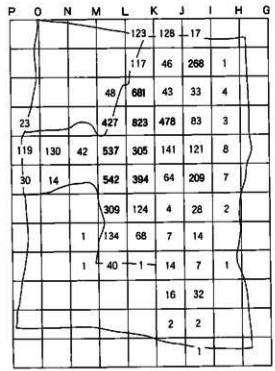
Fランク



Ⅲ群



Ⅳ群



Ⅳ群Aランク

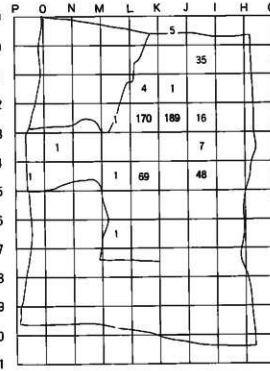
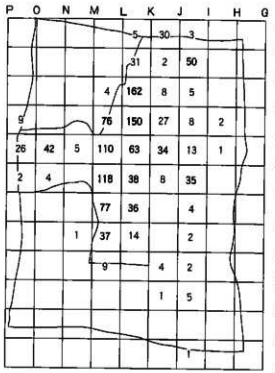
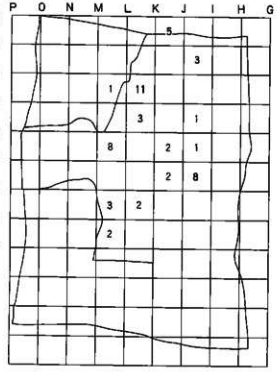


図34　土器出土分布図(2)

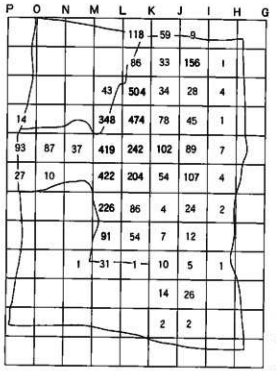
Ⅳ群Ｂ１ランク



Ⅳ群Ｂ２ランク



Ⅳ群Ｃランク



Ⅴ群

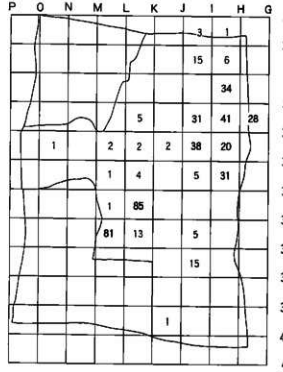
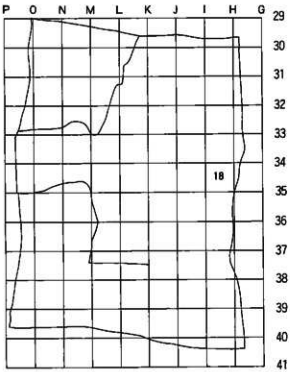
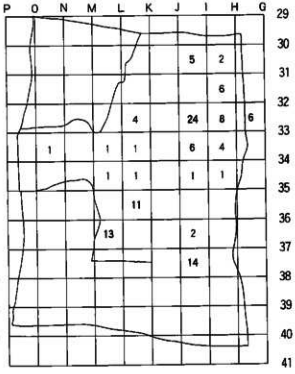


図35　土器出土分布図(3)

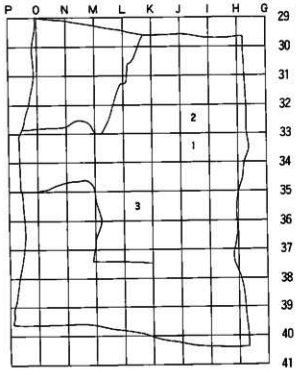
V群Aランク



V群B1ランク



V群B2ランク



V群Cランク

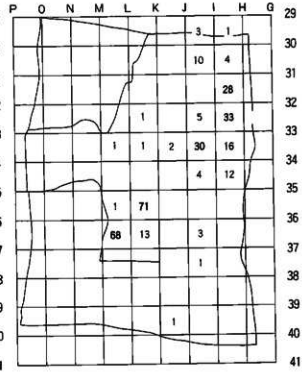


図36　土器出土分布図(4)

分布

一次分類のデータから、グリッドごとの出土点数を時期、ランク分類ごとに求め、図33～36の分布図を作成した。

総破片

ほぼ全面に分布が認められるが、南側と東側（内大部川側）にいくにつれ減少していく傾向が指摘できる。K～Mライン、31～35ライン付近が最も多く、出土数が1,000点を越えるグリッドも認められる。また、分布していないグリッドもみられる。これはLラインと33ラインに囲まれた北西側と、K～Mラインと35ラインに囲まれた南西側の部分で、これらは砂・礫主体である第Ⅴ層まで削平を受けており、遺物包含層が残存していなかったところである。

Aランク

J・K―32区が際だっている。

Dランク

K―32区に顕著で、その周辺にも多く認められる。

Eランク

N―33区及び、L―33区とその周辺に多く認められる。

Fランク

K―32区、L―35区とそれらの周辺に多い。

Ⅱ群

西側に分布が認められる。調査区の西側はさらに高い段丘面があり、ここに分布の中心があり、本調査区から出土した土器はそこから流れ込んだものと推測される。

Ⅳ群

L―33・34区に最も多く分布している。ほぼ全面に認められるが、南側は少なくなっていく傾向が指摘できる。

Ⅴ群

調査区のほぼ全体にまばらに分布しているような印象を受ける。K―35区、L―36区に最も多く分布している。

今回ランクごと、そして時期ごとの分布から、遺物の本来的な位置（原位置）と二次的な移動について考えた。これについては第Ⅶ章の2節で詳しく考えたい。

掲載の仕方

土器については遺構出土分も含めて個体識別を行い、器形を判断できうる程度、破片が集まったものについて復原した。接合できなかったものについては、口縁部のものを主体に文様、内面調整、胎土等の特徴を手がかりに型式を特定した。破片掲載のものは拓影図（外面と口唇部、必要に応じて内面）と断面の実測図を作成した。底部破片は残存部分から径が求められるもの（概ね½以上残存しているもの）について復原実測図を作成した。また、掲載する土器は遺構出土分も含め、すべて観察表を作成した。以下、表の各項目について説明する。

「出土遺構・出土地点」

遺構出土のものはその遺構名、包含層出土のものはグリッド名を記入する。

「遺物番号」

遺物登録台帳の番号を記入する。番号がつけられているものは、原則として出土位置が記録されたものである。

「層位」

遺構出土のものはその層位、包含層出土のものは基本層序を記入する。

「破片部位（器種）」

口縁部、頸部、胴部（三分割；上位・中位・下位．二分割；上半・下半）、底部などの部位名を記入する。また、復原掲載土器は器種についても記載する。

「接合破片数」「破片数　接合総破片数」

接合した破片の総点数を記入する。破片掲載のものは、接合した破片それぞれの注記の内容を記入する。

「色調」

内外面の色調について、『新版　標準土色帖』（1996年版）を用い近似する色を判断し、その色名を記入する。

「文様」

器面、口唇部にみられる文様を記入する。破片掲載のものは文様の種別のみを記載する。なお、以下の文様については、その痕跡及び施文のあり方から区別した。

1．刻みと刺突文（Ⅳ群b類ホッケマ式）

「刻み」は短い沈線文様のもので、棒状工具の側面を用いたり、先端部を用いても工具の移動により先端部の痕跡が残らないものとし、「刺突文」は先端部の形状が痕跡として観察されるものとした。

2．突瘤文と円形の刺突文（Ⅳ群c類堂林式）

これらは、外面に文様効果を意図したものと考え、内面から外面に施されたものを「突瘤文」、外面から内面に施されたものを「円形の刺突文」とした。

「内面調整」

内面の調整方法を次の二種類から判断して記入する。指頭圧痕が顕著な例も記す。

1．ナ　デ：器面をなでる
　（器面を削り取らずに撫でつける　混入する粒子は器面に沈み込む）

2．ミガキ：器面を丹念に研磨する
　（器面を削り取り、平滑な面を作り出す　混入する粒子が移動したことにより、筋状の痕跡が生じる）

上記の事項は、その痕跡から、すべての場合において明確に識別されるとは限らないが、両者の根本的な違いは、調整行為により器面を削り取るか取らないかにあり、そのことを念頭に分類した。

「胎土」

胎土を、ルーペ(×10、×20）やマイクロスコープ(×30、×50）を用いて、混和材と考えられるもので、礫（長径2㎜以上）、砂（長径0.5㎜以上の粗粒なもの）について観察し、以下の事項を特徴として把握した。その際、視覚的に目立つものを「多い」と判断した。

1．観察される粒子を鉱物か岩石か判断し、それらの相対的な量を把握し、次の五つに分類する。
「ほとんどが岩石」、「岩石主体」
「岩石・鉱物ともにあり」
「鉱物主体」、「ほとんどが鉱物」

なお、岩石・鉱物の量は視覚的に把握したが、鉱物については、受けた光をこれらが反射する際に生じる光沢の具合も手がかりとした。

2．最も多いと判断される混和材の大きさ（粒径）を次の三つに分類する。

・粒径は大：2㎜以上のものが目立つ。
・粒径は中：1㎜以上～2㎜未満のものが目立つ。
・粒径は小：1㎜未満のものが目立つ

3．岩石の種類とその円磨度を観察する。

4．繊維の有無について、含有していれば「繊維」と記入する。

なお、観察された粒子について、岩石名や鉱物名を特定することは、肉眼的な観察という条件において、判断を誤る危険性が考えられたので、上記の内容に留めた。また、「2．粒径の分類」については、大きいものの方が目に止まりやすいという傾向がある。

観察された岩石は、そのほとんどが堆積岩であったが、一部には変成岩も含んでいると思われる。しかし、火成岩と判断されるものは認められなかった。観察者の力量不足もあるが、このことは遺跡周辺の地質環境と矛盾しないものといえよう。

「使用の痕跡」

口唇部や内外面に器面の黒色化（煤）、炭化物付着（こげつき）が、胴部中下位等に被熱による赤色化がみられる場合、それを記す。

「接合破片回収遺構・グリッド」

復原掲載土器について、破片が回収されたグリッド（遺構）を記入する。

備考（時期分類）

時期分類やその他の事項を記入する。また、復原掲載土器は計測値（口径、器高、底径）も記載する。

⑵出土状況を記録した土器［図37―1～43―20　表6・7］

本調査では、土器がまとまって出土した状況が16カ所確認された。これらについては現場で出土状況図（縮尺1：20で掲載）の作成と写真の撮影を行った。これらのうち13個体が復原されたが、できなかったものはその一部を破片資料として掲載している。

1・2はJ―32区のⅢ層で確認された。深鉢の破片の上部に、その場で割れた状態の浅鉢と別個体の底部が出土した。1は口縁部が直立気味で、胴部から底部へと直線的にすぼまる器形を呈する浅鉢である。胴部上位にはＬＲ斜行縄文地に、水平に横環する複数の沈線文が施される。そして、これらを上下につなぐように横位置の「U」字状の沈線文が描かれるが、最上位のものにはみられない。2はやや内湾する口縁部からゆるやかににすぼまる器形の深鉢である。波状口縁で、波頂部は5カ所と判断される。口縁部は無文で、沈線文より下位は斜行縄文が施される。胴部下位付近では条が横走している。1・2はⅣ群ｂ類の手稿式に相当すると考えられる。

3はK―32区の流路Ⅱ層から完形の状態で出土したものである。内傾する口縁部から胴部中位でふくらみ、そこから曲線的にすぼまる器形を呈する。口唇部はやや厚みのある丸形を呈し、縄文が施される。口縁部から胴部上位には沈線文で区切られた無文部分があり、これが三単位施される。胴部下位は無文でミガキが加えられる。Ⅳ群ｂ類の手稿式に相当すると考えられる。

4はK―31区のⅡ層から出土した。胴部下位から底部は器の形状を保ち、その周囲に破片が散在している状態で確認された。頸部より上位の破片は回収できなかった。胴部中位が大きく張り出す器形を呈する。注口部を有しないことから壺と判断される。曲線的な沈線文が、ＲＬ斜行縄文地と無文部分を区切るように施され、無文地には向かい合う弧状の沈線文が縦方向に展開する。胴部下半は無文である。Ⅳ群ｂ類の手稿式に相当すると考えられる。

5はK―32区のⅢ層から、器の形状を保った状態で確認された。胴部の約1／4と注口部分を欠損

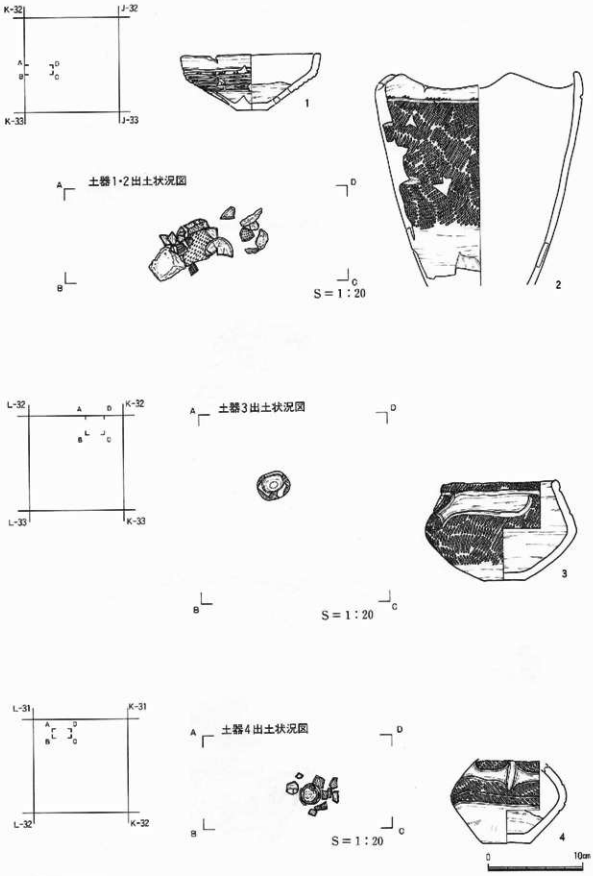
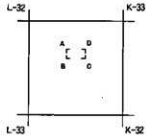
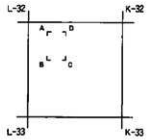


図37　出土状況を記録した土器(1)





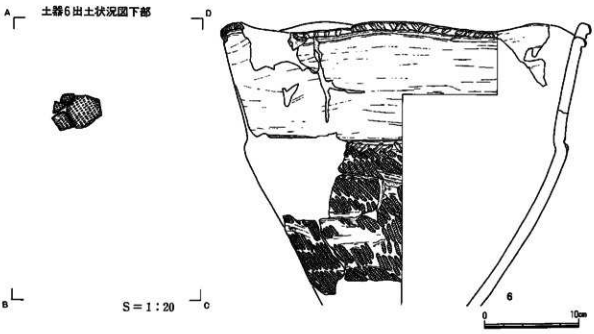
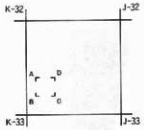
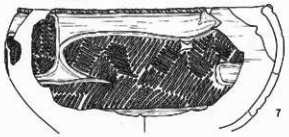
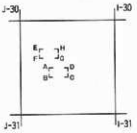
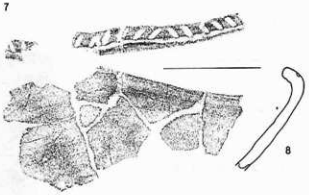


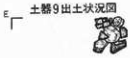
図38　出土状況を記録した土器(2)

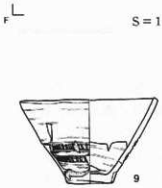












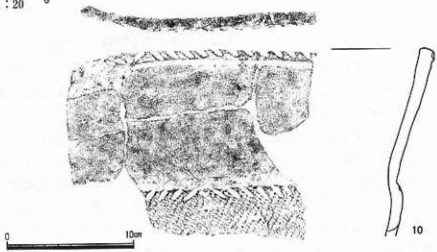


図39　出土状況を記録した土器(3)

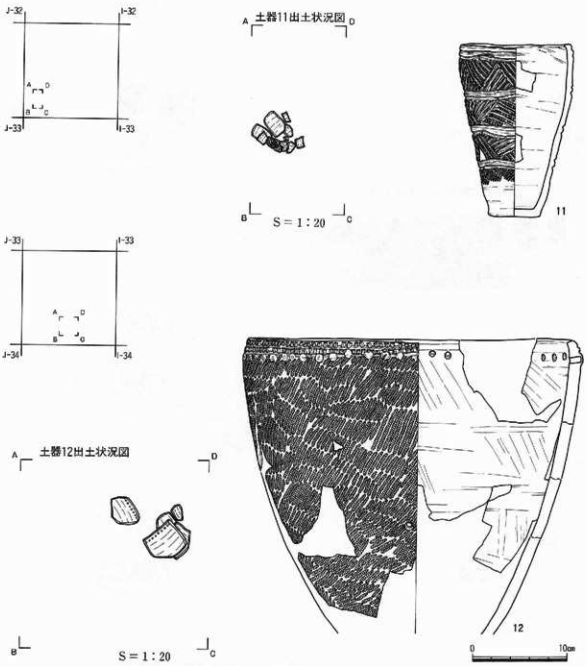


図40　出土状況を記録した土器(4)

する。この部分の破片は回収できなかった。ゆるやかに外反する口縁部から胴部へとつながり、胴部上位がゆるやかにふくらんでから底部へすぼまる器形である。口縁部には水平に横環する沈線文が施され、胴部上半には曲線的な沈線文が描かれ、その中は丹念にミガキが加えられ、器面が低くなる。全体的に丁寧なミガキ調整が施される。Ⅳ群b類の手稲式に相当すると考えられる。

6はK—32区のⅡ層で確認された。はじめに確認された土器を取り上げたところ、さらにその下からまとまった出土が認められた。前者を上部、後者を下部として実測図を掲載した。波状口縁のもので、波頂部は5カ所と推定される。わずかに外反する口縁部から、胴部上位でふくらみ、そこからゆるやかにすぼまる器形を呈する。口唇直下の器面には沈線文と刻みが施され、頸部は無文である。胴部上位は一本の沈線文と刻みが施され、それより下位は斜行縄文が施される。Ⅳ群b類のホッケマ式

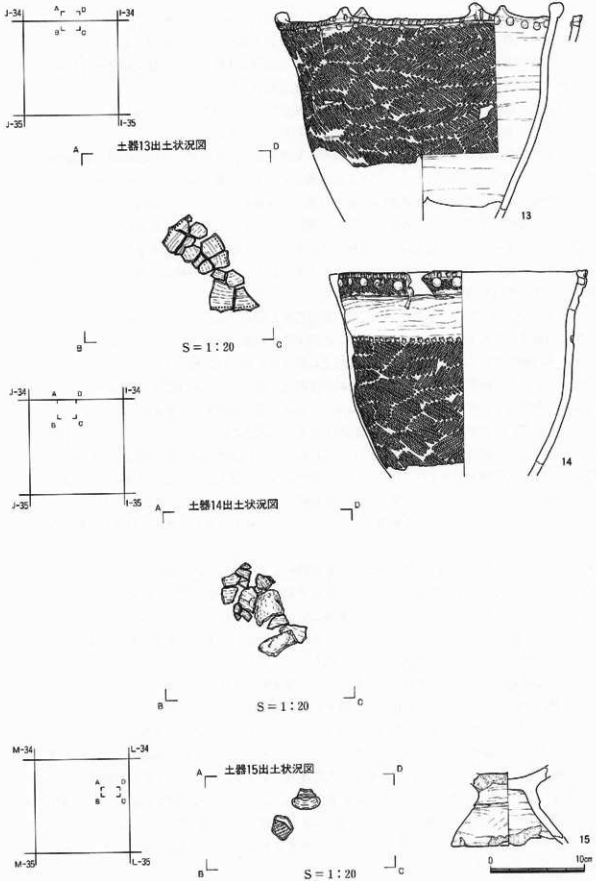


図41　出土状況を記録した土器(5)

に相当すると判断される。

7・8はJ—32区のⅡ層から出土した。2個体が混在していたが、復原できたものは1個体である。

7は強く内湾する口縁部から曲線的に胴部へとつながる器形を呈する鉢である。口唇直下の器面には刻みと沈線文が横環する。それより下位の部分は曲線的な沈線文により無文地と縄文地が区切られる。縄文はLRの同一原体を用いた羽状縄文で、充填施文される。

8は波状口縁で、口唇直下が強く内湾する器形を呈する。この内湾した部分には刻みと沈線文が施される。7・8はともにⅣ群b類のホッケマ式に相当すると考えられる。

9はI—30区のⅣ層から出土した。底部は器の形状を保った状態で、周囲に口縁、胴部の破片が位置していた。外反する口縁部から底部へと直線的にすぼまる器形である。幅の広い無文帯の下位には、上下を横環する沈線文に挟まれた刻みが施される。Ⅳ群b類のホッケマ式に相当すると考えられる。

10はI—30区のⅣ層で、同一個体の口頸部の破片が比較的まとまった状況で確認された。口径が大きなもので、復原できうる程度破片が回収されなかった。平縁で、口唇部直下の外面に刻みと沈線文が横環する。頸部と胴部上位は器面に段差を有する。LR斜行縄文の後から刻みが施される。Ⅳ群b類のホッケマ式に相当するものである。

11はI—32区のⅣ層から出土した。底部は器の形状を保ち、他のほとんどの破片は内面を上にした状態で放射状に位置する状況が認められた。内湾する口縁部から緩やかにふくらみ、そこから底部へとすぼまる器形である。水平に横環する沈線文に挟まれた幅の狭い無文帯により、文様展開は三段に区画される。LR斜行縄文地に複数の鋸歯状の沈線文が施される。底部は中央部がやや高くなっているために不安定である。胴部下位は無文であり、Ⅳ群b類に相当すると判断した。

12はI—33区のⅣ層から出土した。比較的大きめの口縁部の破片がまとまっていた。隣接するH—33・I—32区から破片が回収された。わずかに内湾する口縁部から曲線的にすぼまる器形を呈する。器面にはLR斜行縄文が施され、口唇部直下の器面には、突瘤文、沈線文、刺突文とも判断できうる刻みが施される。文様の切り合い関係から施文順序を判断すると、地文、沈線文、刻みあるいは突瘤文である。突瘤文、刻みといった特徴のうち、ここでは突瘤文を重要と考えた結果、Ⅳ群c類の堂林式としておく。

13はI—34区のⅣ層から口縁部から胴部中位の破片がまとまって出土した。破片は内面を上にして、割れ口がほぼ一致した状態で確認された。接合作業ではK—30区から破片が回収された。やや直立気味の口縁部から頸部へとすぼまり、さらに胴部上位がゆるやかにふくらむ。そして、そこから曲線的に底部へとすぼまる器形を呈する。口唇部には6カ所の突起を有する。器面はRL原体による施文が主体であるが、一部にLR原体を用いて羽状縄文をなしている部分もみられる。口唇部直下の外面には刻み、沈線文、そして円形の刺突文が施される。施文順序は地文、沈線文、刻みあるいは円形の刺突文と判断される。Ⅳ群c類の堂林式に相当すると判断される。

14はI—34区のⅣ層から礫と混ざった状況で出土した。すべての破片は内面を上にした状態であった。I—30・J—33区から出土した破片が接合した。わずかに外反する口縁部から頸部ですぼまり、さらに胴部がゆるやかにふくらんで、底部へと曲線的にすぼまる器形を呈する。口唇部直下の器面は横環する粘土紐が貼付られ、そこに刺突文が施される。さらに突瘤文、縄文もみられる。頸部には幅の広い無文帯を有し、上は沈線文、下は刺突文により区画される。胴部上位以下はRL原体により地文が施されるが、撚りの異なる原体を用いて、羽状縄文をなしている部分も観察される。Ⅳ群c類の堂林式に相当すると考えられる。

15はL—34区の流路Ⅱ層から器の形状を留めた状態で確認された。近くには手稲式に相当する口縁

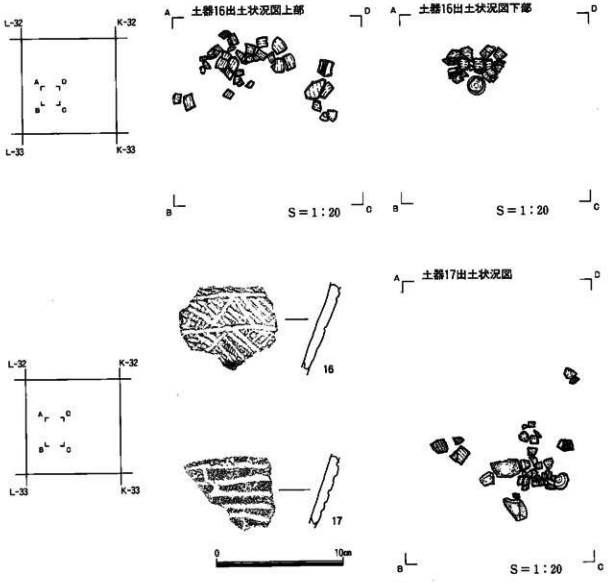


図42　出土状況を記録した土器(6)

部の破片が出土した。台付きの土器の「台」部分である。無文地に横環する沈線文が施される。時期分類はⅣ群ｂ類とした。

16～20は破片掲載のものである。土器の胎土が脆く接合に耐えられないこと、接合する破片や回収された破片が少ないため、復原するにあたって推定の度合いが大きくなりすぎること、時間的な制約等が復原できなかったことが理由である。

16はK—32区のⅡ層から出土した。内面を上にした破片のまとまりが確認され、これを記録し掘り下げたところ、さらにその下からもまとまった状況が認められた。器面には鋸歯状に描かれた複数の沈線文が二段に展開する。Ⅳ群ｂ類に相当すると判断した。

17もK—32区のⅡ層から出土した。礫と混じった状態で確認された。器の形状を保った底部の付近にまとまる破片はすべて内面を上にしているが、やや離れたものには外面を上にしているものも認められる。ＬＲ斜行縄文地に横環する複数の沈線文が施され、さらに、蛇行する沈線文がこの複数の沈線文を上下に切るように描かれる。Ⅳ群ｂ類の手稲式と考えられる。

18・19はK—34区のⅢ層で、二個体が混在する状況で確認された。しかし、18の同一個体と確実に

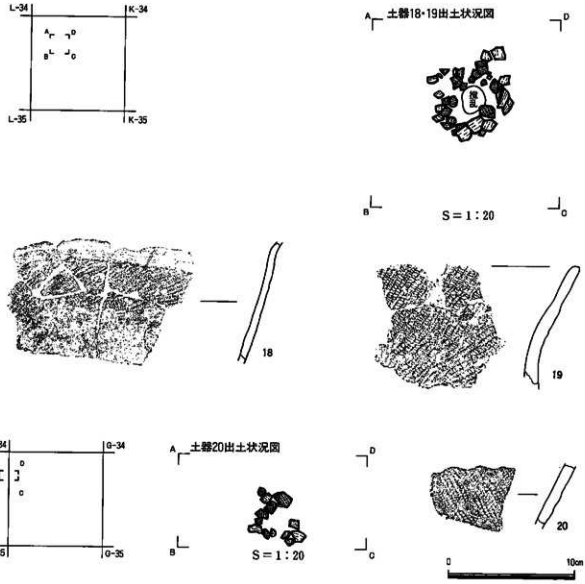


図43　出土状況を記録した土器(7)

判断できる破片は他になく、ほとんどが19と同一個体の破片である。まとまりの中心部に杭跡(攪乱)がある。18は胴部下位で、ＬＲ斜行縄文が施される。その上下には無文帯を有する。19は口縁部と判断したが、輪積み時に調整された「擬口縁」であるかもしれない。器面にはＬＲ斜行縄文が施される。18・19はともにⅣ群ｂ類に相当するものと判断される。

20はＧ・Ｈ―34区のⅡ層中で、胴部の破片がまとまって出土した。台帳にはＨグリッドで登録した。器面にはＲＬ原体による縦走気味の縄文が浅く施される。Ⅴ群に相当すると考えられる。

(3)復原掲載土器［図44―１～９　表８］

出土状況を記録していないものでは、９個体が復原された。すべてⅣ群ｂ類に相当する。

１は口縁部から直線的に底部へと強く外反する器形の浅鉢である。口唇部には突起を六カ所有すると考えられる。口頸部と底部付近は無文で、ミガキがなされる。胴部にはＲＬ斜行縄文地に複数の横環する沈線文が描かれ、それらに重ねて、「３」字状を呈する曲線的な沈線文が縦方向に施される。

２は壺で、口縁部から肩部までが復原された。すぼまる口縁部から直線的に肩部へとつながる器形を

呈する。口頸部は無文帯で、肩部より下位は、沈線文で区画される縄文地と無文地による文様が展開する。肩部付近の内面は指頭圧痕が顕著に認められる。1・2はⅣ群b類の手稲式に相当すると考えられる。3は器の形状を留めたもので、新たにこれに接合した破片はない。筒形を呈する異形土器と判断される。クランク状の沈線文により、縄文地と無文地が区別される文様が認められ、これの上下には横環する沈線文に挟まれた無文帯が観察される。4は外反する口縁部からほぼ直線的にすぼまる器形である。口頸部は無文帯で、胴部との境には、横環する沈線文に挟まれた刺突文が施される。胴部の文様は、クランク状の沈線文により縄文地と無文地が分けられる。縄文はＬＲ斜行縄文で、条の方向が同じであることから、磨消手法によるものと推測される。5は小型の深鉢で、5カ所の波頂部をもつ波状口縁である。外反する口縁部から胴部中位へ直線的につながり、そこから胴部下位がゆるやかにふくらみ底部へとつながる器形を呈する。口唇部直下の器面と胴部中位には、沈線文と刺突文が施される。地文は撚りの異なる原体を用いた羽状縄文で、底部までみられる。底面は中央が若干高まっており、不安定である。4・5はⅣ群b類のホッケマ式に相当すると考えられる。6は外反する口縁部から底部へと直線的にすぼまる器形の鉢である。口唇部には4カ所の突起を有し、口縁部から胴部中位の器面にはＬＲ斜行縄文が浅く施され、底面は上げ底である。7は小型の深鉢であるが、割れ口等から判断して輪積み成形のものである。わずかに外反する口縁部からほぼ直線的に底部へとすぼまる器形である。器面にはＬＲ斜行縄文が施される。8は器の形状を保ったもので、これに新たに接合する破片は回収できなかった。土製品の可能性も考えられたが、既存の資料のうち該当するものを特定できなかったので、ミニチュア土器として取り扱った。胴部からは直線的にすぼまる器形を呈する。底面となる円盤に粘土を貼付け、これを指でのばし胴部等を形作った「手づくね」成形と判断される。器面には1段Ｒの無節と考えられる横走縄文が浅く施される。また、底部には焼成前に外面から穿たれた孔がある。底面は丸みを帯び不安定である。また、図化していないが沈線文らしきものも観察される。9は器の形状を保った底部に胴部破片が3点接合したものである。外面は無文で横方向にミガキがなされ、底面は上げ底である。6～9は胴部下位から底部が無文であることから、Ⅳ群b類の手稲式頃のものと考えられる。

(4)破片掲載土器［図45―1～48―39　表9］

Ⅲ群a類［1～7］

1は口縁部が肥厚するもので、口唇部に縦位の絡条体圧痕文がみられる。口縁部には横位の絡条体圧痕文と刺突文が施される。摩耗しているため判然としないが、絡条体は左巻きと判断される。縄の撚りは不明である。2は格子目状と矢羽根状の押型文が施される。3も格子目状の押型文が施されるが、長方形を呈する部分が認められる。2と3は同一個体であるかもしれない。4はＬＲ斜行縄文を施した後、紐状の粘土が貼付けられ、この上に刻みが施される。5は結束第1種羽状縄文が施される。6と7は底部で、同一個体と考えられる。縦長を呈する格子目状と矢羽根状の押型文が施される。これらの土器すべてには、繊維の混入が認められる。

Ⅳ群［8～25］

8はＬＲ斜行縄文地に先端が尖り気味の工具で鋸歯状の沈線文が描かれ、口唇部に縄文が施される。9～11は波状口縁で、沈線文の工具は先端が丸みを帯びたものを用いている。9はＬＲ斜行縄文地に波状と弧状の沈線文が施される。10は地文に三本組の沈線文が施される。11は波状と対峙する弧状の沈線文が施される。8～11はⅣ群b類のウサクマイＣ式に相当すると考えられる。

12は口頸部が無文帯で、胴部は磨消手法がみられる。縄文地と無文地とが曲線的な沈線文により区切られた文様が展開する。13は口唇直下の器面に幅の狭い無文帯を有し、それより下位には横環する

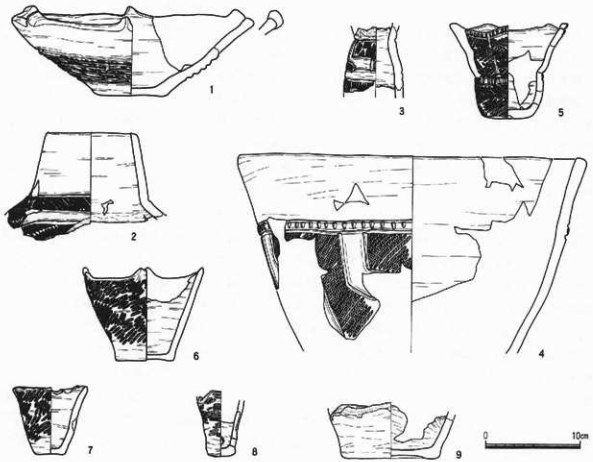


図44　復原掲載土器

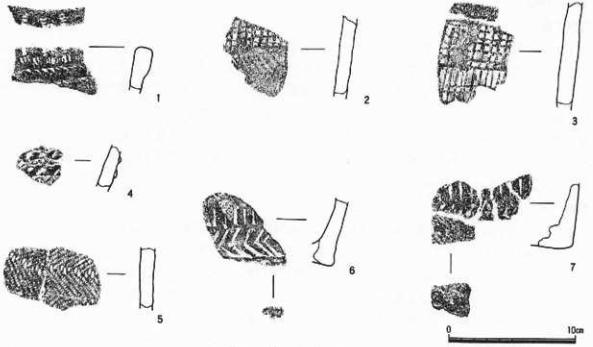


図45　破片掲載土器(1)

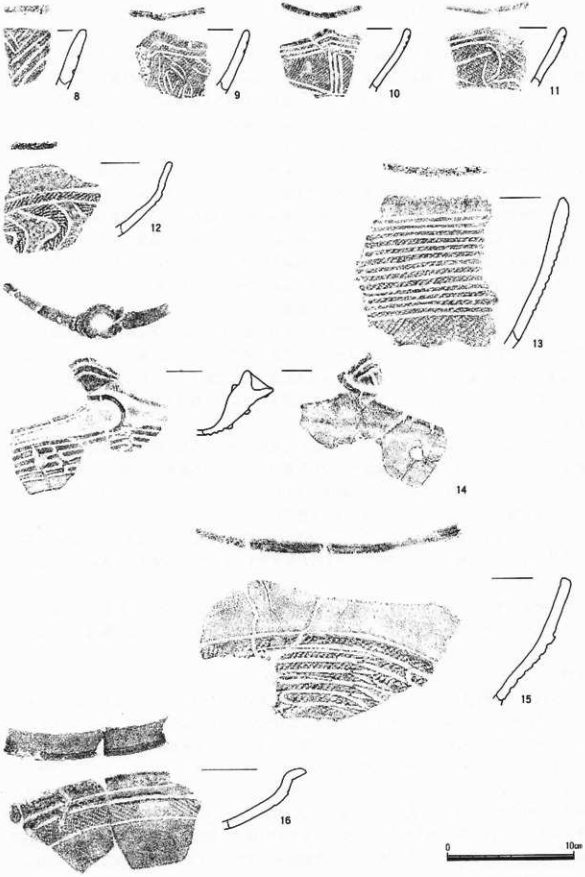


図46　破片掲載土器(2)

14本の沈線文が施される。破片の左側部分には、複数の沈線文を上下につなぐ、弧状の沈線文も描かれている。14は立体的な突起をもつもので、浅鉢と推定される。胎土、焼成が良いためであろうか、他の土器と比べて非常に硬質でつくりも丁寧である。突起上には凹みがあり、内面から外面にかけて、螺旋状に隆起線がみられる。口縁部は上下を隆起線に挟まれ、丹念にミガキが施された無文帯である。胴部はＬＲ斜行縄文地に横環する複数の沈線文と、これらを上下につなぐ横位置の「U」字状の沈線文が施され、さらにそれより下位は無文である。破片の左側の方に補修孔がみられる。15は波状口縁で、口頸部に幅の広い無文帯を有する。胴部には地文、横環する複数の沈線文、これらを上下につなぐ曲線的な沈線文が施される。16は摩耗が著しいもので、浅鉢と考えられる。沈線文により無文地と縄文地が区画される。外面には光沢のある黒色の炭化物らしきものが部分的に付着しているが、黒漆ではないかと推測される。12～16はⅣ群ｂ類の手稲式に相当すると判断される。

17は口頸部に幅の広い無文帯を有し、胴部はＬＲ斜行縄文が観察される、頸部と胴部の境には刻みが施され、器面には明瞭な段差を有する。18は波状口縁のものである。曲線的にふくらむ頸部には鋸歯状の沈線文が複数描かれ、上下との境には、横環する沈線文や刺突文が施される。地文はＲＬ斜行縄文である。19は突起部で、口唇部断面は切り出し形を呈する。内面は突起から垂下する粘土の貼付がなされ、そこに刻みが施される。外面には口唇部直下の器面に縄文がみられ、沈線文により無文部分と区画される。口唇部から外面にかけての角に刻みが施される。20は突起の頂部と口唇部から外面にかけての角に刻みが施される。外面は無文地に沈線文が描かれる。23は胴部で、破片の上下部分に横環する刻みと沈線文が施される。器面には縄文と曲線的な沈線文がみられるが、地文の一部は縦方向に回転施文し、羽状縄文を構成している。17～20・23はⅣ群ｂ類のホッケマ式に相当すると考えられる。

21は口唇部が肥厚し、やや内傾する。口唇部から外面にかけての角に刻みが、器面には沈線文と孔が施される。22は無文帯を有する頸部がくびれる器形である。口唇部直下の器面、頸部と胴部上位との境には、沈線文と刺突文が施され、口縁部には円形の刺突文もみられる。地文は撚りの異なる原体による羽状縄文である。21・22はⅣ群ｃ類の堂林式に相当すると考えられる。

24は筒状を呈する異形土器と推測される。横環する沈線文に挟まれた無文帯が、文様帯を区画する。文様帯内はＬＲ斜行縄文地に、沈線文に囲まれた無文部分が縦方向に展開する。Ⅳ群ｂ類に相当すると判断される。

25は頸部が無文で、円形の刺突文と２本の沈線文により胴部と区画される。胴部上位はＬＲ斜行縄文地に沈線文が展開し、それに沿うように円形の刺突文が施される。Ⅳ群ｃ類に相当すると推測される。

Ⅴ群 [26～39]

26は円形の撚紐圧痕が施された突起を有する。突起下の外面には、縦方向に粘土を貼付け、縄線文が刻み状に施される。地文の原体はＲＬである。27は幅広い口唇部に撚紐による施文がみられる。器面には円形の粘土が貼付られるが、これは注口部を意識しているような印象を受ける。28は摩耗が著しい突起部である。撚紐による圧痕が観察される。29・30は同一個体と考えられる。ゆるやかな波頂部は、外面に施された沈線文により二つの突起状を呈する。器面には１段Ｌの原体による曲線的な縄線文と半截竹管状工具による刺突文が観察される。31は１段Ｌの原体を用い、横環する縄線文が複数施される。32は口唇部に撚紐の刻み、器面にはＲＬ斜行縄文と沈線文が施される。33は器面に横環する縄線文が複数みられ、口唇部は撚紐の刻みと縄線文が施される。縄線文がある部分は、器面にかけての角に撚紐の圧痕がみられる。以上の原体はすべて１段Ｌである。34は口縁部に櫛歯状と考えられ

図47　破片掲載土器(3)

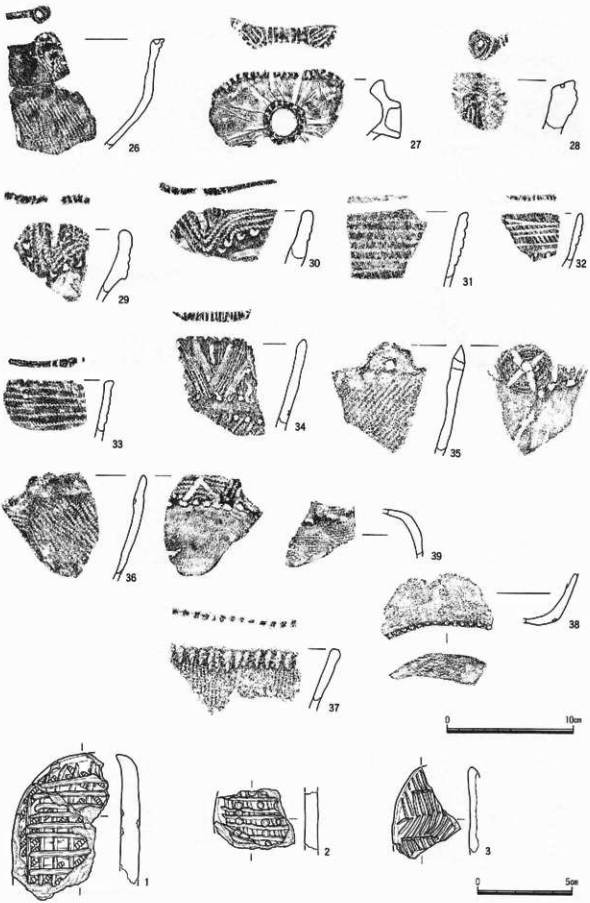


図48　破片掲載土器(4)・土製品

る工具による鋸歯状の文様が展開する。それより下位の器面には上下を円形の刺突文に挟まれた無文帯を有する。口唇部は撚紐による施文と判断される。35は丸形の突起を有し、外面には縄文と孔がみられる。内面には十字の沈線文と円形の撚紐圧痕、刺突文が施される。36は台形状の突起をもち、外面は縄文がみられる。内面には1段Lの撚紐圧痕、沈線文、刺突文が施される。35・36はともに外面の口縁部付近に指頭圧痕が顕著であり、これは突起部形成時に生じたと考えられる。37は器面に縦走する縄文、口唇部には撚紐による刻みが施される。原体はともにLRである。38は底部で、RL原体による縦走気味の縄文が胴部、底面に施され、両者の境には撚紐による刺突文が施される。39は櫛歯状の工具による施文がみられる。器形の湾曲の度合いや内面に指頭圧痕が顕著なことから、壺等の肩部と推測される。26～38はすべて晩期の後半（V群b・c類）に相当するものと考えられる。

(5)土製品［図48―1～3　表10］

1は地文が施された後、交差する沈線文が複数描かれる。2には円形の刺突文が施される。3は裏面が剥離する。表面には細い沈線文が描かれる。1～3は、すべて「オロシガネ状土製品」とよばれるものに相当し、縄文時代後期中葉頃のものと考えられる。（末光正卓）

表6　包含層出土復原掲載土器観察表（出土状況記録分）

図	掲載番号	出土グリッド	遺物番号	層位	破片部位（器種）	接合破片数	色調 外面	色調 内面	文様	内面調整	胎土	使用の痕跡	接合破片回収遺構・グリッド	備考（時期分類）
37	1	J－32	14－2	Ⅲ	口縁部～底部（浅鉢）	9	[illegible]	[illegible]	[illegible]	ミガキ	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
〃	2	J－32	14－2	Ⅲ	口縁部～胴部下位（深鉢）	35	[illegible]	[illegible]	[illegible]	ミガキ	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
〃	3	K－32	15	流路Ⅱ	口縁部～底部（鉢）	1（完形）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	ミガキ	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
〃	4	K－31	7－1	Ⅱ	胴部上位～底部（壺）	12	[illegible]	[illegible]	[illegible]	ナデ・ミガキ	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
38	5	K－32	9	Ⅲ	口縁部～底部（注口）	1	[illegible]	[illegible]	[illegible]	ナデ・ミガキ	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
〃	6	K－32	3	Ⅱ	口縁部～胴部下位（深鉢）	29	[illegible]	[illegible]	[illegible]	ナデ・ミガキ	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
39	7	J－32	13－2	Ⅱ	口縁部～胴部上位（鉢）	46	[illegible]	[illegible]	[illegible]	ミガキ	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
〃	9	I－30	12－2	Ⅳ	口縁部～底部（鉢）	17	[illegible]	[illegible]	[illegible]	ミガキ	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
40	11	I－32	16	Ⅳ	口縁部～底部（深鉢）	19	[illegible]	[illegible]	[illegible]	ナデ・ミガキ	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
〃	12	I－33	17	Ⅳ	口縁部～胴部下位（深鉢）	31	[illegible]	[illegible]	[illegible]	ナデ・ミガキ	[illegible]	[illegible]	K－33、I－33区	[illegible]
41	13	I－34	18（1）	Ⅳ	口縁部～胴部中位（深鉢）	33	[illegible]	[illegible]	[illegible]	ナデ・ミガキ	[illegible]	[illegible]	K－33区	[illegible]
〃	14	I－34	1－1	Ⅳ	口縁部～胴部中位（深鉢）	37	[illegible]	[illegible]	[illegible]	ミガキ	[illegible]	[illegible]	I－30、J－33区	[illegible]
〃	15	L－34	8－1	流路Ⅱ	底部～台部?（台付きの鉢部）	1	[illegible]	[illegible]	[illegible]	ナデ・ミガキ	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]

表7　包含層出土破片掲載土器観察表（出土状況記録分）

図	掲載番号	出土グリッド	遺物番号	層位	破片数	接合破片数	破片部位	色調 外面	色調 内面	内面調整	文様	胎土	使用の痕跡	備考（時期分類）
39	8	J－32	13－7	Ⅳ	9	9	口縁部～頸部	[illegible]	黒褐色	ミガキ	[illegible]	[illegible]	[illegible]	（Ⅳ群b類）
〃	10	I－30	12－1 / —	Ⅱ / Ⅲ	1 / 4	5	口縁部～胴部上位	にぶい褐色	[illegible]	ミガキ	[illegible]	[illegible]	[illegible]	（Ⅳ群b類）
42	16	K－32	4	Ⅱ	1	1	胴部上位？	—	黒褐色	ナデ	[illegible]	[illegible]	[illegible]	（Ⅳ群b類）
〃	17	K－32	5－1	Ⅱ	1	1	胴部	灰褐色	褐灰色	ナデ・ミガキ	[illegible]	[illegible]	[illegible]	（Ⅳ群b類）
43	18	K－34	10	Ⅲ	8	8	胴部中位～下位	にぶい橙色	黒褐色	ナデ・ミガキ	縄文	[illegible]	[illegible]	（Ⅳ群b類）
〃	19	K－34	10	Ⅲ	3	3	口縁部?～胴部上位	にぶい橙色	[illegible]	ナデ・ミガキ・[illegible]	縄文	[illegible]	[illegible]	（Ⅳ群b類）[illegible]
〃	20	(G)-Ⅱ-Ⅲ	12	Ⅱ	1	1	胴部中位～下位	灰褐色	灰褐色	ナデ・[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	（Ⅴ群）

表8　包含層出土復原掲載土器観察表

図	掲載番号	出土グリッド	遺物番号	層位	破片部位（器種）	接合破片数	色調 外面	色調 内面	文様	内面調整	胎土	使用の痕跡	接合破片回収遺構・グリッド	備考（時期分類）
44	1	J－29	—	Ⅲ	口縁部～底部（浅鉢）	5	[illegible]	[illegible]	[illegible]	ナデ・ミガキ	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
〃	2	I－30	—	Ⅲ	口縁部～胴部（壺）	30	[illegible]	[illegible]	[illegible]	ナデ・ミガキ	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
〃	3	N－33	—	Ⅱ	頸部？～胴部（異形土器）	1	[illegible]	[illegible]	[illegible]	ナデ・ミガキ	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
〃	4	I－34	—	Ⅳ	口縁部～胴部上位（深鉢）	33	[illegible]	[illegible]	[illegible]	ミガキ	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
〃	5	K－34	—	Ⅱ	口縁部～底部（深鉢）	12	[illegible]	[illegible]	[illegible]	ナデ・ミガキ	[illegible]	[illegible]	L－34区	[illegible]
〃	6	L－36	—	Ⅲ	口縁部～底部（深鉢）	8	[illegible]	[illegible]	[illegible]	ナデ・ミガキ	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
〃	7	L－36	—	Ⅲ	口縁部～底部（深鉢）	3	[illegible]	[illegible]	[illegible]	ナデ・ミガキ	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
〃	8	K－32	—	流路Ⅱ	胴部～底部（深鉢？）	1	[illegible]	[illegible]	[illegible]	ナデ・ミガキ	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
〃	9	L－33	—	流路Ⅱ	胴部下位～底部（深鉢）	4	[illegible]	[illegible]	—	ナデ・ミガキ	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]

表9　包含層出土破片掲載土器観察表(1)

図	掲載番号	出土グリッド	遺物番号	層位	破片数	接合破片数	破片部位	色調 外面	色調 内面	内面調整	文様	胎土	使用の痕跡	備考(時期分類)
45	1	O－34	—	Ⅳ	1	1	口縁部	橙色	橙色	?	縄条体圧痕文、刺突文	鉱物主体 粒径は小 繊維	—	(Ⅱ群a類)
〃	2	O－33	—	Ⅳ	1	1	胴部	橙色	黒褐色	ナデ・指頭圧痕	押型文（格子目文、矢羽根状文）	鉱物主体 粒径は中 繊維	内面 黒色化・炭化物付着 外面 赤色化 橙色(2.5YR6/8)	(Ⅱ群a類)
〃	3	O－33	—	Ⅳ	2	2	胴部	—	黒褐色	ミガキ・指頭圧痕	押型文（格子目文）	ほとんどが鉱物 粒径は中 繊維	内面 黒色化・炭化物付着 外面 赤色化 明赤褐色(2.5YR5/6)	(Ⅱ群a類)
〃	4	I－34	—	Ⅳ	1	1	胴部	にぶい褐色	灰褐色	ミガキ	縄文、貼付、刻み	岩石（堆積岩）鉱物ともにあり 粒径は小 繊維	内面黒色化 炭化物付着	(Ⅱ群a類)
〃	5	I－34	—	Ⅳ	2	2	胴部	にぶい赤褐色	黒褐色	ミガキ・ナデ	縄文	ほとんどが鉱物 粒径は中 繊維	内面黒色化 炭化物付着	(Ⅱ群a類)
〃	6	M－33	1	Ⅳ	1	1	底部	にぶい黄橙色	灰褐色	ナデ・指頭圧痕	押型文（格子目文、矢羽根状文）	鉱物主体 粒径は往 繊維	内面黒色化 炭化物付着	(Ⅱ群a類)
〃	7	M－33 未注記	— —	Ⅱ 	3 1	4	底部	にぶい黄橙～橙色	灰褐色	—	押型文（格子目文、矢羽根状文）	鉱物主体 粒径は小 繊維	—	(Ⅱ群a類)
46	8	K－33	—	流路Ⅱ	1	1	口縁部～頸部	にぶい褐色	褐灰色	ナデ?	縄文、沈線文	ほとんどが鉱物 粒径は小	口唇部・外面 黒色化・炭化物付着 内面 黒色化	(Ⅳ群b類)
〃	9	L－36	—	Ⅲ	1	1	口縁部	褐灰色	にぶい黄褐色	ナデ・ミガキ	縄文、沈線文	ほとんどが岩石（角のとれた堆積岩） 粒径は中	外面 黒色化? 内面 黒色化・炭化物付着	(Ⅳ群b類)
〃	10	L－36	—	流路Ⅱ	2	2	口縁部	灰白～褐灰色	灰白色	ナデ・ミガキ	縄文、沈線文	岩石主体 粒径は小	内外面 黒色化・炭化物付着	(Ⅳ群b類)
〃	11	L－34	—	Ⅱ	1	1	口縁部	にぶい黄橙～褐灰色	にぶい黄橙色	ナデ	縄文、沈線文	鉱物主体 粒径は小	外面 黒色化?	(Ⅳ群b類)
〃	12	K－31	—	流路Ⅱ	1	1	口縁部～胴部上位	にぶい黄橙色	橙～褐灰色	ナデ・ミガキ	縄文、沈線文	岩石主体（やや角のある堆積岩） 粒径は大	口唇部・内外面 黒色化・炭化物付着	(Ⅳ群b類)
〃	13	L－35	—	Ⅱ	1	1	口縁部～胴部上位	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	縄文、沈線文	ほとんどが岩石 粒径は大	内面 炭化物付着	(Ⅳ群b類)
〃	14	K－36	—	Ⅲ	5	5	口縁部～頸部	褐灰～黒褐～灰黄褐色	灰褐色	ミガキ	隆起線、縄文、沈線文	岩石主体（角のとれた堆積岩） 粒径は小	口唇部 黒色化 内外面 黒色化・炭化物付着	(Ⅳ群b類)
〃	15	K－32	—	Ⅱ 流路Ⅰ層 Ⅲ	2 1 1	4	口縁部～胴部上位	にぶい黄橙～黒褐色	にぶい黄橙色	ナデ・ミガキ	縄文、沈線文	鉱物主体 粒径は小	口唇部 内面 黒色化	(Ⅳ群b類)
〃	16	K－32 L－35	- —	Ⅰ Ⅲ	1 1	2	口縁部～胴部中位	褐灰～にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	縄文、沈線文	鉱物主体 粒径は小	内面 黒色化	(Ⅳ群b類) *外面に黒漆が付着?
47	17	I－34	—	Ⅳ	1	1	口縁部～胴部上位	にぶい黄橙色	褐灰～黒褐色	ナデ・ミガキ	縄文、沈線文、刺突文	鉱物主体 粒径は小 繊維	口唇部・外面 黒色化 内面 黒色化・炭化物付着	(Ⅳ群b類)
〃	18	I－33	2	Ⅳ	3	3	口縁部～胴部上位	にぶい橙色	黒褐～褐灰色	ミガキ	縄文、沈線文、刺突文	ほとんどが鉱物 粒径は小	外面 黒色化 口唇部・内面 黒色化・炭化物付着	(Ⅳ群b類)
〃	19	I－30	—	Ⅳ	2	2	口縁部～胴部	にぶい黄橙色	黒褐色	ミガキ	縄文、沈線文、刻み	鉱物主体 粒径は小	口唇部・内面 黒色化・炭化物付着 外面 炭化物付着	(Ⅳ群b類)
〃	20	I－30	—	Ⅲ	1	1	口縁部	褐灰色	にぶい褐色	ミガキ	沈線文、刻み	鉱物主体 粒径は小	口唇部 黒色化 内外面 黒色化・炭化物付着	(Ⅳ群b類)
〃	21	J－31	—	Ⅱ	1	1	口縁部	褐灰～黒褐色	褐灰～黒褐色	ミガキ	刻み、孔、沈線文	岩石主体（やや角のとれた堆積岩?） 粒径は中	口唇部・内外面 黒色化・炭化物付着	(Ⅳ群c類)
〃	22	I－33	—	Ⅳ	1	1	口縁部～胴部上位	褐灰～黒褐色	褐灰～黒褐色	ミガキ	縄文、沈線文、突瘤文、刻み、刺突文	岩石・鉱物ともにあり 粒径は小	口唇部・内外面 黒色化・炭化物付着	(Ⅳ群c類)
〃	23	I－30	—	Ⅲ	7	7	胴部上位～中位	褐灰色	橙色	ナデ・ミガキ	縄文、沈線文、刻み	鉱物主体 粒径は小 繊維	外面 黒色化・炭化物付着 内面 黒色化 外面赤色化 橙色(5YR7/6)	(Ⅳ群b類)

表3　遺構出土破片掲載土器観察表(2)

図	掲載番号	出土グリッド	遺物番号	層 位	破片数	接合破片数	破片部位（器種）	色調 外面	色調 内面	内面調整	文 様	胎 土	使用の痕跡	備 考（時期分類）
〃	24	L－34	—	Ⅱ	1	1	胴部中位？	灰黄色	灰黄色	ナデ・指頭圧痕	縄文、沈線文	岩石主体（角のとれた堆積岩） 粒径は中	外面　黒色化	（晩期も後） 黒浜土器
〃	25	I－34	—	Ⅱ	1	1	頸部～胴部上位	にぶい黄橙色	灰黄褐色	ミガキ	縄文、沈線文、円形の刺突文	ほとんどが岩石（角のとれた堆積岩） 粒径は中	内面　黒色化	（晩期も後？）
48	26	K－35	—	縄溝Ⅱ	2	2	口縁部～胴部上位	黒褐色	にぶい黄橙色	ナデ・ミガキ 指頭圧痕	隆帯貼付Ⅱ字状沈線、粘土粒小貼付	ほとんどが鉱物 粒径は小	外面　黒色化・炭化物付着 内面　黒色化	（V期）
〃	27	I－33	—	Ⅱ	2	2	口縁部？	にぶい褐色	にぶい黄橙色	ナデ・ミガキ 指頭圧痕	沈線の施み、円形の刺突	鉱物主体　粒径は小	内外面 黒色化・炭化物付着	（V期）
〃	28	K－35	—	Ⅱ	1	1	口縁部	褐灰色	にぶい黄橙色	ナデ	隆帯貼付、刻目貼付、粘土粒小貼付	ほとんどが鉱物 粒径は小	口縁部・外面　黒色化	（V期）
〃	29	I－37	—	Ⅱ	1	1	口縁部	にぶい橙色	にぶい黄橙色	ナデ・指頭圧痕	沈、沈線文、隆帯文、刺突施み、横位	ほとんどが岩石（白色の堆積岩？） 粒径は小　繊維	外面　黒色化	（V期）
〃	30	I－37	—	Ⅱ	1	1	口縁部	にぶい橙色	橙色	ナデ・指頭圧痕	沈、沈線文、隆帯、刺突施み、横位	ほとんどが岩石（白色の堆積岩？） 粒径は小　繊維	—	（V期）
〃	31	I－32	—	Ⅱ	1	1	口縁部	黒褐色	灰褐色	ナデ	縄文、縄文文	岩石・鉱物ともにあり 粒径は小	口縁部・内外面 黒色化・炭化物付着	（V期）
〃	32	K－35	—	Ⅱ	1	1	口縁部	にぶい黄橙色	灰黄褐色	ナデ・指頭圧痕	隆線の施み、縄縁文	鉱物主体 粒径は小	口縁部・外面 黒色化・炭化物付着	（V期）
〃	33	K－32	—	Ⅱ	1	1	口縁部	にぶい黄橙色	浅黄橙色	ナデ	縄文、沈線文、隆線の施み	鉱物主体 粒径は小	口縁部・外面黒色化	（V期）
〃	34	I－34 I－37	— —	Ⅱ Ⅲ	1 1	2	口縁部	にぶい黄橙色	褐灰色	ナデ	隆帯の施み、沈線文、円形の刺突文	鉱物主体 粒径は小	外面　黒色化	（V期）
〃	35	I－37	—	Ⅲ	1	1	口縁部	にぶい褐～褐灰色	黒褐色	ナデ	粘、も、沈線文、隆帯貼付、施、隆帯施	鉱物主体 粒径は中	内外面 黒色化・炭化物付着	（V期）
〃	36	I－37	—	Ⅲ	1	1	口縁部	暗～にぶい黄橙色	褐灰～黒褐色	ナデ	縄文、縄縁文、沈線文り刺突文	岩石・鉱物ともにあり 粒径は小	内面　黒色化・炭化物付着	（V期）
〃	37	G－32	—	Ⅲ	2	2	口縁部	にぶい褐色	黒褐色	ナデ・指頭圧痕	縄文、施縁の施み	ほとんどが鉱物 粒径は中	口縁部・内外面 黒色化・炭化物付着	（V期）
〃	38	I－33	—	Ⅲ	1	1	胴部下位～底部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	縄文、施縁による刺突文	鉱物主体 粒径は小	内外面 黒色化・炭化物付着	（V期）
〃	39	I－32	—	Ⅲ	1	1	胴部	灰黄褐色	にぶい黄橙色	ナデ・指頭圧痕	沈線文	岩石主体（白色の堆積岩？） 粒径は小	外面　黒色化・炭化物付着	（V期） 後、住口？

表10　包含層出土土製品観察表

図	掲載番号	出土グリッド	遺物番号	層 位	破片数	接合破片数	色調 外面	色調 内面	成形調整	文 様	胎 土	備 考 器種名(長軸)×厚軸／厚さ cm）重量 g
48	1	L－32	—	Ⅱ	2	2	浅黄橙色	にぶい橙色	ナデ・指頭圧痕	縄文、沈線文	ほとんどが岩石（角のとれた堆積岩） 粒径は大	オロシガネ状土製品 (7.8)×(3.0)/1.1　(39.6)
〃	2	K－31	—	Ⅱ	1	1	にぶい褐色	にぶい橙色	ナデ・指頭圧痕	沈線文、円形の刺突文	岩石主体（角のとれた堆積岩） 粒径は中	オロシガネ状土製品 (3.2)×(4.4)/0.7　(12.0)
〃	3	L－35	—	Ⅱ	1	1	橙色	—	ナデ・指頭圧痕	沈線文	岩石・鉱物ともにあり 粒径は小	オロシガネ状土製品 (4.7)×(3.6)/0.5　(5.9)

2　石器［図49～63　表11・12　図版30～37］

図50～53は包含層出土の遺物分布図である。出土点数とともに等量線を表示した。流路1が走るJ～Mラインの間と、O—33～H—31区にかけての幅約10mの範囲に特に多くの遺物が分布する。また、I～K—29区では遺物の密度が薄いが、これは遺物のほとんどを集石6・7として取り上げたため、包含層の遺物が大きく減ってしまったことが原因である。遺物の密度はむしろ他のグリッドに比べて高いはずである。また、調査区内の削平の度合いはグリッド毎に大きな違いはないため、遺物分布の疎密は人為的な改変の影響を大きく受けてはいないものと考えている。

分布図からは器種による分布の偏りがあるようには感じられず、遺跡内での場の使い分けがなされていなかった可能性が高い。厳密にいえば遺物の出土量には偏りがあるが、器種ごとの出土比率はどのグリッドでも大きな違いはない。したがって、何らかの場の使い分けが存在したことは確かであるが、石器の器種の違いを反映するような場の使い分けはなされていなかったことになる。さらに土器の分布や図53の下段に示した製品と製品以外の分布図をみても分布状況に大きな違いがないことから、遺物の分布状況は生活行為の結果というよりも廃棄行為の結果を反映している可能性が高い。

また、遺跡から出土している土器の主体は縄文時代後期中葉であることから、この分布状況は縄文時代後期中葉のそれを反映している可能性が高い。

使用されている石材は、剥片石器では黒曜石が圧倒的に多く96.8%、頁岩が1%、チャートが0.6%である。礫石器では器種毎に主要な石材が異なり、石斧は片岩が最も多く、蛇紋岩、砂岩がこれに次ぐ。たたき石、すり石は全て安山岩製である。石皿・台石には砂岩製のものと安山岩製のものが存在し、砂岩製のものが76.9%である。

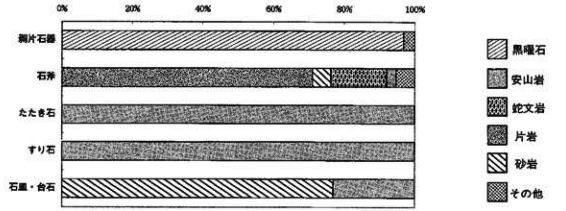
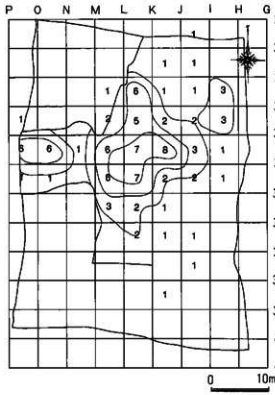
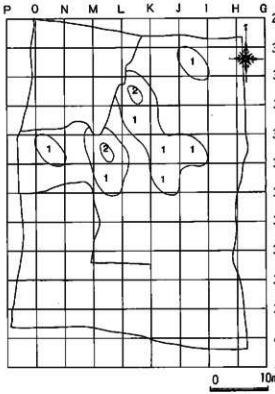


図49　器種別使用石材構成比率グラフ

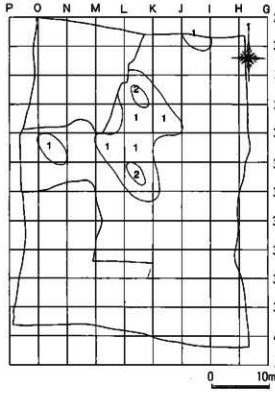
石鏃



石槍・ナイフ



石錐



つまみ付ナイフ

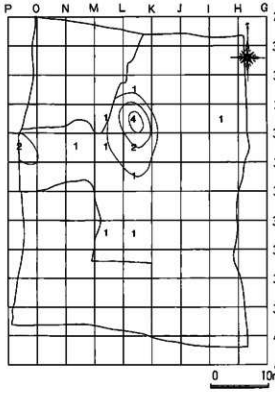
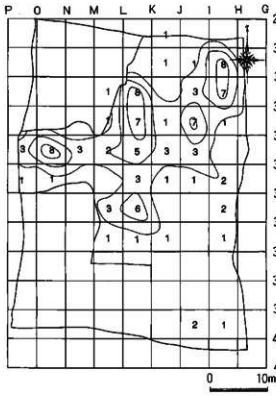
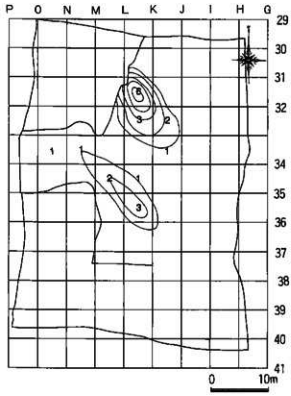


図50　石器出土分布図(1)

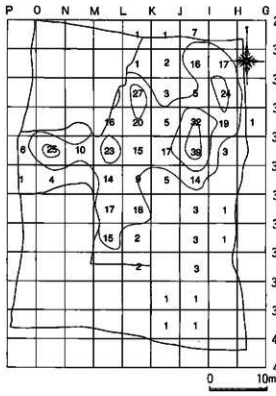
スクレイパー



石器素材



Rフレイク



Uフレイク

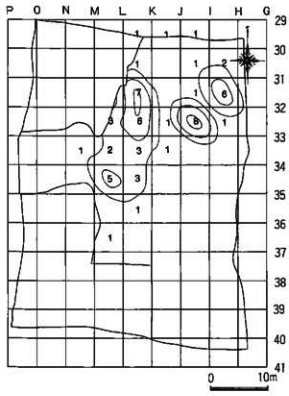
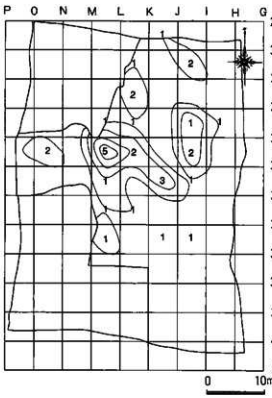
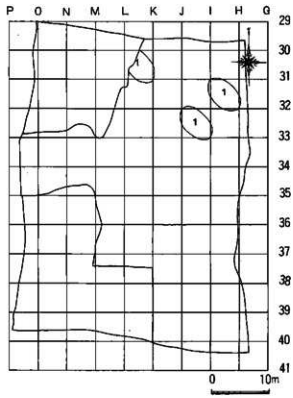


図51　石器出土分布図(2)

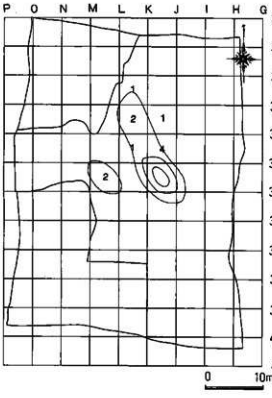
石斧



たたき石



すり石



石皿・台石

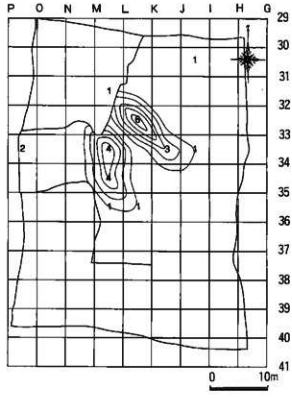
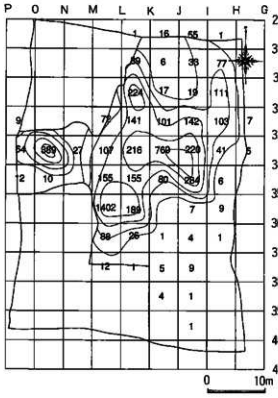
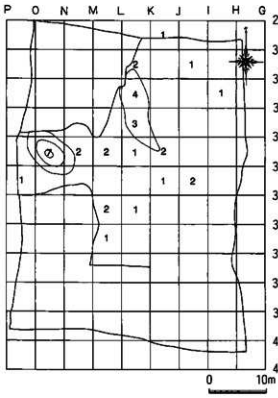


図52　石器出土分布図(3)

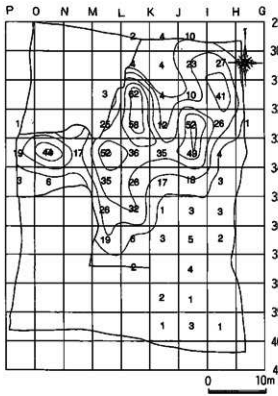
フレイクチップ



フレイク



定形的な石器の合計



定形的な石器以外の合計

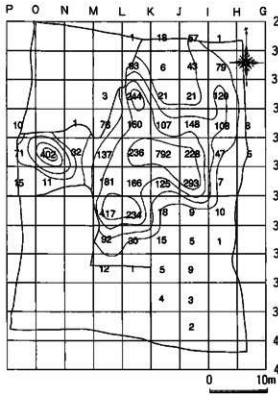


図53 石器出土分布図(4)

石鏃（1～38）

包含層から101点出土し、38点を図示した。分布の中心は流路1の33ライン～34ラインである。

29～31以外は全て黒曜石である。1～31は有茎石鏃で、1～20は長さに比べて幅が広く厚みがあるもので、同じ有茎石鏃でも21～28とは異なる印象を受ける。21～28は長さに比べて幅が狭く、厚みのないもので、側縁が凹型に湾曲するものが多い。また、後者に施される調整は対向する剥離が葉脈状になるもので、前者のそれに比べて丁寧である。29、30は著しく風化した頁岩製である。風化した頁岩はフレイクが2点出土している。頁岩製の石器は他にも存在するが、風化した石材を使用したものはこの他にはない。31はめのう製の比較的大型の石鏃である。32、33は茎部と刃部の境界が明瞭ではないものである。32は若干茎部を作り出しているようであるが、33には茎部と刃部を作り分けている意識が感じられない。34、35は無茎石鏃である。ともに茎部は凹型に湾曲し、幅も同じであるが長さが大きく異なる。36、37は大型で茎部と刃部の境界が不明瞭なものである。38は大型で小さな茎部を作り出している。裏側は主剥離面が残る。重さが12.6ｇと重く、石槍に分類するべきかもしれないが、長さが5㎝以下であるため石鏃に分類した。

石槍・ナイフ（39～43）

包含層から12点出土し、5点を図示した。分布の中心は流路1である。

図示したものは全て黒曜石製である。39～42は石槍である。41は茎部を欠損している。42はナイフの可能性もあるが、左右対称であること、尖った先端部を持つことから石槍とした。43は下半部を欠損しており、全体の形状は不明であるが、薄手であること、左右対称ではないことからナイフであると考えている。

石錐（44～48）

包含層から10点出土し、5点を図示した。分布の中心は流路1である。

図示したものは全て黒曜石製である。44、45は比較的長い刃部につまみがつくもの。46はつまみ部分が存在しない。47は短い刃部に大きなつまみがつくもの。48はつまみと刃部の境界が明瞭ではないもので、44～47と比較して大きい。石槍やスクレイパーに分類することも可能であるが、尖った先端を作り出していること、茎部に着柄を可能にする調整が施されていないことから石錐に分類した。

つまみ付きナイフ（49～60）

包含層から16点出土し、12点を図示した。分布の中心は流路1のK―32区である。

51、52、60以外は全て黒曜石製である。調整は全て片面調整で分類の項で述べたとおり、ナイフではなくスクレイパーの一種である。50、59は先端が尖るものである。51は凝灰岩製、52は頁岩製である。54、57、59はつまみ部分が不明瞭で、スクレイパーに分類するべきかもしれない。

スクレイパー（61～87）

包含層から101点出土し、27点を図示した。分布の中心はO―33～H―31区にかけての幅約10ｍの範囲で、段丘をまたいで分布する。

73、78、82、85以外は全て黒曜石製である。61～64は直線的な両側縁に刃部を持つものである。65は自然面を残す。66は対向する凹部と凸部に調整が施される。どちらかは刃潰しの可能性がある。73は頁岩製である。横長剥片の腹面に刃部を作り出している。74は右側縁に調整が施され、左側縁には

微細な剥離がみられる。左側縁にみられる微細な剥離は、剥離の方向が全て同じであるため、意図的なものと考える。75は縦長剥片にほとんど調整を施していない。側縁にみられる微細な剥離の多くは意図的なものではなく、腹面の右側縁にある一群の剥離のみが意図的に行われた調整によるものと考えている。76は右側縁に調整が施されるが、左側縁に使用痕とみられる微細な剥離が集中し、左側縁が刃部として使用された可能性が高い。78は頁岩製で、82はチャート製である。84は上部が欠損しており、側縁に自然面を残す。86は頁岩製である。86、87は棒状原石に刃部を作り出したものである。87は尖った先端部を作り出しているが、茎部を作り出していないことから石鏃とせず、スクレイパーに分類した。

石器素材（88～106）

包含層から22点出土し、19点を図示した。分布の中心は、石器素材埋納遺構を検出したK—32区の北側のK—31区と、南側のK—34区である。

流路1の底面付近で検出した埋納遺構から出土した石器素材と、同様のものと思われる石器を抜き出して図示した。図示したものは全て黒曜石製で、埋納遺構出土のものと比べて形状や大きさにばらつきがある。また、自然面を残すものが多い点も埋納遺構出土のものと異なっている。105は石核の可能性もある。

石斧（107～124）

包含層から32点出土し、18点を図示した。分布の中心は流路1である。

122、123以外は磨製石斧である。石材は107、111、112が角閃石片岩、113、115、121、122、124が緑色片岩、108、120が砂岩、109、114、116、118、119が蛇紋岩、110、117が粘板岩、123がひん岩である。礫の自然な形を利用したものが多く、擦り切り技法など原材の形を大きく変える整形技法を用いているものは少ない。108は片刃で刃先にいくほど幅が狭くなる。113は刃部に刃と直行する方向に幅約1㎜の傷が十数カ所つけられている。傷は打撃によるものではなく削られてできたもので、鋭く堅い物体に当てて前後に動かした結果できたものと考えている。この傷が使用痕なのか、一種の調整であるのかは不明だが、大きく深い傷が中央に集中し、周辺にいくとまばらで浅い傷が増える。これを使い勝手のよい中央部を頻繁に利用し、使いにくい周辺部は敬遠されたためと解釈すれば、この傷は何らかの使用に伴ってできた可能性が高い。116は先端部が破損している。117は両面に十字に直交する細長い傷が付いている。この傷の軸は石斧の主軸から若干ずれており、どちらの傷も外面を一周するように付けられている。偶然に付いた傷とは考えがたく、人為的につけられたものであることは間違いない。刃部に施された磨き調整によりこの傷が消失していることから、少なくとも最終的な磨き調整を施す前にこの傷は付けられている。傷をつけた目的は文様効果をねらったもの、製作時の目印などの可能性を想定しているが、不明である。118は厚みのある両刃の石斧で、すり切り技法により作られたものである。側面の一方に擦り切った痕と折り取った痕が残っている。120は先端部分が欠損している。122は薄い原材を打ち欠いて形状を整えたもので磨き調整は施されていない。123は凝灰岩製で、基部を欠損している。調整は打ち欠きによるもので磨き調整は施されていない。全体的に厚みあるが、刃部は薄く鋭角的に作られている。124は片方の側縁に打ち欠きによる調整を行い、先端部と側縁にわずかに磨き調整を施す。

すり石（125～131）

包含層から11点出土し、7点を図示した。分布の中心はJ—34区である。

図示したものは全て安山岩製である。大きさは握り拳より一回り程度大きく、扁平な円礫が多い。扁平な面の両面にすり面を持つものが多い。摩耗の著しいものは存在せず、すり面がかろうじて確認できるものが多い。131は他の製品の2倍近くの重さをもち、特に大きい。片手でもって自由に操れる限界に近い重さである。

石皿・台石（132～135）

包含層から26点出土し、4点を図示した。分布の中心は図上ではK—32、L—33区の二つに分かれるが、出土数が少ないこともあり、一つのピークとして捉えた方がよいかもしれない。132が安山岩製でそれ以外は砂岩製である。133は中央部にタール状の黒色の物質が付着している。134は裏・表両面にすり面があり、裏面には線状の細長い傷が多数みられる。裏面は砥石として用いられたものと考えている。135は中央に縦に長いすり痕があり、磨かれたように表面が滑らかなため、砥石として使用された可能性がある。裏面には摩耗したあとがあり、使用時に地面と接していた部分が摩耗したものと考えている。

石製品（136～139）

包含層から7点出土し、4点を図示した。

136～138は安山岩製のオロシガネ状石製品である。136は表面は平坦であるが、裏面は凸型に湾曲している。また、一方の端に孔が穿たれている。137は136よりも一回り程度大きく、裏表面ともに平坦である。穿孔はされていない。138は⅔以上欠損している。139は用途不明の石製品で、平たい礫を両側から打ち欠き、きのこ形の形状を作り出している。片岩製である。（石井淳平）

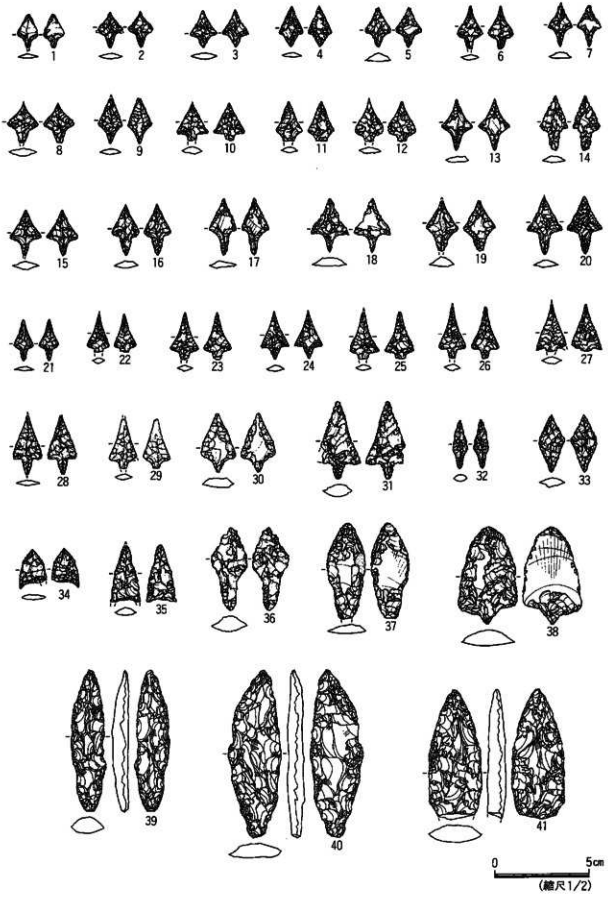


図54 包含層出土石器(1)

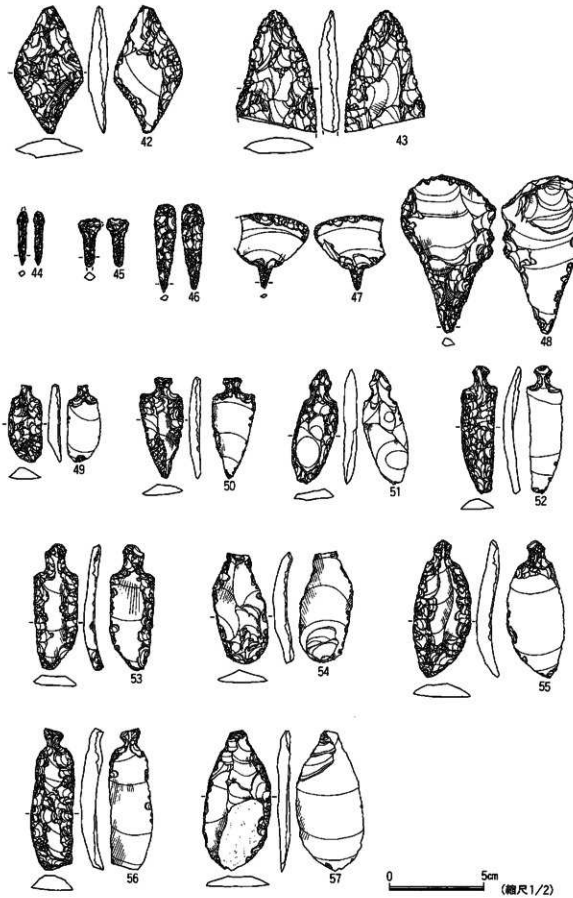


図55　包含層出土石器(2)

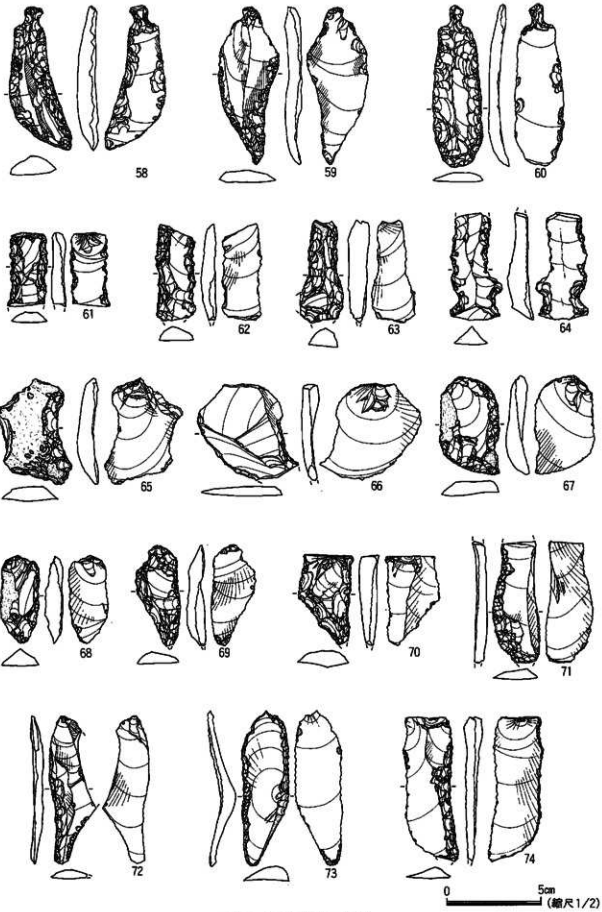


図56 包含層出土石器(3)

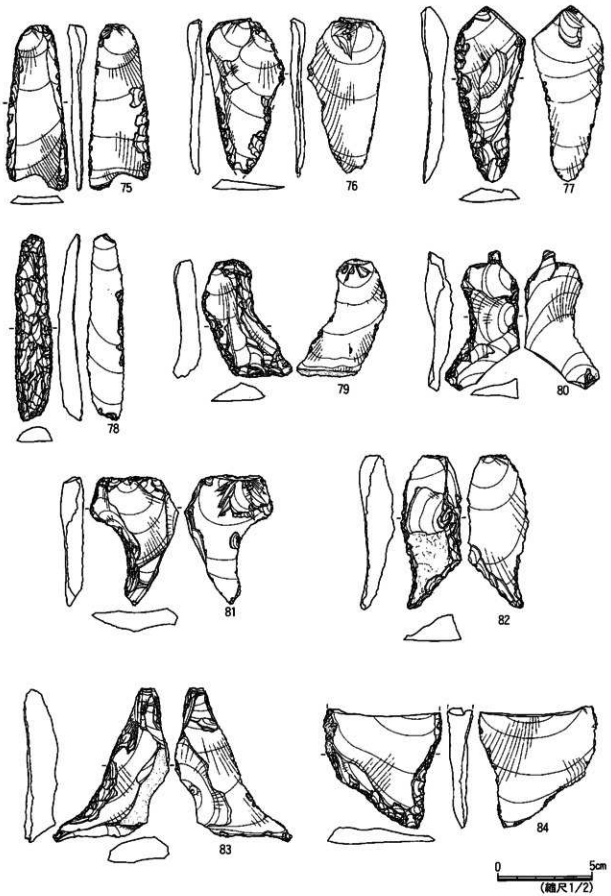


図57　包含層出土石器(4)

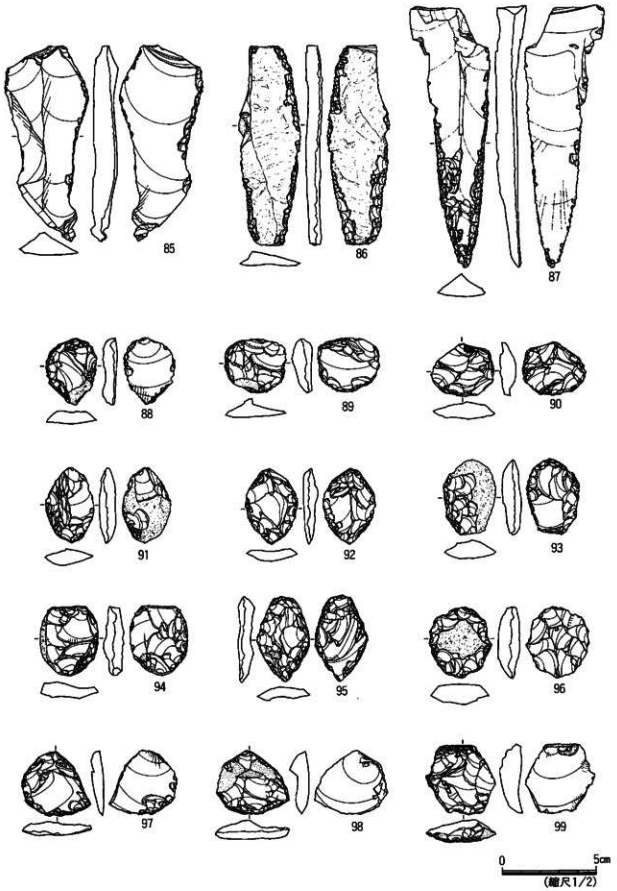


図58　包含層出土石器(5)

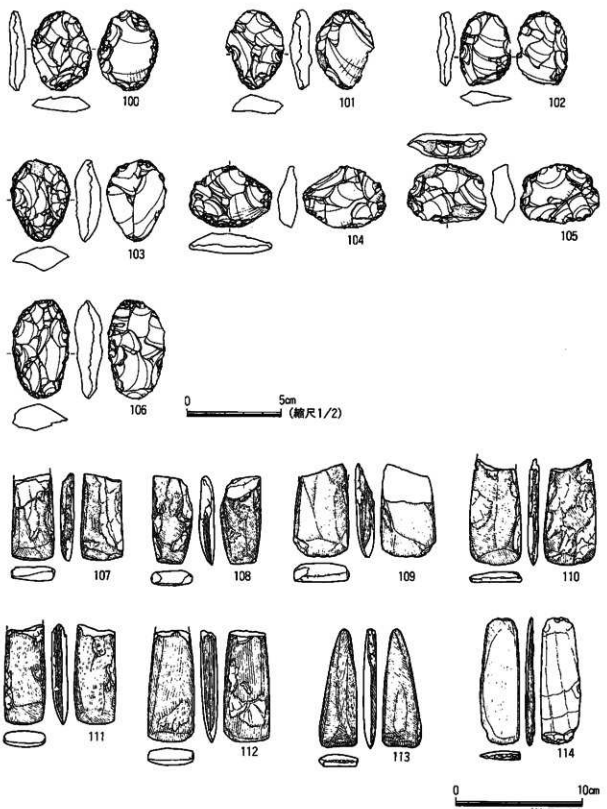


図59　包含層出土石器(6)

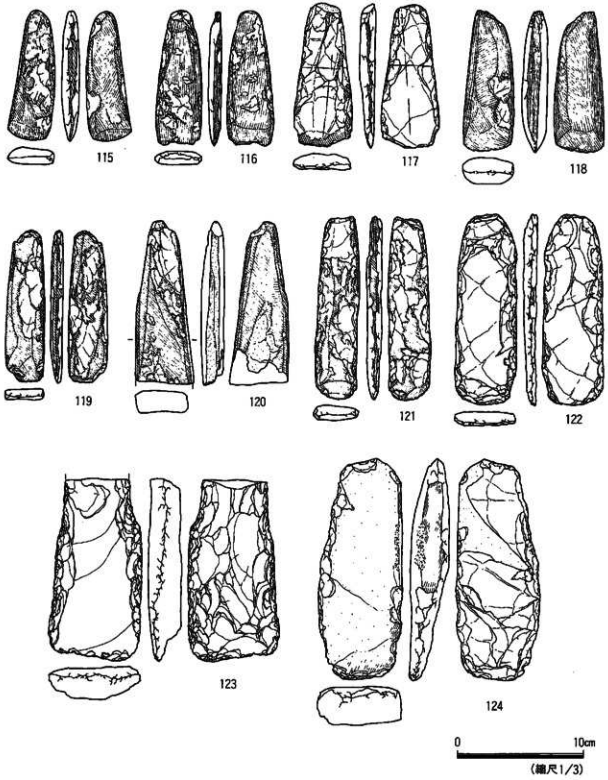


図60　包含層出土石器(7)

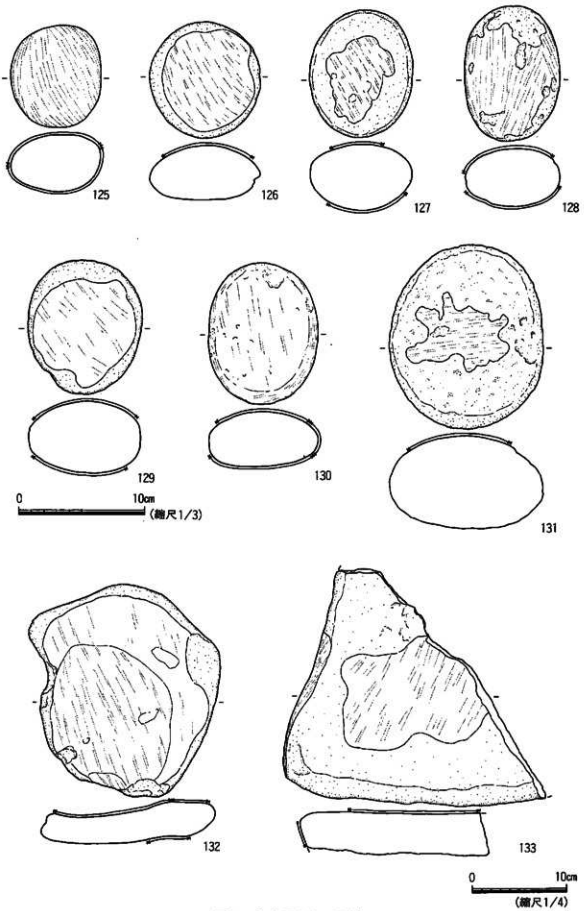
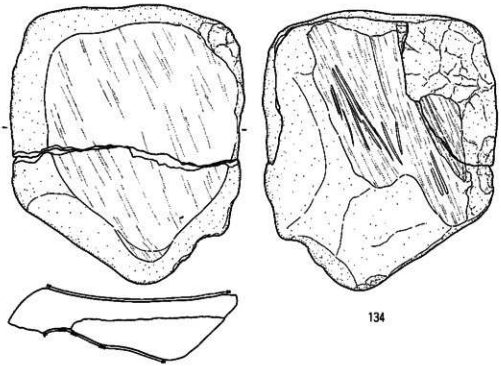


図61　包含層出土石器(8)



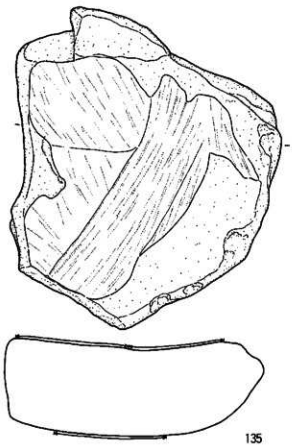


図62　包含層出土石器(9)

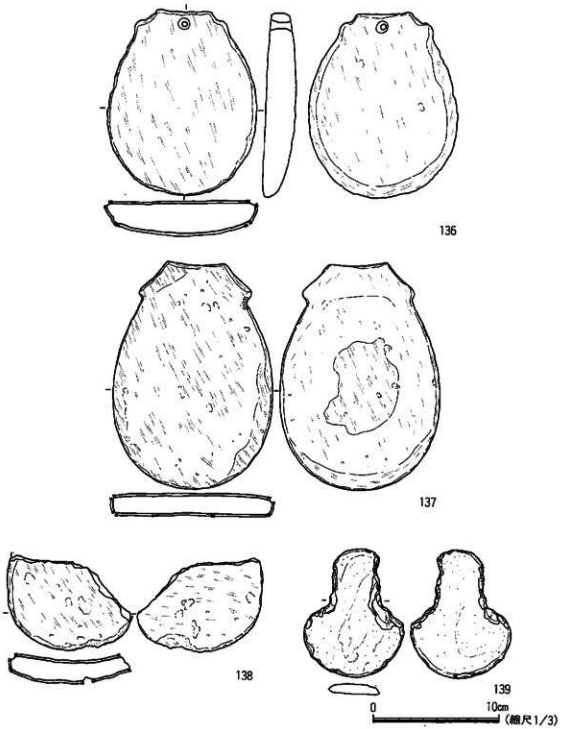


図63　包含層出土石器(10)

表11　包含層出土掲載石器一覧表(1)

図版	番号	整理No	グリッド	層位	分類	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
54	1	20	I－33	II層	石錐	黒曜石	1.30	1.10	0.28	0.20	
54	2	27	L－33	II層	石錐	黒曜石	1.25	0.39	0.35	0.40	
54	3	25	J－32	II層	石錐	黒曜石	1.50	1.50	0.40	0.50	
54	4	3	H－32	II層	石錐	黒曜石	1.60	1.30	0.29	0.40	
54	5	24	J－33	II層	石錐	黒曜石	1.50	1.35	0.50	0.70	
54	6	41	J－34	III層	石錐	黒曜石	1.77	1.45	0.31	0.50	
54	7	15	J－33	II層	石錐	黒曜石	1.46	1.30	0.35	0.50	
54	8	43	O－33	II層	石錐	黒曜石	1.45	1.71	0.40	0.60	
54	9	16	J－33	II層	石錐	黒曜石	1.80	1.30	0.30	0.60	
54	10	39	K－36	III層	石錐	黒曜石	1.70	1.72	0.40	0.70	
54	11	47	H－32	II層	石錐	黒曜石	1.89	1.46	0.32	0.60	
54	12	44	L－35	II層	石錐	黒曜石	1.82	1.54	0.35	0.60	
54	13	9	L－34	流路II層	石錐	黒曜石	1.85	1.66	0.35	0.80	
54	14	10	J－35	II層	石錐	黒曜石	1.90	1.50	0.40	0.90	
54	15	12	K－31	流路II層	石錐	黒曜石	1.75	1.70	0.46	0.80	
54	16	18	J－33	III層	石錐	黒曜石	1.70	1.45	0.38	0.70	
54	17	17	O－33	IV層	石錐	黒曜石	1.97	1.50	0.40	0.80	
54	18	8	L－34	II層	石錐	黒曜石	1.95	1.90	0.50	1.20	
54	19	7	K－34	流路II層	石錐	黒曜石	1.80	1.70	0.54	1.20	
54	20	13	K－31	流路II層	石錐	黒曜石	1.90	1.90	0.40	0.80	
54	21	22	J－33	II層	石錐	黒曜石	1.60	1.10	0.25	0.20	
54	22	40	N－33	II層	石錐	黒曜石	1.80	1.20	0.31	0.30	
54	23	45	K－34	II層	石錐	黒曜石	2.12	1.52	0.31	0.60	
54	24	21	I－31	IV層	石錐	黒曜石	2.00	1.50	0.35	0.70	
54	25	46	K－34	II層	石錐	黒曜石	2.27	1.50	0.36	0.70	
54	26	49	K－31	流路II層	石錐	黒曜石	2.31	1.50	0.35	0.70	
54	27	31	J－30	III層	石錐	黒曜石	1.40	1.19	0.37	0.80	
54	28	11	K－32	流路II層	石錐	黒曜石	2.35	1.55	0.30	0.70	
54	29	51	L－33	II層	石錐	頁岩（風化）	2.40	1.60	0.30	0.47	
54	30	52	K－34	II層	石錐	頁岩（風化）	2.40	1.90	0.60	1.80	
54	31	50	L－31	流路II層	石錐	めのう	3.30	2.40	0.80	3.60	
54	32	1	L－35	流路II層	石錐	黒曜石	1.86	0.80	0.39	0.50	
54	33	6	K－33	II層	石錐	黒曜石	3.00	1.39	0.50	1.30	
54	34	26	I－36	II層	石錐	黒曜石	1.80	1.50	0.28	0.60	
54	35	4	H－31	II層	石錐	黒曜石	2.90	1.70	0.45	1.70	
54	36	30	L－33	II層	石錐	黒曜石	2.62	1.95	0.83	3.80	
54	37	19	I－29	II層	石錐	黒曜石	3.60	2.05	0.50	5.20	
54	38	14	J－36	III層	石錐	黒曜石	4.60	3.15	1.00	12.60	
54	39	5	K－32	II層	石槍・ナイフ	黒曜石	7.50	1.90	0.90	11.30	
54	40	1	K－31	流路II層	石槍・ナイフ	黒曜石	6.90	2.80	0.90	20.10	
54	41	2	L－34	流路II層	石槍・ナイフ	黒曜石	6.90	2.80	1.00	18.30	
55	42	3	J－34	II層	石槍・ナイフ	黒曜石	6.70	3.70	1.00	16.70	
55	43	5	J－33	III層	石槍・ナイフ	黒曜石	(6.45)	4.20	1.05	23.70	
55	44	4	J－32	II層	石錐	黒曜石	2.80	0.50	0.30	0.40	
55	45	5	K－31	流路II層	石錐	黒曜石	(2.55)	(1.20)	0.55	1.10	
55	46	3	K－33	流路II層	石錐	黒曜石	4.50	1.20	0.80	3.40	
55	47	2	K－34	流路II層	石錐	黒曜石	4.00	3.80	0.40	3.80	
55	48	1	I－29	III層	石錐	黒曜石	8.30	5.00	1.10	37.70	
55	49	12	K－33	III層	つまみ付きナイフ	黒曜石	3.50	1.80	0.60	3.90	
55	50	8	L－32	II層	つまみ付きナイフ	黒曜石	4.50	2.30	0.60	5.60	
55	51	7	K－31	II層	つまみ付きナイフ	(緑色) 凝灰岩	4.55	2.40	0.70	7.13	
55	52	1	K－32	流路II層	つまみ付きナイフ	頁岩	5.80	1.90	0.60	8.20	
55	53	5	M－33	II層	つまみ付きナイフ	黒曜石	5.20	2.30	0.50	10.50	
55	54	10	K－32	III層	つまみ付きナイフ	黒曜石	5.30	2.70	0.70	10.30	
55	55	4	K－36	III層	つまみ付きナイフ	黒曜石	6.20	3.00	0.80	17.40	
55	56	6	O－33	IV層	つまみ付きナイフ	黒曜石	6.60	2.30	0.80	14.60	
55	57	11	K－32	流路II層	つまみ付きナイフ	黒曜石	6.60	3.40	0.60	16.70	
56	58	2	K－32	II層	つまみ付きナイフ	黒曜石	5.70	2.50	1.10	18.30	

単位＝cm　g

表11　包含層出土掲載石器一覧表(2)

図版	番号	整理No	グリッド	層位	分類	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
56	59	9	O－33	Ⅳ層	つまみ付きナイフ	黒曜石	7.80	3.20	0.80	15.80	
56	60	3	L－33	Ⅱ層	つまみ付きナイフ	頁岩	7.50	2.60	0.60	16.20	
56	61	34	J－29	Ⅲ層	スクレイパー	黒曜石	(3.90)	2.10	0.80	6.90	
56	62	35	K－35	Ⅲ層	スクレイパー	黒曜石	(5.10)	2.10	0.80	7.40	
56	63	57	H－31	Ⅲ層	スクレイパー	黒曜石	(5.40)	(2.30)	1.15	10.20	
56	64	48	K－31	Ⅱ層	スクレイパー	黒曜石	(5.70)	2.82	1.35	14.20	
56	65	29	H－30	Ⅱ層	スクレイパー	黒曜石	5.70	4.20	1.10	19.50	
56	66	56	I－30	Ⅲ層	スクレイパー	黒曜石	5.15	5.35	0.85	17.80	
56	67	25	N－33	Ⅱ層	スクレイパー	黒曜石	5.25	3.20	1.20	14.90	
56	68	58	J－33	Ⅱ層	スクレイパー	黒曜石	4.70	2.10	1.02	7.60	
56	69	59	I－31	Ⅱ層	スクレイパー	黒曜石	5.30	2.40	1.00	8.40	
56	70	33	H－30	Ⅱ層	スクレイパー	黒曜石	4.80	2.90	1.10	12.80	
56	71	46	K－33	Ⅱ層	スクレイパー	黒曜石	(6.45)	2.50	0.75	9.30	
56	72	26	N－33		スクレイパー	黒曜石	7.90	2.50	0.70	7.80	
56	73	28	K－34	Ⅱ層	スクレイパー	頁岩	8.60	2.50	1.45	13.20	
56	74	40	K－35	Ⅱ層	スクレイパー	黒曜石	5.00	4.20	0.90	11.50	
57	75	36	K－32	流路Ⅱ層	スクレイパー	黒曜石	8.80	3.30	1.00	15.90	
57	76	38	J－36	Ⅲ層	スクレイパー	黒曜石	8.25	4.15	0.80	17.20	
57	77	30	J－30	Ⅲ層	スクレイパー	黒曜石	9.30	3.80	1.45	28.90	
57	78	41	H－32	Ⅱ層	スクレイパー	黒曜石	4.05	2.15	0.80	5.60	
57	79	55	K－35	Ⅲ層	スクレイパー	黒曜石	6.25	4.70	1.53	20.20	
57	80	32	I－32	Ⅱ層	スクレイパー	黒曜石	7.35	3.90	1.50	23.00	
57	81	24	H－30	Ⅱ層	スクレイパー	黒曜石	6.90	4.70	1.20	27.80	
57	82	42	N－33	Ⅱ層	スクレイパー	黒曜石	4.40	3.50	0.95	9.80	
57	83	27	H－30	Ⅱ層	スクレイパー	黒曜石	8.20	6.20	1.80	43.70	
57	84	23	K－32	Ⅲ層	スクレイパー	黒曜石	(6.40)	6.30	1.30	33.20	
58	85	39	K－31	流路Ⅱ層	スクレイパー	頁岩	10.40	4.40	1.50	40.60	
58	86	37	K－33	流路Ⅱ層	スクレイパー	黒曜石	10.60	3.30	0.95	25.90	
58	87	31	K－31	Ⅱ層	スクレイパー	黒曜石	13.80	4.30	1.80	46.80	
58	88	13	K－31	Ⅱ層	石器素材	黒曜石	3.50	2.70	0.80	7.00	片面調整
58	89	17	K－32	Ⅲ層	石器素材	黒曜石	3.30	2.90	1.05	7.00	片面調整
58	90	18	J－33	Ⅱ層	石器素材	黒曜石	3.40	2.80	1.00	7.00	両面調整
58	91	2	K－31	流路Ⅱ層	石器素材	黒曜石	5.20	3.00	1.50	19.50	両面調整
58	92	6	J－32	Ⅱ層	石器素材	黒曜石	4.00	2.70	0.80	6.40	両面調整
58	93	9	K－31	流路Ⅱ層	石器素材	黒曜石	4.00	2.80	1.00	10.00	両面調整
58	94	3	K－35	Ⅱ層	石器素材	黒曜石	3.70	3.10	1.10	10.80	両面調整
58	95	4	K－34	Ⅱ層	石器素材	黒曜石	4.50	2.80	0.90	8.10	両面調整
58	96	10	J－32		石器素材	黒曜石	3.80	3.30	1.20	12.70	両面調整
58	97	14	L－34		石器素材	黒曜石	3.60	3.10	0.70	6.80	縁辺のみ調整
58	98	22	N－33		石器素材	黒曜石	3.40	3.80	1.00	10.10	片面調整
58	99	21	M－33	Ⅱ層	石器素材	黒曜石	3.60	3.70	1.15	13.10	片面調整
59	100	5	L－34	流路Ⅱ層	石器素材	黒曜石	4.20	3.20	0.90	10.30	両面調整
59	101	7	K－35	Ⅱ層	石器素材	黒曜石	4.20	3.10	1.15	10.70	両面調整
59	102	15	K－31	流路Ⅱ層	石器素材	黒曜石	3.90	2.70	1.00	7.70	両面調整
59	103	11	K－31	流路Ⅱ層	石器素材	黒曜石	4.30	3.10	1.40	13.90	片面調整
59	104	8	K－32	Ⅲ層	石器素材	黒曜石	4.40	3.30	1.10	12.70	両面調整
59	105	20	K－35	Ⅲ層	石器素材	黒曜石	4.10	3.20	1.30	15.90	両面調整
59	106	1	K－31	流路Ⅱ層	石器素材	黒曜石	4.00	2.60	0.90	7.40	両面調整
59	107	14	I－30	Ⅲ層	石斧	(角閃石) 片岩	(6.90)	3.30	1.05	30.00	
59	108	17	L－32	流路Ⅱ層	石斧	砂岩	(7.00)	3.15	1.20	44.40	
59	109	18	L－33	流路Ⅱ層	石斧	蛇文岩	(7.30)	4.30	1.50	72.50	
59	110	16	K－35	流路Ⅱ層	石斧	粘板岩	(8.30)	4.05	0.80	43.90	
59	111	2	J－29	流路Ⅱ層	石斧	(角閃石) 片岩	7.90	3.20	1.30	58.00	
59	112	9	J－34	Ⅱ層	石斧	(角閃石) 片岩	8.80	3.60	1.35	84.60	
59	113	4	K－32	流路Ⅱ層	石斧	(緑色) 片岩	10.30	3.70	1.40	42.00	
59	114	15	K－33	流路Ⅱ層	石斧	蛇文岩	10.05	3.15	0.60	27.30	
60	115	5	K－33	流路Ⅱ層	石斧	(緑色) 片岩	10.30	3.70	1.40	80.00	
60	116	6	J－34	Ⅱ層	石斧	蛇文岩	10.50	3.70	1.00	70.00	

単位＝cm　g

表11　包含層出土掲載石器一覧表(3)

図版	番号	整理No	グリッド	層　位	分　類	材　質	長さ	幅	厚さ	重さ	備　考
60	117	8	I－33	Ⅱ層	石斧	粘板岩	11.30	4.50	1.20	78.20	
60	118	1	K－30	流路Ⅱ層	石斧	蛇文岩	11.10	4.00	2.10	145.00	
60	119	13	L－35	流路Ⅱ層	石斧	蛇文岩	12.00	3.00	0.90	50.00	
60	120	11		表採	石斧	砂岩	(12.90)	4.60	1.80	170.00	
60	121	12	K－31	Ⅱ層	石斧	(緑色) 片岩	14.35	3.45	1.15	85.00	
60	122	3	H－32	Ⅱ層	石斧	(緑色) 片岩	15.00	14.70	1.10	130.00	
60	123	10	I－32	Ⅱ層	石斧	ひん岩	(14.30)	7.15	2.70	350.00	
60	124	7	I－36	Ⅱ層	石斧	(緑色) 片岩	17.50	6.70	3.00	520.00	
61	125	6	L－34	Ⅱ層	すり石	安山岩	8.10	7.20	4.50	490.00	
61	126	3	J－34	Ⅱ層	すり石	安山岩	9.20	8.80	4.40	450.00	
61	127	5	L－34	Ⅱ層	すり石	安山岩	10.00	8.10	5.30	600.00	
61	128	7	J－34	Ⅱ層	すり石	安山岩	10.60	7.50	4.60	490.00	
61	129	2	K－33	Ⅱ層	すり石	安山岩	10.50	8.90	5.70	740.00	
61	130	1	J－34	Ⅱ層	すり石	安山岩	11.20	8.60	4.40	670.00	
61	131	4	J－34	Ⅱ層	すり石	安山岩	14.50	12.20	7.30	1.55k	
61	132	2	L－35	流路Ⅱ層	石皿・台石	安山岩	22.50	20.30	4.50	2.86k	
61	133	4	L－34	Ⅱ層	石皿・台石	砂岩	(27.30)	(24.50)	4.30	3.79k	
62	134	1	K－32	Ⅱ層	石皿・台石	砂岩	29.50	24.90	7.50	6.40k	
62	135	3	K－32	流路Ⅱ層	石皿・台石	砂岩	29.40	24.80	7.50	1.28k	
63	136	1	J－34	Ⅲ層	石製品	安山岩	14.80	12.70	2.50	305.00	
63	137	2	K－32	流路Ⅱ層	石製品	安山岩	17.90	12.60	1.50	345.00	
63	138	3	L－32	Ⅱ層	石製品	安山岩			1.90	65.00	
63	139	4	I－32	Ⅱ層	石製品	片岩	10.10	7.90	0.80	90.00	

単位 m㎝　g

表12　包含層遺物グリッド別集計表

グリッド	[illegible]	Ⅳ群	Ⅴ群	未分類	石鏃	石槍・ナイフ	石匙	つまみ付きナイフ	スクレイパー	石器素材	Rフレイク	Uフレイク	石斧	たたき石	すり石	石皿・台石	石製品	フレイク(流紋岩以外)	フレイク・チップ(流紋岩)	石核	原石	[illegible]	[illegible]	礫	土器合計	剥片石器合計	礫石器合計	フレイク類・礫・その他合計	石器合計
G−32			28	34							1								7	1					82	1	0	8	9
G−33				2															5						2	0	0	5	5
H−29			1	8															1						5	0	0	1	1
H−30		1	6	23					8		17	2							77	2					30	27	0	79	106
H−31		4	34	304	3				7		24	6		1				1	111	1			5	2	342	40	1	120	161
H−32		3	41	94	3			1	1		19	1	1						103	3			2		138	25	1	108	134
H−33		8	30	59	1						3								41				2	4	88	4	0	47	51
H−34		7	32	33	1				2										6					1	68	3	0	7	10
H−35		2		7					2		1								9				1		8	3	0	10	13
H−36				2					1		1								1						7	2	0	1	3
H−37		1		3																					4	0	0	6	6
H−38				5																					5	0	0	0	0
H−39									1																0	1	0	0	1
I−29		17	3	78	1		1				7	1							55			1	1		98	10	0	57	67
I−30		268	15	104	1	1			1		16	1	2			1		1	33			2	5	2	387	20	3	43	66
I−31		30		65	1				3		5	1							16				1	1	98	10	0	21	31
I−32		83	31	327	2				7		32	8	1	1			1		142	1			4	1	441	49	3	148	200
I−33		121	38	146	3	1			3		39		2			1			220	1			3	4	397	46	3	228	277
I−34		280	5	99	2				1		14		1					2	284				3	4	313	17	1	293	311
I−35		26	2	18							3								7				2		46	3	0	9	12
I−36		16	5	36	1						3		1						4				1		57	4	1	5	10
I−37		7	15	405	1						3								9						427	4	0	9	13
I−38		32		27							1								1				1	1	59	1	0	3	4
I−39		2		7					2		1								1				1		9	3	0	2	5
I−40		1		5																					6	0	0	0	0
J−29		128		21					1		1	1	1					1	18				1		149	3	1	18	22
J−30		47		10	1				1		2								6						57	4	0	6	10
J−31		43		67	1						3								17				4		110	4	0	21	25
J−32		476		142	2		1		1	5	5	1							101	4			3		560	12	0	107	119
J−33		141	2	344	8	1			3	1	17	1			1	3		2	780	1	1		6	22	487	31	4	702	737
J−34		84		170	2	1			1		6		3		4		1	1	80				1	43	234	9	8	125	142
J−35		4		3	1																		1	17	7	1	0	18	19
J−36		7		13	1				1				1						1				1	13	20	2	1	15	18
J−37		14		1															5						15	0	0	5	5
J−38		16		7	1						1								4						23	2	0	4	6
J−39		2	1	5							1														8	1	0	0	1
K−29		123		127							1	1							1						259	2	0	1	3
K−30		117		217							1	1	1	1				2	89					2	334	2	2	93	97
K−31		675		1651	6	2	2	1	8	6	27	7	2		1			4	224	1			10	5	1728	59	3	244	306
K−32		946	5	1046	5	1	1	4	7	3	20	6	1		2	6	1	3	141	3			5	8	1609	47	30	180	217
K−33		305	2	445	7		1	2	5		15	3	2		1			1	216	7	1		8	3	753	33	3	236	272
K−34		384	4	488	7		2	1	3	1	9	3							156				5	6	866	26	0	166	192
K−35		124	86	305	2				6	3	18	1	1			1		1	180		1		31	12	565	30	2	234	266
K−36		88	13	103	2			1	1		2								36				3	1	184	6	0	30	36
K−37		1		19							2								1						30	2	0	1	3
L−31		48		60	1				1							1							3		116	2	1	3	6
L−32		427		781	2			1	1		16	3	1				1		72	1	1			2	1208	23	2	76	101
L−33		533	8	887	6	2	1	1	2		33	2	5			4	1	2	107	4	1		3	9	1426	37	16	120	173
L−34		542	1	830	8	1				2	14	5	1		2	4			155				13	13	1373	28	7	181	216
L−35		368	1	570	3				3		17		1			1	1	2	1402				11	2	895	23	3	1417	1443
L−36		287		412				1	1		16	1	1					1	88			1	2		879	18	1	92	111
L−37		45		23															12						63	0	0	12	12
M−32				2																			1		2	0	0	1	1
M−33	8	43		177	1			1	3	1	10	1						2	27	1			1	1	228	17	0	32	49
M−36		1																							1	0	0	0	0
M−37		1																							1	0	0	0	0
N−33		130	1	814	6	1	1		8	1	25		2					7	389					6	645	42	2	402	446
N−34		14		17	1				1		4								10					1	31	6	0	11	17
O−32		23		49	1														9				1		72	1	0	10	11
O−33	11	110		224	6			2	3		6					2			64				2	5	464	17	2	71	90
O−34	1	30		69	1				1		1							1	12	2					100	3	0	15	18
不明		51		17	1	1				2	1		1			2	1		7				1		88	3	4	8	17
合計	30	6873	398	11256	109	12	10	16	101	22	452	57	32	3	11	25	7	34	5522	33	5	4	148	181	18647	771	79	5837	6767

Ⅳ　自然科学的手法による分析結果

放射性炭素（C_{14}）年代測定結果

資　料　名	資料の種類	出土層位・位置	C14年代（yBP）	補正年代（yBP）
ICU—1	炭	Ⅳ層	4250±50	4260±50
ICU—2	炭	流路　1上面	3410±40	3420±40
ICU—3	炭	流路　1上面	3480±40	3440±40
ICU—4	堆積物	流路1　上面	3840±50	3840±50
ICU—5	炭	沢	40±40	60±40

ICU—1は第3段丘面のⅣ層中位から採取した。4250年BPという縄文時代中期後葉に位置づけられる測定年代がでている。付近のⅣ層中からは縄文時代中期前半のⅢ群a類の土器が出土しており、測定年代はこれらの土器の年代よりも新しい。Ⅳ層は黄褐色の砂層と黒色層が何度も交互に堆積した層を総称しており、層厚も採取地点では2m近くあることから、層内でも年代差があるものと考える。試料の採取層とⅢ群a類土器の出土層位の前後関係を厳密には把握していないため、土器の年代と測定年代との間に齟齬が生じたものと考える。測定年代を正しいものとすれば、縄文時代中期後葉の段階には第3段丘面は安定した黒色層は形成されておらず、たびたび水をかぶる不安定な状態であったと推測する。

ICU—2～4は流路1内で採取したもので、ICU—2は流路1上層、ICU—3は調査区北側の流路1の底面、ICU—4はグリッドは異なるが、ICU—2の採取地点とほぼ同一地点で流路1の底面から採取した。ICU—2・3は3410年BP、3480年BPという測定年代がでており、遺跡の主体である縄文時代後期中葉の年代とほぼ一致する。一方、ICU—4は3840年BPで縄文時代後期前葉の年代がでている。同じ流路1の底面でもICU—3とICU—4では300年近い年代の開きがある。測定年代を正しいものとみれば、流路1の埋没が始まるのは縄文時代後期前葉以降で、後期中葉にはほぼ埋没したものと考えられる。ICU—2とICU—3は、層位と地点が異なるがほぼ同じ年代がでている。素直に解釈すれば、埋没は場所によって異なる速さで進んだとするのが妥当であるが、土層の観察からは流路1は人為的に埋め立てられた可能性が高いと考えている。このこととC14年代測定結果との整合性を保つためには、ICU—4を埋没開始前に流路1底面に残されたもの、ICU—3を埋没開始後のものと理解する必要がある。

ICU—5は内大部川と直交する方向に調査区内を流れる、沢状の地形の底面から採取したものである。この沢からは時期のわかる遺物が出土しておらず、縄文時代の沢ではないかと考え、C14年代測定を試みた。40年BPという測定年代がでており、測定年代を正しいものとみれば、戦前から戦後にかけての沢である。耕作土からは戦前のものらしいビール瓶や戦中から戦後のものと思われるガラス製の一斗瓶などが出土しており、これらの遺物が調査区内を流れる沢状の地形と同時期のものと考える。

（石井淳平）

Ⅶ まとめ

1 流路の変遷と段丘面の利用について

内園３遺跡、内園６遺跡、神居古潭７遺跡は、全体として一つの遺跡ともいえる存在であり（葛西1999）、内大部川下流域でどのような営みが展開されてきたものなのか、これまでの調査結果を概観し、簡単にまとめておきたい。幸い、とくに内大部川左岸では、縄文中期から後期、晩期へと、活動の拠点となる段丘面を、高位の西側から低位の東へと移していったことが知られてきており（葛西1999）、流路の変遷と段丘地形の形成、段丘面利用の推移といった視点から、過去の足跡を振り返ってみたい。なお、流路の変遷に関連した、段丘面形成の様相については、Ⅲ章２節の記載を参照していただきたい。流路はこれまでの調査によって流路１、流路２の２本が明瞭に認識されてきたが、ここではさらに流路１の西に流路０を、流路２の東に流路３を追加、計４本の流路の存在を想定する。段丘面については、Ⅲ章２節に従い、流路２の東を第１段丘面、流路１・２間を第２段丘面、流路１の西を第３段丘面と呼称し、説明を進めていきたい。

図64は、これまでに検出された遺構と、想定した４本の流路の位置を示したものである。各年次の調査区については、内園６遺跡の平成７年度調査で使われたＡ～Ｄの地区表記（葛西　1996）を踏襲し、ここではさらに内園６遺跡の平成１１年度調査区をＥ、内園３遺跡の平成10年度調査区（葛西1999）をＦ、平成２年度調査区（大矢　1991）をＧ、神居古潭７遺跡段丘最下面を対象とする平成３・４・６年度調査区（友田　1992・1993・1995）をＨ、平成６年度調査の上位平坦面（瀬川　1995）をＩと、それぞれ仮称することにしたい。

図65に使用した断面は、東西を一直線に切った実測図ではない。内大部川両岸の段丘地形の発達を模式的に示すべく、右岸のＩ地区中央付近からＨ地区へ降り、左岸はＥ地区メインセクションの33ラインを大凡のペースに、河畔近くではＥ～Ｆ―13北壁を、西端付近についてはＤ地区捨場における沢地形を活用して合成した想定図である。この図では、段丘地形を明示するため、水平方向に対する垂直方向の長さを２倍にして、高低差を強調している。従って、左岸側の下底に示す基盤層上面の実際の傾斜は約２°だが、図上では倍の４°となっている。図の太線は想定した各段階の地形を、細線は対比のために現在の地形線を示している。

基盤は新第三紀の砂岩・泥岩層で、上は礫・砂・シルトなど沖積世の氾濫源堆積物に覆われている（北海道旭川土木現業所　1995）。内大部川の右岸と左岸の間には断層が介在し、内大部川はこの断層の境界を縫って流下しているように見受けられる。内大部川下流域での人間活動の痕跡は、Ｉ地区の２軒の住居用遺構の存在などから、縄文早期後半（Ｉｂ期）には確認されるが、これらは炉や柱穴がはっきりせず、遺物の検出も僅かで、短期的な生活址と判断されている。ここは位置的にみて、直接、内大部川本流に臨むというより、上位平坦面を東から西へ下る小沢を利用した立地と思われる。内大部川による浸食の進行を勘案するとき、確たる根拠はないが、図65の最上段に示すように、このＩｂ期までにＨ地区の段丘最下面が開析されたものとみておきたい。納内６丁目付近遺跡では、東釧路Ⅱ式土器を包含する４ｍもの厚さの礫層の上に、さらに１ｍの砂とシルトの互層が堆積しており、そこにＩｂ期の大きな集落が営まれていた（北堀文　1990）。この例からも、温暖期に入ったこの時期に、河川活動が盛んとなって、土地の浸食や堆積作用が、かなり大規模に進展した様子の一端が窺える。

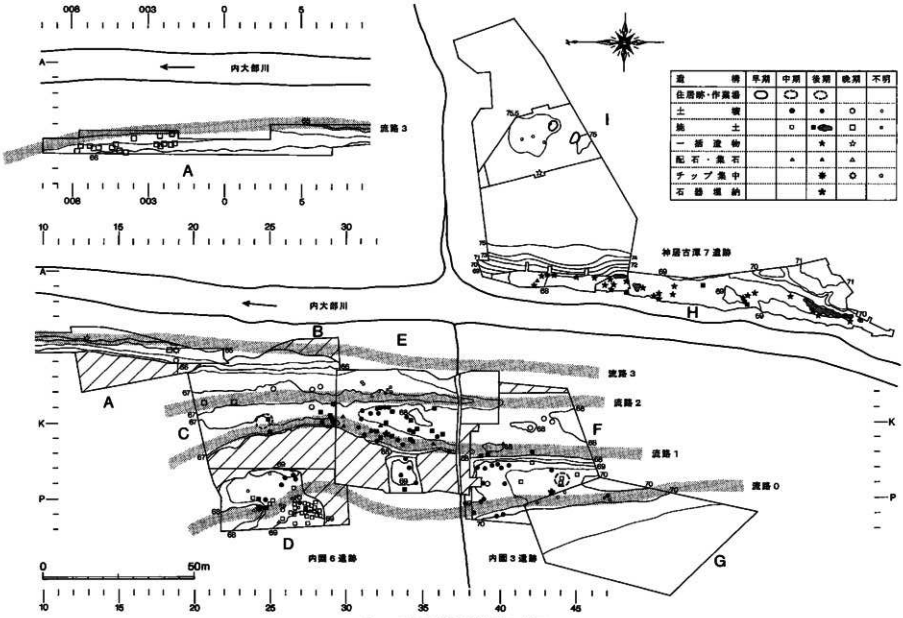


図64　遺構の位置と流路の変遷

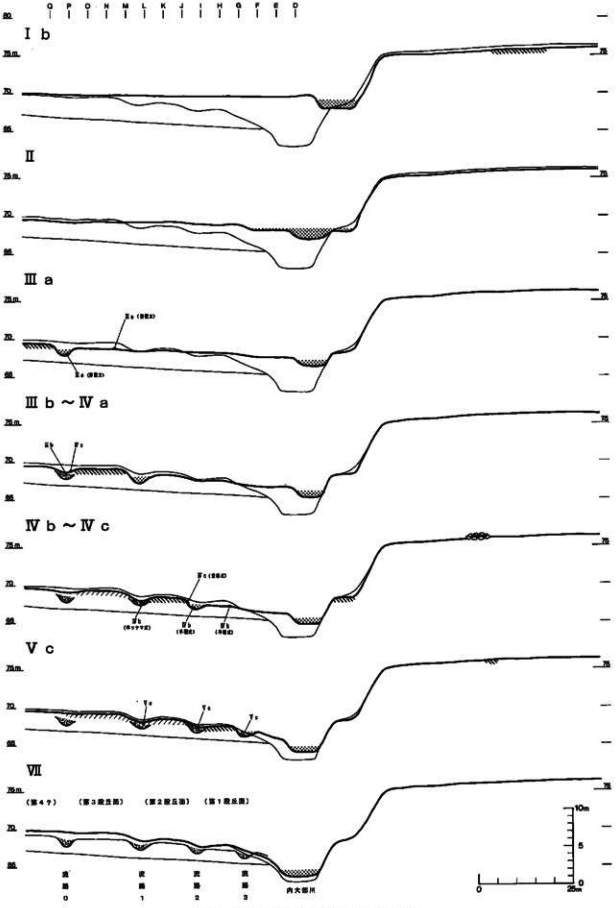


図65　流路の変遷と段丘面利用の推移

温暖化は、縄文海進のピークを迎える前期まで引き続き、図65のⅡ期に想定したように、内大部川左岸流域では、沼沢化、湿原化が進み、生活の舞台は他に求められたものと思われる。右岸のⅠ地区は高台だが、こちらにもⅡ期の痕跡は残されていない。縄文前期の住居跡は、石狩川本流筋の納内6丁目付近遺跡と神居古潭15遺跡で各1基知られる程度であり、全体にかなり稀薄である。

縄文中期前半（Ⅲａ期）に至って、内大部川の西方に、内大部川から分岐したと推定される流路0が形成される。G地区に見い出された流路がそれだが、報告では流路底部に検出された縄文後期の土壙1との関係から、流路の時期を後期以後とみている。しかし、この流路からは多数の縄文中期～後期の遺物が検出されており、土器分布図をみると、中期の土器は流路沿いにほぼ万遍なく遺存している。後期の土器も同じく一様に散在するかにみえるが、よくみると土壙1～4の周辺により濃密な分布を認めることが可能であり、土壙の構築と関連して残された遺物も少なくないように思われる。このような状況から推して、縄文中期末には流路の埋没がかなり進んでおり、土壙1の構築は、未だ凹みは残るものの、流路埋没後のことであったと考えたい。また、D地区の後期前半の遺物を多出した捨場の沢地形は、埋没した流路の存在を示唆するものである。流路0についての認識は、これまで必ずしも明瞭なものではなかったが、葛西（1999）もD地区やF地区のO～Pライン付近に、幾分くぼむ微地形を認めており、図64に示すような、緩やかに蛇行する流路0の存在を想定することは、無稽とは思われない。D地区にはⅢａ期の土壙や集石、焼土などが分布しており、とくに南西部に集中する傾向がみられる。恐らく、Ⅲａ期の流路0には、人間の利用に好適な流水量が保たれており、幾分高く安定した左岸側を主体に、生活面が選定されていたようだ。地形的には、遅れて形成される第3段丘面よりやや高いこの左岸側に、第4段丘面の発達を認めることも可能かも知れない。この段階の右岸側がより低く、不安定だったことは、E地区第3段丘のⅣ層深くに検出された押型文土器のレベルなどからも推量される。D地区を越えた流路0は、大きなカーブを描いて、北西方向へと延びているものと思われる。

縄文中期後半（Ⅲｂ期）から後期前葉（Ⅳａ期）までに流路0は埋没し、第3段丘面の成立とともに、段丘東縁沿いに新たな流路1が貫流する。人々の活動は主に第3段丘面を拠点に、より広い範囲に展開されてくる。F地区では北筒式土器を伴うものなど、中期末の住居跡や土壙、焼土などとともに、後期前葉の土壙群が残され、不要となった遺物の多くは、埋没後の流路0の凹みに廃棄されたようだ。D地区第3段丘面でも土壙群などが営まれ、不要の遺物は上述の捨場に廃棄されている。

流路1は縄文後期中葉（Ⅳｂ期）までには埋没、代わって流路2が開析され、この過程で第2段丘面が形成される。後期中葉から後葉（Ⅳｃ期）にかけて、埋没後の流路1の凹みも含めて、この第2段丘面を中心に、縄文人の営みは活況を呈し、その活動は第3段丘面にも及ぶ。遺構にはC地区やE地区の平地式住居や作業場を構成する柱穴や焼土のほか、多数の土壙や柱穴、焼土や集石、石器の埋納などがあり、埋没後の流路1の凹みや周辺からは、Ⅳ群ｂ類土器をはじめとする大量の遺物が検出されている。流路2の西壁から河底付近にかけても、Ⅳ群ｂ類の大片などが少なからず見い出されており、水際での作業も盛んに繰り返されていたようだ。流路2の西周では、Ⅳ群ｃ類土器のまとまりなども発見されている。流路2を外れた東では、Ⅳ層の下部に少量ながらⅣ群ｂ類土器の点在がみられ、この段階では、ここが未だ不安定な氾濫原であったことが窺える。このように内大部川左岸にはⅣｂ期の遺構、遺物がかなり豊富に残されており、生活の拠点として安定的に利用されていたことは間違いないと思われるが、確実な住居跡はなく、必ずしも集落跡の様相は鮮わない。

Ⅳｂ期には、内大部川右岸の日地区でも多数の一括遺物が検出されているが、遺構が少ないこと、短期間に人為的に廃棄されたと考えられる特異な焼土層が存在すること、土器が主体で石器類が乏しいことなどから、遺跡としての性格が問われている。Ⅱ章に触れたように、右岸の上位面にはストー

ンサークルが存在していたといわれ、H地区の一括遺物はその造営に関連して残されたことも考えられている。また、現在は果樹園になっている、ストーンサークルの南にあたる標高71～72mの平坦面からは、開墾の際に大量の遺物が採集されており、ここに日常生活の場があったことも推定されている（友田　1992）。内大部川を挟む両城で、集落をここに位置づけるなら、ストーンサークルの造営、葬送や追悼、季節的な祭祀といった折々には、近くに集落があってもそこを離れて、H地区のようなやや特殊な場所で、関係者が起居をともにしたのかも知れないという、想像も許されよう。いずれにせよ、Ⅱ章にも触れたように、このⅣb期を中心に、Ⅳc期に至るまでの段階では、内大部川下流域から石狩川本流にかけての広い範囲で、縄文人が活発に活動を展開していたことが知られており、その盛況ぶりがとりわけ注目されるところである。

流路2はやがて埋没し、第1段丘の形成をみる。Ⅳc期前半以後しばらくは人間活動の痕跡が途絶えるが、縄文晩期後葉のⅤc期には、再び活況を取り戻す。段丘崖の流失や重機による削平のため、確実な流路をトレースすることは困難だが、Ⅴc期には、図64に示す流路3が存在したものと考えたい。流路3については、A地区E～F―13北壁で流路底の上方10～20cm程で、Ⅴ群c類の一括土器が検出されており、晩期後葉以後、流路3は急速な埋没をみたものと思われる。Ⅴc期の遺構は、必ずしも分明ではないが、第1段丘面上のA地区北端部では焼土群や土壙、チップ集中などがみられ、A地区南端からC地区にかけての一帯でも、第1段丘上や埋没後の流路2の凹みなどに、土壙や焼土が残されている。また、平成11年度調査のE地区の遺構にも、Ⅴc期に属するものが含まれていると推測されており、F地区の第2段丘や第3段丘上にも1～数基の土壙がみられるなど、Ⅴc期の遺構は、広範にわたる分布を示す。Ⅴc期の遺物は、とくに埋没した流路2の上面に多量に見い出されている。遺物には土製品や石製品など非実用的な遺具も含まれており、葛西（1997a）はここに“送る”行為をよみとりたいという。埋没した流路1の上部にも、かなりの量の遺物が包含されており、流路3に沿った第1段丘東縁部にも集中的な遺存が認められた。このほかD、E、F地区の各段丘面からも少なからぬ量の資料が得られている。このようにⅤc期の営みは、第1段丘面を主体に展開されたが、第2段丘面や第3段丘面にも広く活動の痕跡を留めている。しかし、住居と考えられる遺構はなく、Ⅳb期におけると同様に、ここにⅤc期の定着した集落跡を見い出すことは困難であろう。或いは、これらの流路が、季節によっては、増水による氾濫や冠水をもたらしたり、反対に減水や枯渇のため、通年の利用が危ぶまれるなど、必ずしも段丘面での安定した活動を保証しない状況があったのかも知れない。Ⅴc期については、対岸のI地区でも、短期的な来訪の痕跡が認められている。

流路3の埋没を契機に、分岐による流路は消滅し、図65最下段に示すように、内大部川は再び本流1本にまとまったものと考える。続縄文時代の資料はなく、擦文時代（Ⅶ期）に至って、D地区やG地区など、比較的高位の段丘面から、少量の擦文土器片が得られている。しかしながら、Ⅱ章に述べたように、石狩川本流筋における大集落の発展に比して、内大部川下流域では、擦文時代からアイヌ文化期を通して、活動の痕跡は乏しく、縄文後期中葉や晩期後葉の活況や文化的な高揚と、この擦文期以降の衰微の間には、大きな隔たりがあるといわざるをえない。

黒曜石の原材産地分析の結果では、縄文後期には赤井川産の原石が多い一方で、白滝や置戸、十勝など、東方からも約半数の原石がもたらされており（葛西　1997a）、広域にわたるルートの存在が窺われる。神居古潭の一帯や南東の空知川流域では、蛇紋岩や片岩など、磨製石器の原材も豊富である。神居古潭5遺跡や音江のストーンサークルと、神居古潭7遺跡にあったというストーンサークルが、どのような関係にあったか詳細は不明だが、瀬川（1990）の説くように、次代の芦別市野花南のアースサークルの造営も含めて、石狩平野北端に依拠した縄文集団のもつ強い紐帯を認め、物資の流通や文化交流に占める影響力の強大さをみることも、あながち不可能ではないと思われる。　（高橋和樹）

2　土器の出土のあり方について

(1)　はじめに

土器の一次整理では、「残存状態に関する分類基準」（Ⅲ章４節参照）を設定し、作業を進めた。当初これは、復原の可能性のある破片や、型式的特徴を把握しやすい口縁部、底部のものを、効率よく認識するために定めたものである。緊急発掘調査という様々な制約の下で、すみやかに出土土器の型式を判断すること、より多くの復原資料を得ることを目的している。ただし、これは遺物について、資料的な価値に差を生じさせるものではなく、緊急発掘調査において能率的に作業を進め、よりよい成果を目指すために用いた便宜的な基準である。

この分類について、過去二つの調査において実践した（北海道埋蔵文化財センター　1998、1999）。これらの場合では、ランクについて先に説明した目的にのみ用い、報告文中には用いていない。

土器のランクは、その破片の残存のあり方を表すものである。はじめに、土器のランクについて整理し、それが生じるの要因を考える。それから、土器の分布について簡単にまとめておきたい。

(2)　ランクの決定方法

ランクは、土器の出土状況、形態、破片部位、残存状態により決定した。土器の分類作業は図66の流れで行った。以下図の項目について説明する。

１．出土状況

「**まとまり**」；ある特定の空間に１個体のみが出土した状況。また、複数の個体がみられる場合は「**混在**」として区別する。

「**散　　在**」；特定のまとまりがみとめられない状況。

＊「まとまり」であれば、以下の項目は問わずにＡランクとする。「混在」の場合は個体識別を行い、各個体それぞれをＡランクとする。混在する個体の一つが単体の破片である場合、その破片は「散在」のものとして扱う。これらは以下の項目でさらに分類する。

２．形　　態

「**器　状**」；ある個体が特定の部位だけでも、容器としての本来的な形態を有するもの。完形のものもこれに含まれる。

「**破片状**」；容器としての形態を失い、破片となっているもの。

＊「器状」であれば以下の項目を問わずＡランクとする。「破片状」のものは以下の項目でさらに分類する。

３．破片部位

「**口縁部**」；口唇部を有するもの

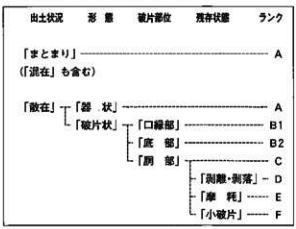


図66　ランク分類の方法

「**底　部**」；底面を有するもの

「**胴　部**」；上記以外のもので、頸部や肩部等も含む。

＊「口縁部」、「底部」については、破片の残存状態を問わずにそれぞれＢ１、Ｂ２ランクとする。両者からは土器型式が判断しやすい。「胴部」は以下の項目でさらに分類する。

４．残存状態

「**剥離・剥落**」；器表面が剥がれた状態

「**摩耗**」；摩耗し丸みを帯びた状態

「小破片」；小型の破片となった状態

＊「剥離・剥落」のものはDランク、「摩耗」のものはEランク、百円玉程度以下の破片を「小破片」とし、Fランクとする。これらに該当しないものをCランクとする。D・Fランクは接合するが、器形を復原することに影響がない場合がある。Eランクは接合するのが困難である。また、これらのランクのほとんどが型式の判断（時期分類）も困難であるのが通例である。

(3) ランクの内容

ここで取り上げるランクは残存のあり方に関わるもの、すなわちA、D、E、Fランクである。

「Aランク」

1．同一個体の土器がまとまった状態で出土したもの

このケースは大きく三つに分けられる。

(1)完形のもの

(2)底部等、一部分であっても器としての形状を留め、周囲に同一個体の破片が認められるもの

(3)すべて破片であるが、まとまっているもの

2．器の形状を保った状態で出土したもの（器状）

「Dランク」

剥離・剥落している胴部破片。

「Eランク」

割れ口や器面が全体的に摩耗している胴部破片。

「Fランク」

胴部の小破片。

(4) 遺跡形成過程とランク

土器の残存のあり方に差異がみられることは、「遺物形成とともにいかに考古記録が形成されるか」（五十嵐 1999）を考える「遺跡形成過程(site formation process)」で扱われる内容である。マイケル・シファーなどにより理論的な枠組みが提示され(Schiffer 1972 西藤訳 1983)、近年日本でも論議されつつある分野である。

人為物が過去の人間活動のなかで、その機能を果たしている状況を「体系的状況(sysytematic context)」、人為物が棄てられ、機能を失った状態で、遺物として認識されるまで周囲の自然環境と関わっている状況を「考古学的状況(archaeological cntext)」という。前者は動態であり、後者にも「動き」の要素は介在するが、研究者が認識するのは静態としての一つの段階である。遺跡形成過程研究とは、我々が発掘調査で認識する静態としての考古学的状況から、過去の人間活動という動態について推論する中範囲理論(middle range theory)の一つである。

人為物（遺物）の状況(context)が変換する作用については、その原因から大きく二つに分けられる。一つは人為的な作用（以下「人為作用」）で、もう一つは自然的な作用（以下「自然作用」）である。前者は「文化形成過程(cultural formation process)」、後者は「非文化形成過程(noncultural formation process)」とよばれる。この遺跡形成過程における作用が、土器の残存のあり方にどのような影響を与えるのか考えていく。

土器のライフサイクル、すなわち土器が製作・使用され、そして棄てられる。その後埋没し周囲の環境から影響を受け、発掘調査で確認されるまでの一連の流れを想定し、図67に示す。

土器が体系的状況の中で機能している段階から、それらが廃棄（広義）されるには三つのあり方がある。すなわち「遺棄」、「廃棄」、「放置」である。「遺棄」は使用空間に棄てられる場合、「廃棄」（狭

図67　土器のライフサイクル

義）は使用された空間から人為的な移動により他の場所に棄てられる場合、「放置」は棄てるという意識がなく、貯蔵していたものが忘れられた場合等をいう。また、土器以外の遺物はもちろんのこと、遺跡そのものも廃棄という人為作用により、体系的な状況から考古学的状況に変換するといえる。

図67から各ランクがどの段階において、どのような作用で生じるかを考える。

Aランク

人為物が廃棄（広義）された段階で生じる。その後の考古学的状況においては、あまり自然・人為作用を受けず、まとまった状態を保っている。

Dランク

体系的状況において、そして考古学的状況のあらゆる段階で生じる。剥離・剥落が生じる原因は、体系的状況における使用による器面の劣化・損傷といった人為作用、また、主として考古学的状況における自然作用として、土中における動植物の影響等が考えられる。剥離・剥落破片はあらゆる段階で生じる。

Eランク

完形が摩耗するといった場合を無視すると、すべて破片となった後、考古学的状況のあらゆる段階で生じる。一般的には水による移動といった自然作用により生じると考えられる。

Fランク

小破片は、両状況のあらゆる段階でおいて生じる。体系的状況において、少し損なわれた程度の土器なら使用されたであろうと推測される。また、廃棄後の考古学的状況においては様々な作用が影響する。土器の壊れ方は、はじめ器の形状が損なわれ、破片となる（破片化）。さらに、その破片が小さく割れていく（小破片化）という傾向（立体性が失われる→偏平化→小破片化）があると考えられる。特に、人為的な耕作等が包含層に及ぶ場合、遺物の破片化及び小破片化が進む。

(5)　ランクの解釈

上記のことをふまえると、各ランクからその出土位置については次のように解釈できる。

Aランク

完形で出土したものは人為的あるいは自然的な影響で動いた可能性は少なく、概ね本来的な位置を留めていると判断できる。完形ではないが、まとまって出土したものもほとんど動いていない、あるいは、動いたとしても個体の状態の時点であると考えられ、出土した位置で破片が生じたと判断される。器状のものは動いている可能性はあるが、立体的なものほど破片になりやすい傾向があると考えられ、このことから器としての形状を保っているものは、あまり移動していないと推測できる。すなわち、確認されるAランクの考古学的状況は、過去の体系的状況を比較的反映していると考えることができる。

Aランクの出土位置は、廃棄（広義）された位置とほぼ同じである可能性が高い。また、廃棄された位置は体系的状況における人為作用により決定される。「遺棄」、「廃棄」、「放置」の区別は、その

周囲の状況により判断できる場合がある。

Dランク

あらゆる段階で生じる。ただし、剥離（剥落）面の状態から一つの推測が可能である。剥離面が摩耗した状態のものは、剥離後に移動していると考えられる。一方、剥離面が明瞭に残存しているものは、考古学的状況の新しい段階で生じたか、ほとんど移動していない可能性が考えられる。

Dランクの出土位置は、廃棄された位置を明確に反映しておらず、両状況における人為・自然作用の影響による無秩序な結果といえる。ただし、剥離面の状態から移動の可能性を推測できる。

Eランク

礫の「円磨度」の概念を適用した考え方で、二次的な移動を考える目安となる。全体が顕著に摩耗しているものは、頻繁にあるいは長距離を移動した可能性が高いと判断される。ただし、地表面に遺物が露出している場合、雨水等で器面が損なわれ、摩耗した状態となることがありうる。しかし、この場合、摩耗した面が一部にしかみられない。

Eランクの出土位置は、考古学的状況における自然作用による移動の結果と考えられる。

Fランク

あらゆる段階で生じる。Fランクは両状況における人為・自然作用による無秩序な結果と考えられる。

以上のことをまとめると次のようになる。Aランクの位置はその時期の活動空間を、Eランクの位置は移動した結果をそれぞれ示している。また、D・Fランクの位置は無秩序な結果と考えられる。

(6) 分布図の解釈

Ⅴ章の図33～36の分布図から、遺跡における各時期の活動空間を推測してみたい。ただし、各群のD・E・Fランクの分布図は作成していないので、Aランクのものを中心に進める。また、ここではB1・B2・Cランクのものは、グリッドを越える程度の規模の移動はしていないと仮定する。

調査区全体（総破片数）

分布は流路1が存在するグリッドに分布が際だって多く、流路2も周辺に比べて多いところが部分的に認められる。D・FランクはK―32区に最も多く、これはAランクの出土が多いグリッドと一致する。原因としては、土器がまとまって出土したグリッドは、周辺よりも精査されるという発掘調査の精度の違い等が考えられる。また、Fランクは流路1が存在するグリッドにも多い。Eランクも流路1付近に多い。これは土器が移動し、流路の凹みに落ち込んだものと推測される。

全般的に、破片は流路とその周辺に多く分布している。流路1付近はほぼ全体的に、流路2は部分的に分布が多いグリッドが認められる。さらにM～O―33区にも比較的多いが、ここにⅣ層が落ち込む地形が認められるためと考えられる（図9参照）。

流路1の北と南側は出土が少ないが、これは包含層が削平を受けているためと判断される（図12参照）。また、33ライン～35ラインには全般的に多くの出土が認められる。ここは旧国道の盛土の下にあたり、そのために残りが良かったと考えられる。

Ⅱ群

調査区の西側に集中しており、他の地点からの出土や、Aランクのものは全くみられない。20点すべての破片を観察した結果、程度の差はあれすべて摩耗していた。調査区の西側外にあるさらに高位の段丘から二次堆積したものと推測される。

Ⅳ群

全体的に総破片と同じ分布のあり方である。流路1が存在するグリッドに多く、南北両側は少ない。

流路２には多く出土しているグリッドが部分的に認められる。ＡランクがＪ・Ｋ―32区に最も多く、この付近が活動空間であると推測される。ＣランクはⅣ群の全点数の出土のあり方とほぼ同じ様相を呈する。

Ⅴ群

流路１が位置するＫ―35・Ｌ―36区に最も多い。次にＨ―31～34区の周辺に多く、集中する場所は二カ所と判断される。また、ＡランクはＨ―34区から出土しており、活動空間であると判断される。Ｂ１・Ｃランクの分布も同様である。

以上のことをまとめる。縄文時代中期（Ⅲ群）は調査区外のさらに高位の段丘が活動空間で、後期（Ⅳ群）は、流路１とそれの上下の段丘、及び流路２に部分的な活動空間を有する。復原掲載土器は、後期中葉のもの（Ⅳ群ｂ類）が比較的広い範囲で出土し、後期後葉（Ⅳ群ｃ類）のものがＩ―33・34区つまり、流路２で部分的に出土するといった相違が認められる。また、晩期（Ⅴ群）は流路１・２に部分的な活動空間をもつ。

このようにみていくと、古い時代は高い段丘を利用し、時代が新しくなるにつれ、低い段丘を活動の場所としていると判断される。川の下刻作用により、順次形成される段丘を利用し、常に川の近くに活動の場所を求めていたものと考えられる。

(7) おわりに

以上土器の残存のあり方について述べ、分布図から各時期の活動空間を推測した。通常発掘調査における包含層調査とは遺物の出土状況について調べることである。近年、旧石器時代の遺跡を対象に遺物包含層における遺物の分布のあり方を解釈する試みが行われている（小林　1997など）。これらは遺跡形成過程研究の実践例としてその有効性を提示している。本例は、土器そのものの残存のあり方から考えた土器の移動の程度、そして不動性について仮定し、それを踏まえ分布図から遺跡における時期別の活動空間を考えた。これは数値のみから得られた結果を、裏付けるのに有効な傍証となりうるものと考えている。

用いた基準は、本来的には接合、型式認識に視点をおいたものであり、部位と残存の状態の両者を合わせて一つの基準としている。今回試みたことを厳密に実践するならば、「部位」、「残存状態」に分けてそれぞれ基準を設け、適用するのが理想である。さらに、剥離・剥落、摩耗の度合いを段階的に区別し、土器の使用のされ方や強度、そして遺跡の地形等もランクの決定に関与することも考慮する必要がある。今後、先に掲げた条件を満たした上で、さらに試みていきたい。　　（末光正卓）

3 石器について

(1) 石器の概要

内園６遺跡では包含層・遺構合わせて6,999点の石器が出土した。土器も含めた全ての遺物のうち石器の出土点数の割合は26.6%である。この数字は対岸の神居古潭７遺跡の17.8%や同時期の忍路土場遺跡の21.9%よりも若干高いが、土器の総点数が石器のそれを大きく上回るという傾向は同じである。このことは遺物の主体を占める縄文時代後期中葉の傾向を反映しているものと考える。

表13は包含層、遺構を合わせた全ての石器の器種別の集計表である。剥片石器、礫石器、フレイク類・礫・その他に分け、それぞれの出土比率を算出した。フレイク類・礫・その他が全体の87.0%を占める。特に黒曜石のフレイク類が多く、全体の80.0%を占める。忍路土場遺跡ではこの数字が88.0%となっている。遺物の集計方法に若干の違いがあり正確な比較にはならないが、後期中葉の平均的な数字であると考える。

使用されている石材は、剥片石器ではほとんど全て黒曜石である。礫石器は機能に合わせて石材が選択されていたようで、器種ごとに主要な石材が異なる。また、黒曜石のフレイク類が一定量出土していることから、黒曜石製の石器は遺跡内で製作されたものが相当数存在するものと考える。一方、黒曜石以外の石材で作られた剥片石器はチャート、頁岩、泥岩、めのう、凝灰岩、流紋岩製のものがあり、16点出土しているが、黒曜石以外のフレイク類は20点しか出土しておらず、黒曜石以外の石材で作られた剥片石器は遺跡外からの搬入品である可能性が高い。

石鏃は有茎のものが多数を占め、厚手で長さに比べ幅のあるものと薄手で長さに比べ幅が狭いものが存在する。量的にはどちらも同じ程度に存在するため時期が異なるとは考えにくい。一方、若干存在する無茎の石鏃は晩期に属する可能性が高い。黒曜石以外の石材は頁岩、チャート、めのうがある。つまみ付きナイフは出土点数は少ないものの、破損率が低く掲載数も多い。全て縦長剥片を利用して作り出されている。黒曜石以外の石材は頁岩、凝灰岩がある。

スクレイパーは不定形の剥片の一部に刃部を作り出したものが多く、次いで縦長の剥片の側縁に刃部を作り出したものが多い。黒曜石以外の石材は頁岩、チャート、流紋岩がある。

石器素材については次節で取り上げるので割愛する。

石斧はほとんどが磨製石斧で打製石斧がわずかに存在する。打製石斧は平均的な磨製石斧より大きく、重量もある。石材は片岩が最も多く、蛇紋岩、粘板岩、砂岩がある。

たたき石は安山岩の円礫を利用したものがほとんどである。

すり石は安山岩のやや扁平な円礫を利用している。扁平な面は両面とも使用されているものが多い。石皿・台石は砂岩と安山岩があり、砂岩が多い。石皿・台石には砥石として使用されたものも含んでおり、砂岩製のものの多くは砥石である可能性が高い。すり石が比較的多く出土しているにもかかわらず、対になりそうな石皿が少ない。損耗率の差によるのかもしれない。

石製品は７点出土しており、その内オロシガネ状石製品が３点出土している。２点はほぼ完形を保っており、もう１点は部分的に残存しているだけである。石材は全て多孔質の安山岩である。

(2) 石器素材とした遺物について

内園６遺跡では、「石器埋納」とした遺構から剥片を調整した円形または楕円形の石器が出土した。同様の石器は隣接する内園３遺跡でも検出されている。本文中では内園３遺跡の報告で使用された名称を踏襲し、石器素材と呼称した。これらの石器の時期は供伴する遺物が無く、他遺跡の類例も隣接する内園３遺跡以外には見あたらないため、はっきりしない。ただし、今年度調査区、98年度調査内

表13　内園6遺跡出土石器集計表

剥片石器

	石鏃	石槍・ナイフ	石錐	つまみ付きナイフ	スクレイパー	石器素材	Rフレイク	Uフレイク	合計
点数	103	12	10	17	105	53	462	59	821
比率	0.13	0.01	0.01	0.02	0.13	0.06	0.56	0.07	1.00

礫石器

	石斧	たたき石	すり石	石皿・台石	石製品	合計
点数	32	12	11	41	7	103
比率	0.31	0.12	0.11	0.40	0.07	1.00

フレイク類・礫・その他

	フレイク類（黒曜石）	フレイク類（黒曜石以外）	原石	石核	石斧原材	棒状原石	礫	合計
点数	5596	36	5	34	156	4	244	6075
比率	0.92	0.01	0.00	0.01	0.03	0.00	0.04	1.00

園3遺跡の包含層から出土している土器の大半は縄文時代後期中葉であることから、石器もこの時期のものである可能性が高い。

石器の特徴は、

(1) 明瞭な刃部を持たないこと

(2) 大きさと形状が統一されていること

(3) 調整の度合いや手法が個体により大きく異なること

である。

石器の整形には通常の押圧剥離によるとみられる調整の他、折断や微細な剥離による調整が施される。微細な剥離はUフレイクなどにみられるものと類似し、使用痕の可能性も考えたが剥離面を観察すると常に一定の方向から剥離しており、意図的になされた調整の一種と判断した。礫などで剥片の縁を削るようにして縁辺を調整したものと考える。もとの剥片の縁辺部分がそのまま残っているものはなく、全ての縁辺に何らかの調整が施されている。

図68は埋納遺構出土の石器の折断による折れ面と微細な剥離の範囲を示したものである。主剥離面の打点側を上にし、背面側を図示した。調整が全面に施され、主剥離面を確認できないものは長軸を垂直にし、先端が尖る方を上にしている。図68からは

(1) 剥片の方向がまちまちであることから、剥片を得る際に決まった手順はなく、得られる剥片の形状もまちまちであったこと

(2) 折断は打点側、遠位端側を問わず施されることから、得られた剥片が不定形で厚みも異なるため、剥片の状態に合わせて大きさや形を整えようとしていること

(3) きれいな卵形または楕円形のものは微細な剥離による縁辺の調整や折断がみられないものが多いことなどがわかる。

通常の剥離による調整がほとんど施されず、微細な剥離による調整で縁辺の形状を整えたものや折断面をそのまま残した個体も存在する。薄い剥片では通常の調整が施しにくく、折断や微細な剥離による調整によって形状を整えたものと考える。このことは製作にあたって断面形よりも平面形の方が強く意識されたものと理解することができる。ただし、調整があまり施されないものでもバルブは除去されているものが多い。

図69で調整の度合いと、石器の大きさや形状との関係を検討した。大きさや形状を示す属性として、「長さ」、「幅」、「厚さ」、「重さ」の計量データを使用した。調整の度合いは通常の押圧剥離などによ

る調整が施される度合いで、
(1) 両面に施されるもの
(2) 主に片面のみに施されるもの
(3) ほとんど施されないもの
の3つに分類した。図では省略してそれぞれ「両面」、「片面」、「無」とした。

図69の一番上に「箱ひげ図」を示して属性ごとに調整の度合いによる差を比較した。箱の内側が全てのデータの75%を含む範囲、箱の外側の上下にのびる棒の内側が全てのデータの90%を含む範囲である。棒よりさらに上下のドットは、はずれ値を示す。また、箱の中に1本引かれた線が平均値である。長さと幅では調整の度合いによる差があまりなく、厚さでは若干差がみられ、重さでは大きな差があることがわかる。これを確率的に検討するために分散分析という統計手法を用い属性ごとに調整の度合いによる平均値の差が統計的に有意であるかどうかの検定を行った。有意確率を5%にした場合、平均値に差があると認められるのは、厚さにおける「両面」と「無」、重さにおける全ての組み合わせで、最初に箱ひげ図で確認した結果とも合致する。

また、長さと幅では調整の度合いによる統計的な差がないことから、重さを決定している属性は厚さであると予測できる。図69の一番下に示した相関行列でも重さと厚さの間にもっとも強い相関関係があることがわかる。これは統計的にも有意な相関である。

以上をまとめる。
(1) 調整の度合いによる差は長さと幅ではほとんどみられない
(2) 厚さでは調整の度合いによる差が若干みられ、重さでは全ての組み合わせで差がみられる
(3) 重さを決定しているのは厚さであることから、調整の度合いが高いものほど厚い

したがって、調整方法や度合いの違いは、異なる剥片を同じ大きさや形状に仕上げるために、剥片の状態に合わせて調整方法が選択されたものと解釈できる。さらに、先に述べたとおり平面的な大きさや形状に比べ、断面形や厚さはさほど重要視されていなかったと考える。このことは属性のばらつきを示す変動係数を比較すると、長さが0.076、幅が0.084、厚さが0.194となり、厚さが長さや幅の2倍以上の値をとることからもわかる。

次に内圏3遺跡の「石器素材埋納」出土の石器との比較を行う。現在のところ、同様の石器の類例は隣接する内圏3遺跡で検出された「石器素材埋納」出土の石器のみである。内圏3遺跡から出土した石器は埋納遺構から一括で出土したもので、点数が140点と多いことを除けば、今年度の調査で出土した石器と出土状況が類似している。出土地点は今年度調査で検出した石器埋納より一段高い第3段丘面で、直線距離で約60m離れている。石器そのものの特徴は明瞭な刃部を持たないこと、大きさと形状が統一されていること、調整の度合いや手法が個体により大きく異なることなど、共通点が多い。したがって両者は同じ意図を持って製作され埋納されたものと考える。しかし、内圏3遺跡出土の石器は通常の押圧剥離によるとみられる調整が施される度合いが低く、計量的なデータはないが、内圏6遺跡のものに比べ剥片を折り取って形状を整えただけのものや折断面が大きく残るものが多い。また、内圏6遺跡の石器にはかなりの頻度でみられたバルブを除去するための調整も施されていないものが多く、全体的に手を抜いて製作されたような印象を受けた。形状も内圏6遺跡出土のものが楕円形や卵形が多いのに比べ、いびつな形や、三角形や台形のような多角形的な形状のものが多い。これは折断面が大きく残るものが多いことが原因である。

図70に両遺跡の石器を各属性ごとに比較した結果を示したが、幅、厚さ、重さに差がないのに対し、長さでは大きな差がみられる。この差は統計的にも有意なものである。内圏3遺跡の方が長さが短く、

形状が円形に近いものが多いことを示している。また、厚さや重さに差がないことから、剥片の状態の違いに起因する調整方法の差とは考えにくく、内園３遺跡の石器の方が製作時の工程を省いているものと考える。以上のことから、内園３遺跡、内園６遺跡の埋納遺構出土の石器は機能や埋納された意図は同じであっても製作した人間が異なっていたか、製作された時期が異なっていたものと考える。今のところこれらの石器の機能・用途は不明である。石器素材以外にはスクレイパーや楔先として製作された可能性があり、個体別にみればスクレイパーや楔先として十分機能しうる個体も存在する。しかし、個体ごとの調整度合いのばらつきや調整方法の違いを、異なる剥片を同じ大きさや形状に仕上げることを最も強く意識し、個々の剥片の状態に合わせて調整方法が選択されたものと考えるため、利器としての石器というより、素材と考えるのが最も妥当であると判断した。ただし、石器素材とした場合大きさが限られているため、この石器を素材として製作可能な石器は小型のものに限定される。石鏃や石錐などは製作可能だが石器の形状から考えて直接石鏃や石錐を作り出すことは無駄が多く、この石器からさらに剥片をとることも困難である。また、この石器に直接刃部を作り出したような製品も存在せず、素材とは考えにくい点も多い。素材以外で可能性が高いと考えているのは埋納儀礼などに伴う象徴的な機能をもつ石器であるが、縄文時代の埋納行為・埋納遺構についての勉強が不足しているため、可能性を指摘するにとどめる。

(3) 内園３・６遺跡の石器分布

今年度の調査区では遺物の分布は第２段丘面の流路１にその中心があり、また流路１内でも地点によって遺物の密度が異なる。石器分布についてはⅤ章の包含層出土の石器の項で若干述べたとおりである。ここでは隣接する内園３遺跡も合わせて内大部川左岸における石器の分布について概略を述べる。対象とするのは内園６遺跡95、96年度調査区、内園３遺跡98年度調査区、今年度調査区である。これらの調査区はグリッドが共通するため、分析の基本資料とした等高線による遺物分布図の作成が容易に行えた。内大部川対岸の神居古潭７遺跡や内園３遺跡90年度調査区も同時期の遺跡であり、分析対象とする必要があるが、グリッドごとの遺物データが報告書から得られなかったことやグリッド座標が異なることから遺物分布図を作成できなかった。また、95年度調査の内園６遺跡Ａ地区は範囲の都合上割愛した。

図71の１番上に内園３、６遺跡の遺物の分布密度から１～６群にエリアを分け、それぞれの群の主体を占める土器の時期分類を示した。１群はⅤ群土器主体、２群、６群はⅣ群土器、Ⅴ群土器が混在し、３群～５群はⅣ群土器主体である。また、６群のエリアからはⅢ群土器も多く出土するが、Ⅳ群、Ⅴ群土器が多量に出土しているため、全体の比率ではわずかとなる。

縄文時代中期の遺物は内大部川から一番遠い第３段丘面に多く分布する。今年度の調査でも中期の遺物は、ほとんどが第３段丘面で出土する傾向があった。また、今回は扱っていないが、第３段丘面及び、さらに上位の段丘面の調査が主体となった内園３遺跡90年度の調査では後期に次いで中期の遺物が多く出土しており、中期の遺物はさらに上位の段丘面にも分布している可能性が高い。

縄文時代後期は遺物の分布域が広がり、第２段丘面全体に遺物が多く分布するようになる。流路１や95年度内園６遺跡Ｄ地区の調査で、捨て場とされた沢状のくぼみから特に多くの遺物が出土している。北側に行くに従い、高い段丘面にも後期の遺物が分布しているようで、先に述べた捨て場遺構は第３段丘面に存在する。さらにこの時期の遺物分布は対岸の神居古潭７遺跡にも広がり、内園３・６遺跡でも調査範囲外の南北にさらに遺物の分布が広がる可能性が高いことから、後期には内大部川の両岸一帯が活動の場となったことがわかる。

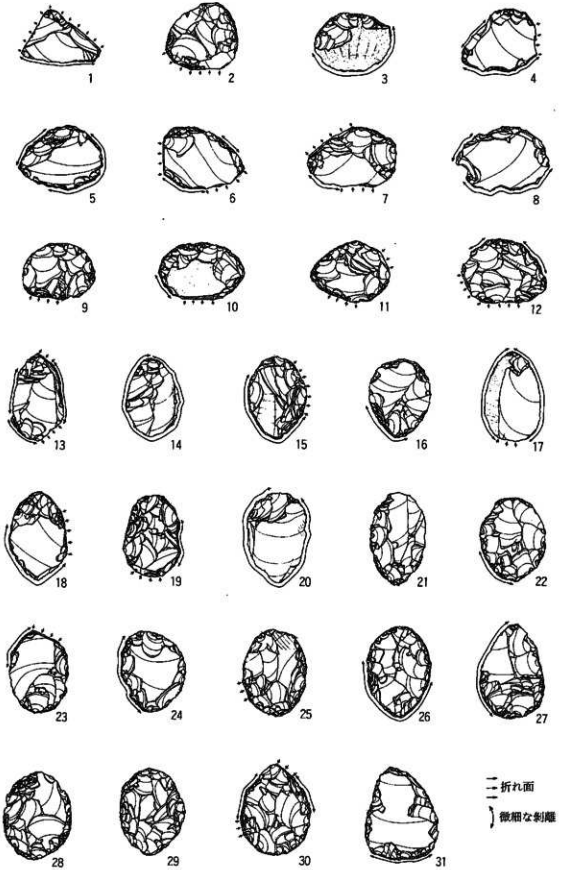
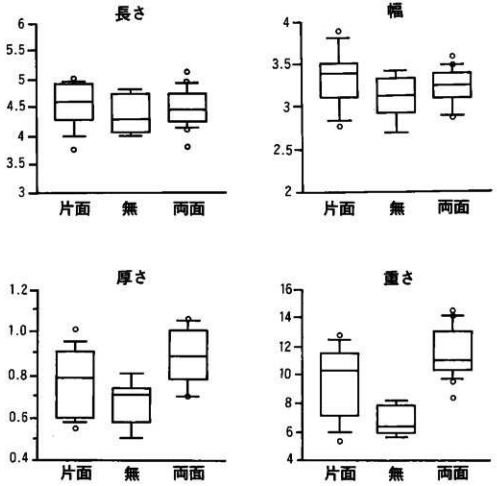


図68　埋納遺構出土石器



分散分析の結果

調整度合い	長さ		幅		厚さ		重さ	
	平均値の差	p値	平均値の差	p値	平均値の差	p値	平均値の差	p値
両面と片面	0.059	0.680	0.070	0.530	0.105	0.067	1.711	0.035
両面と無	0.101	0.577	0.150	0.294	0.215	0.005	4.531	<0.001
片面と無	0.160	0.411	0.220	0.153	0.110	0.153	2.850	0.011

相関行列

	長さ	幅	厚さ
幅	0.285		
厚さ	−0.070	0.279	
重さ	0.229	0.544	0.796

図69　石器素材分析結果(1)

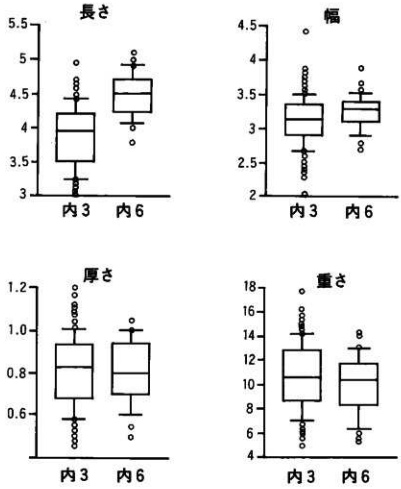


図70　石器素材分析結果(2)

縄文時代晩期は遺物の分布範囲が27ラインより北側へ移る。北側の低い段丘面を調査した95年度内園６遺跡Ａ地区では、出土した土器の大半が縄文時代晩期に属し、晩期の遺物分布の中心は調査区の範囲より下流に存在する可能性がある。

次に石器の分布を検討する。図72に剥片石器、礫石器、フレイク類の分布状況を示した。剥片石器は３群、５群で少なく、４群、６群に多い。礫石器は逆に１群、２群に少なく、３群、５群に多い。４群と６群は土器の出土量に比べて、石器全体の出土量が多い。一方、フレイク類は１群から６群までまんべんなく出土している。

晩期主体の１群、後・晩期が混在する２・６群、後期主体の３～５群との間に器種毎の分布の大きな違いははみられない。場の使用法が後期と晩期ではさほど違いがなかった可能性がある。縄文時代後期が主体の３～５群の中でも、３群で土器に対する石器の出土量が少ない以外は大きな差はみられない。本来ならば個々の器種毎の分布を検討した上で判断しなければいけないが、群ごとの遺物の出土比率に差がないことから、それぞれの群は場の機能差ではなく、並列する何らかの単位を反映していると考える。特に、剥片類と石器類の分布がほぼ一致することが、遺物群が場の機能差を反映したものではないことを示していると考える。したがって、流路１を中心とした後期の遺物分布状況は生活行為の結果というよりも、廃棄行為の結果を反映していると考える。そして、それぞれの群の意味

については短期間における時間差と、場を利用する人間集団の単位の違いの二通りの可能性が想定できる。しかし、遺跡における短い時間差は、同じⅣ群でも後期中葉から後葉にかけての比較的新しい遺物は第1段丘面と第2段丘面の間の斜面や、第1段丘面の流路2から多く出土することから、段丘の方向よりも段丘と直交する方向に反映すると考えている。したがって、それぞれの群は場を利用する人間集団の単位を表している可能性が高いと推測する。（石井淳平）

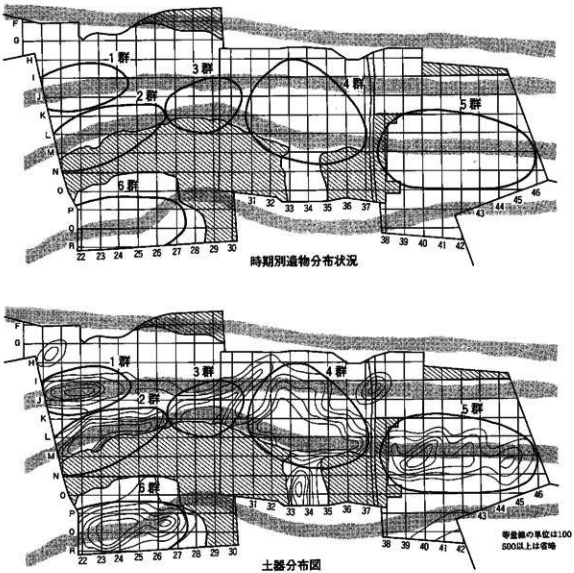
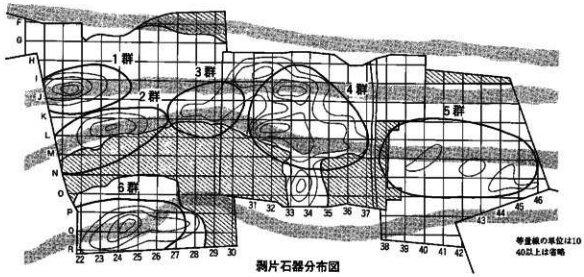
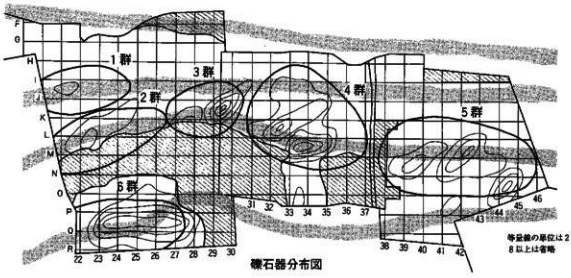


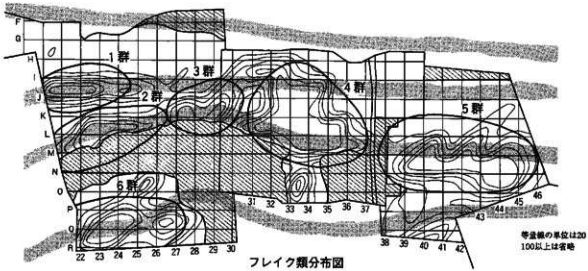
図71　内園3・6遺跡遺物分布図(1)



剥片石器分布図



礫石器分布図



フレイク類分布図

図72　内圏3・6遺跡遺物分布図(2)

1　調査風景（南から）

2　流路2調査風景（北から）

図版2

1　調査風景（南西から）

2　調査風景（西から）

3　調査風景（南から）

4　Ⅳ層土器出土状況（北東から）

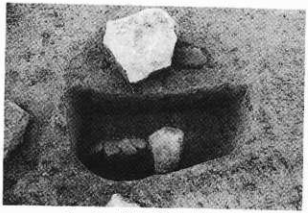
5　Ⅳ層土器出土状況（東から）

1　33ラインメインセクション（J～K　南東から）

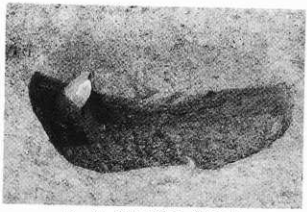
2　33ラインメインセクション（M～O　南東から）

3　流路1縦断方向セクション（北東から）

図版4

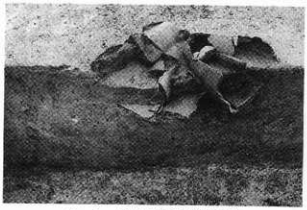


1　P－19土層断面（南から）



2　P－38土層断面（南から）

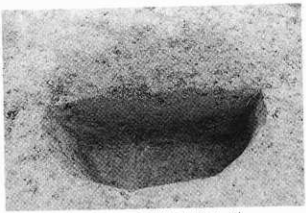
3　P－41土器出土状況（東から）



4　P－41土層断面（東から）

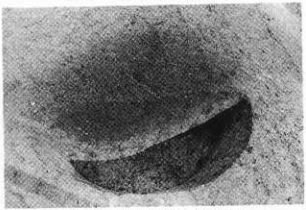
5　P－41完掘状況

1　P－43土層断面（西から）



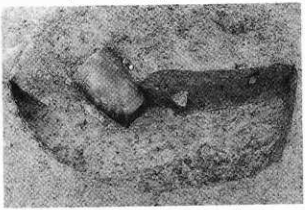
2　P－44土層断面（南から）

3　P－49土層断面（東から）



4　P－59土層断面（北から）

5　P－66確認状況（北から）

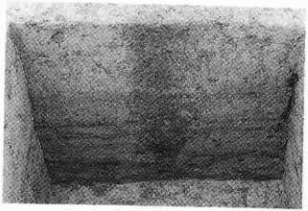


6　P－67土層断面（南から）

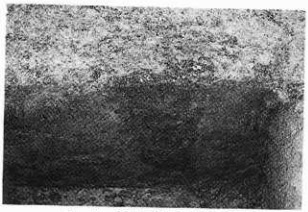
7　P－67完掘状況（南から）

8　P－86炭化物確認状況（南から）

図版6

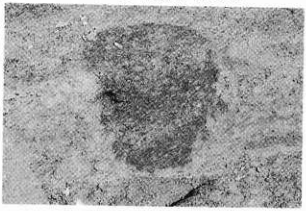


1　P－21土層断面（南から）

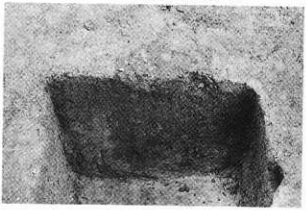


2　P－22土層断面（南から）

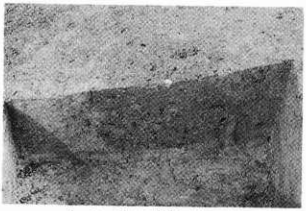
3　P－23土層断面（南から）



4　P－33土層断面（南から）



5　P－54土層断面（西から）



6　P－56土層断面（南から）

7　P－72土層断面（南から）

8　P－88土層断面（北から）

1　S－4（南東から）

2　S－5（東から）

3　S－5土層断面（南から）

4　S－6（東から）

5　S－7（南西から）

1　P－41出土土器（復原）

2　P－41出土土器（復原）

3　P－41出土土器（復原）

4　P－67出土土器（復原）

1　P－19出土土器

2　S－7出土土器

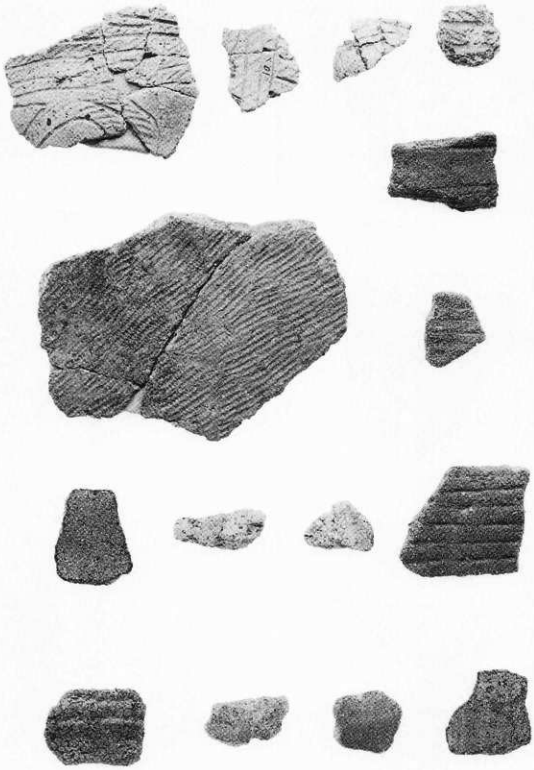
3　S－7出土土器

4　S－7出土土器

5　P－19出土石器

6　P－19出土石器

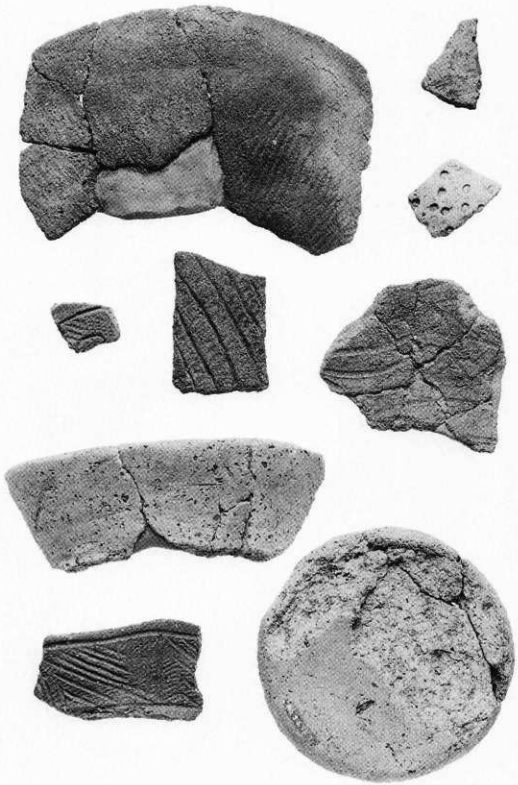
図版10



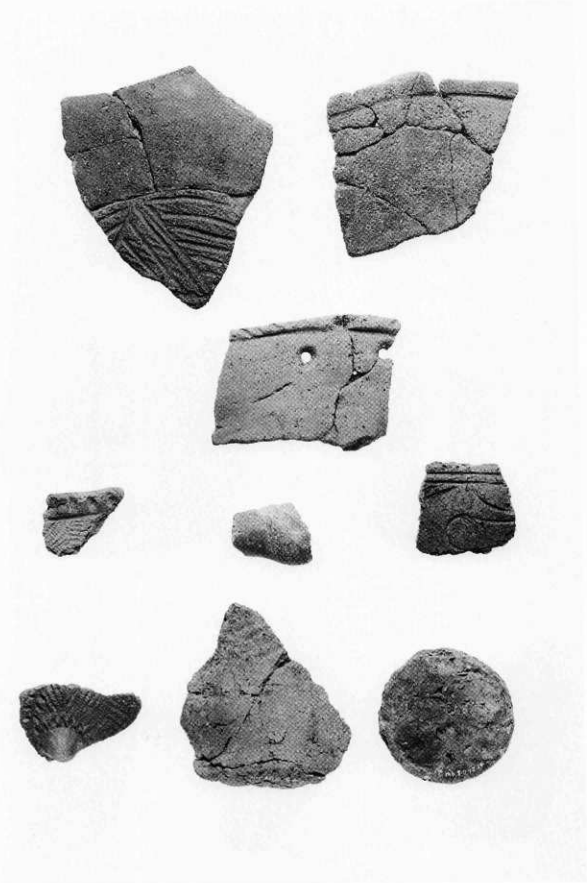
P出土土器

P出土土器

図版12



P・S出土土器



S出土土器

図版14

1　P－67出土石器

2　P－91出土石器

3　S－4出土石器

4　S－7出土石器

5　P－41出土石器

6　S－7出土石器

7　S－7出土石器

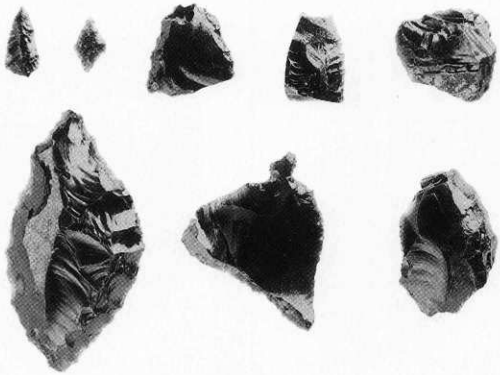
1　S－5出土石器

2　S－6出土石器

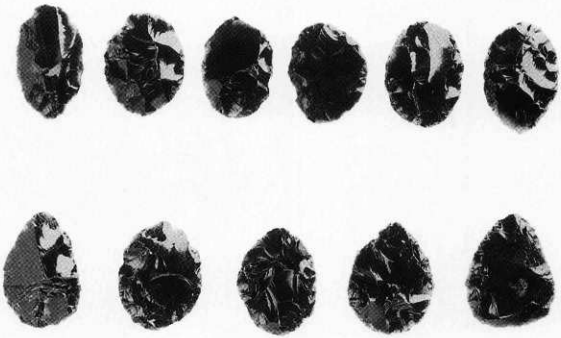
3　S－7出土石器

4　S－7出土石器

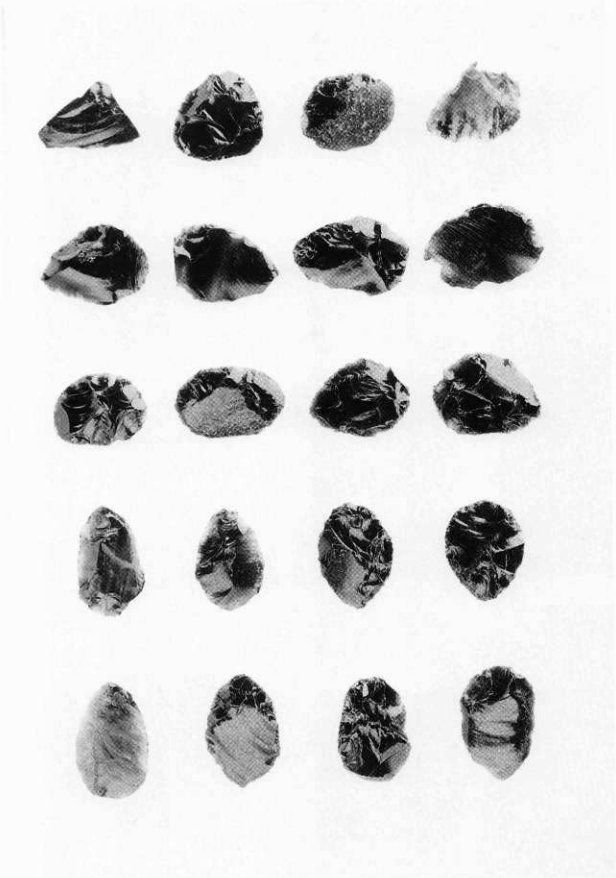
図版16



1　P・S出土石器



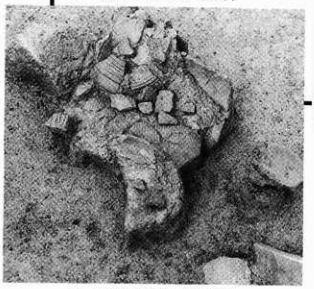
2　D－1出土石器



D－1 出土土器

1　包含層出土土器（復原）

2　包含層出土土器（復原）



3　土器出土状況（東から）

4　土器出土状況（東から）

5　包含層出土土器（復原）

1　土器出土状況（南から）

2　包含層出土土器（復原）

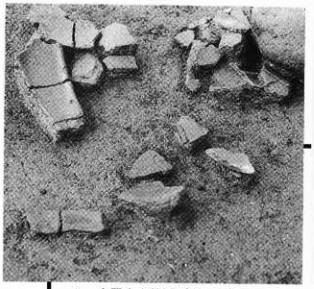
3　土器出土状況（北西から）

4　包含層出土土器（復原）

5　土器出土状況（北から）

6　包含層出土土器（復原）

図版20

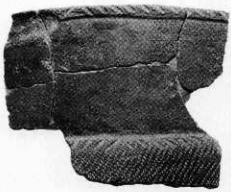


1　土器出土状況（南から）

2　包含層出土土器

3　包含層出土土器（復原）

4　包含層出土土器（復原）



5　包含層出土土器

1　土器出土状況（東から）

2　包含層出土土器（復原）

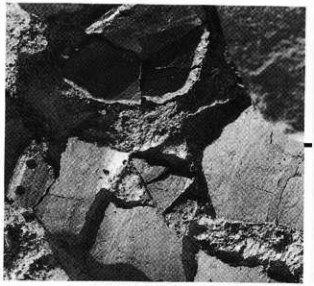
3　土器出土状況（東から）

4　包含層出土土器（復原）

5　土器出土状況（東から）

6　包含層出土土器（復原）

図版22



1　土器出土状況（南西から）

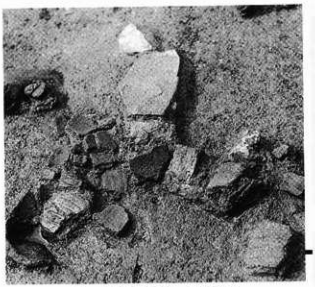
2　包含層出土土器（復原）

3　土器出土状況（東から）

4　包含層出土土器（復原）

5　土器出土状況（上部　北から）

6　土器出土状況（下部　南から）



2　土器出土状況（東から）

1　包含層出土土器

3　包含層出土土器

4　土器出土状況（北から）

5　包含層出土土器

6　土器出土状況（東から）

7　包含層出土土器

図版24

1　包含層出土土器（復原）

2　包含層出土土器（復原）

3　包含層出土土器（復原）

4　包含層出土土器（復原）

5　包含層出土土器（復原）

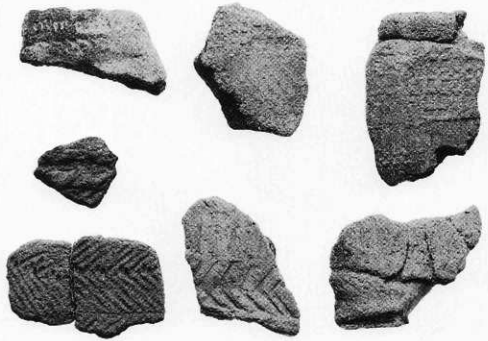
6　包含層出土土器（復原）

7　包含層出土土器（復原）

1　包含層出土土器（復原）

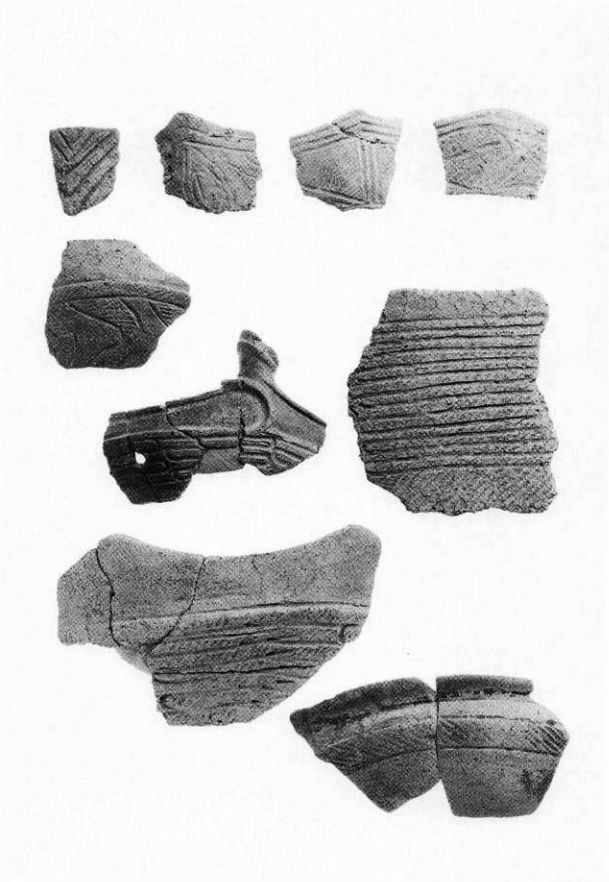
2　包含層出土土器（復原）

3　包含層出土土製品

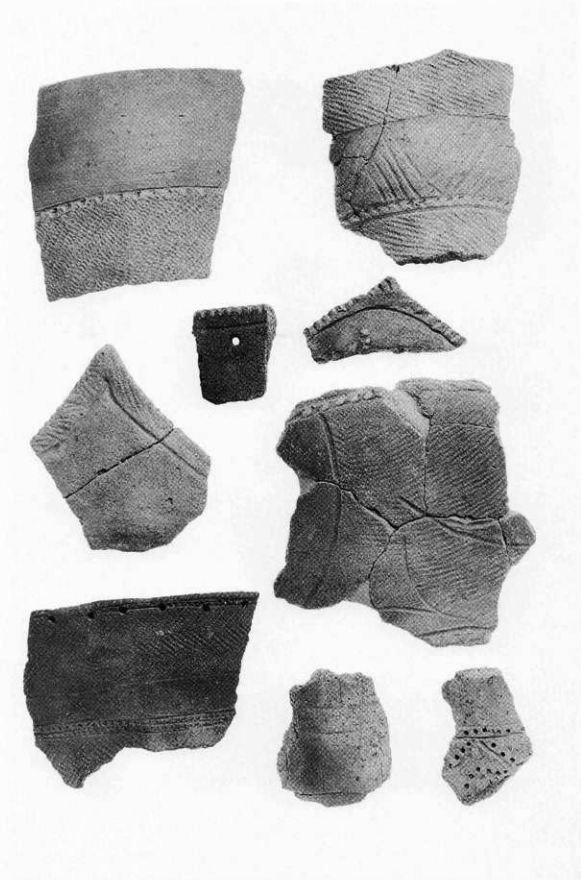


4　包含層出土土器

図版26

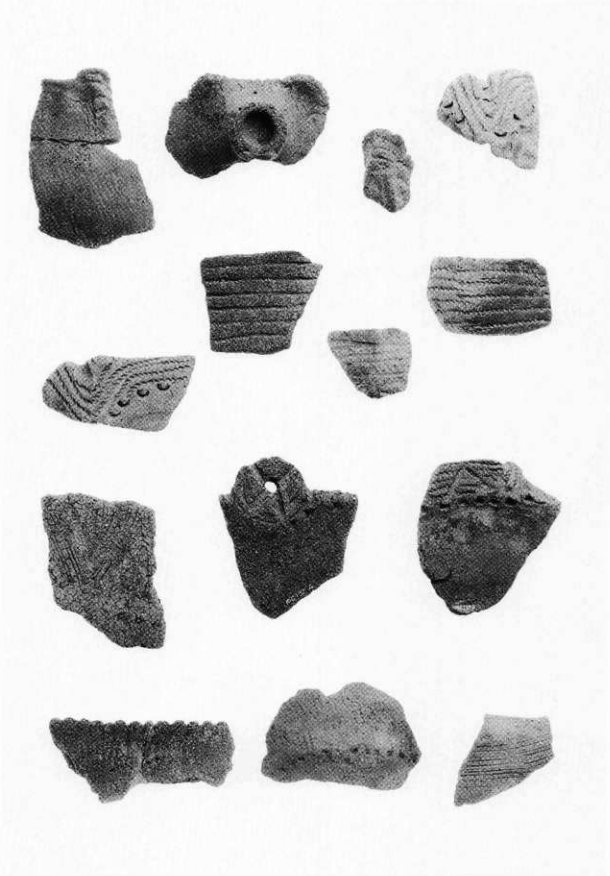


包含層出土土器

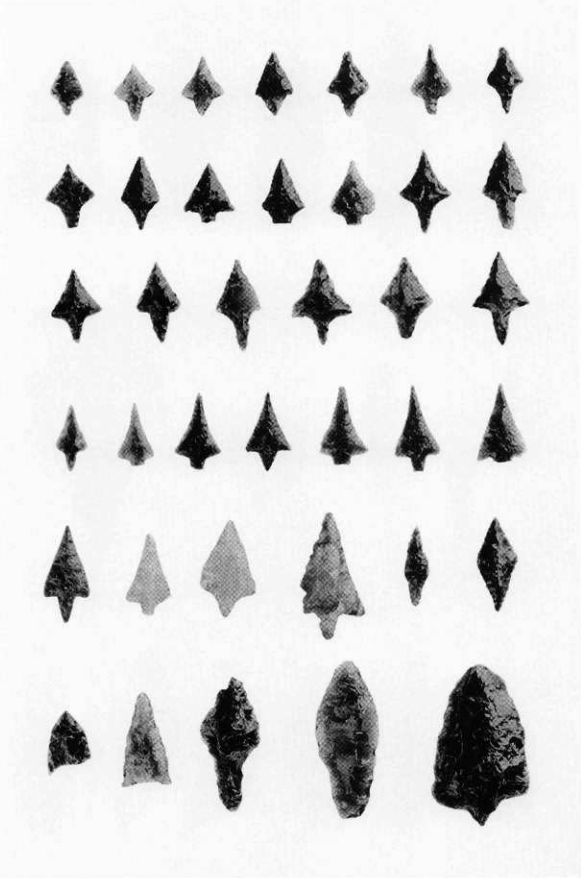


包含層出土土器

図版28



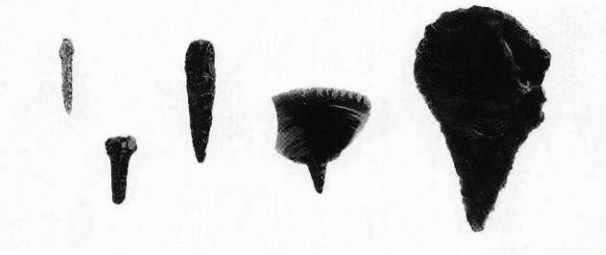
包含層出土土器



包含層出土石器

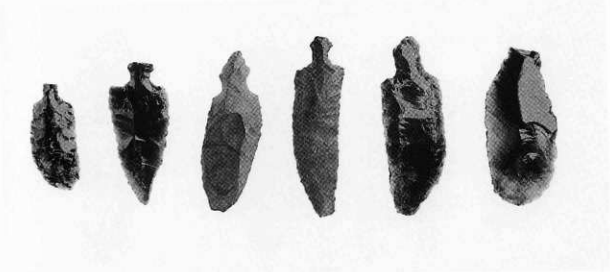
図版30

1　包含層出土石器

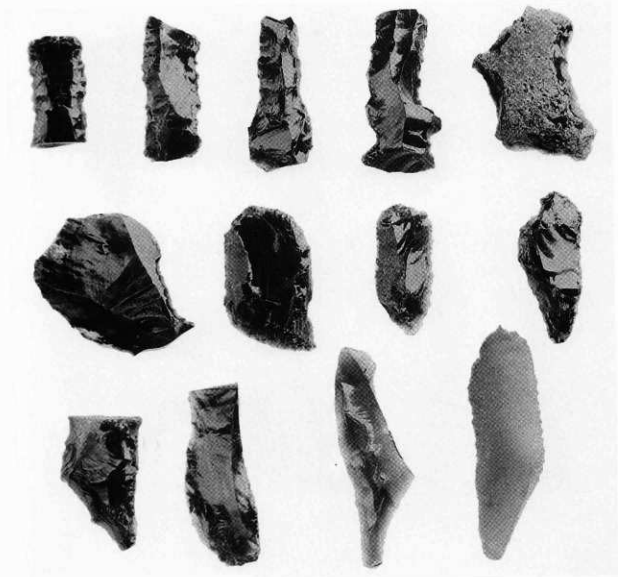


2　包含層出土石器

3　包含層出土石器

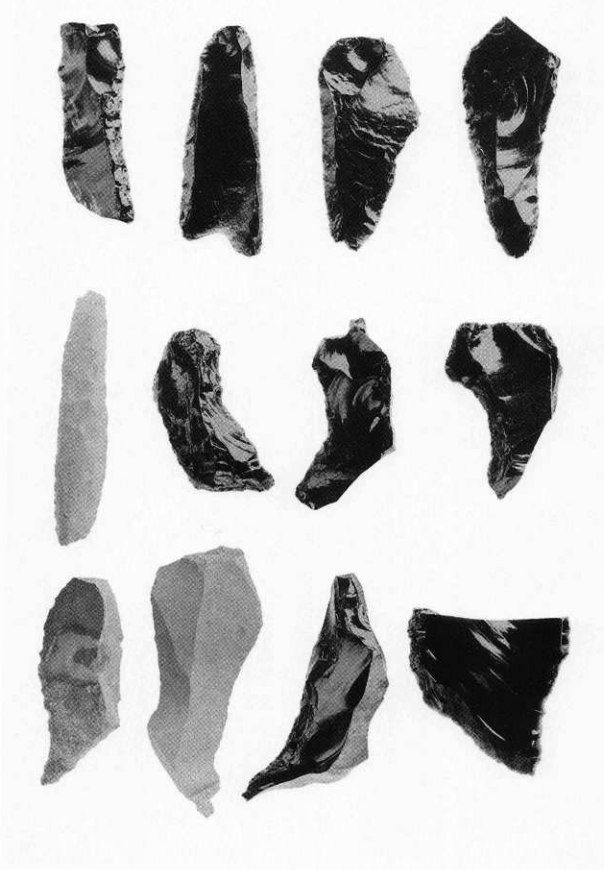


1　包含層出土石器

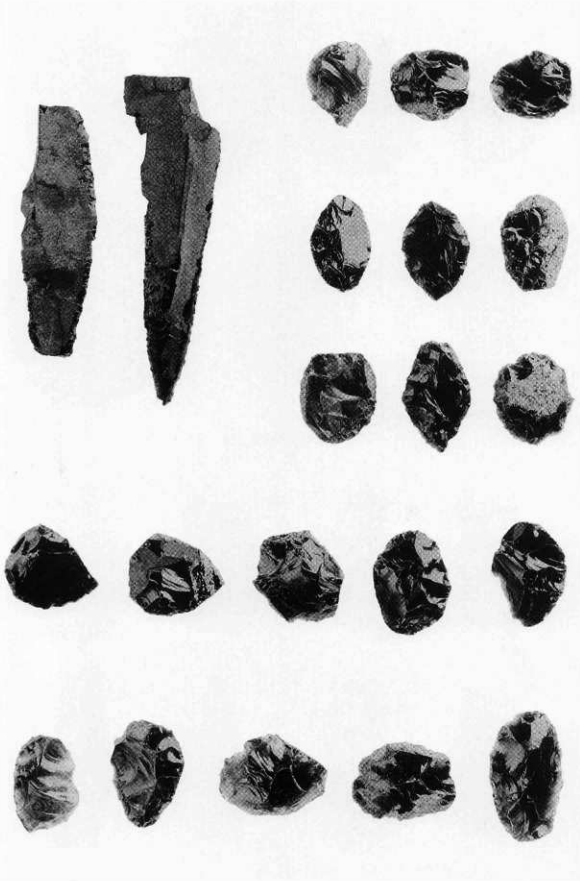


2　包含層出土石器

図版32

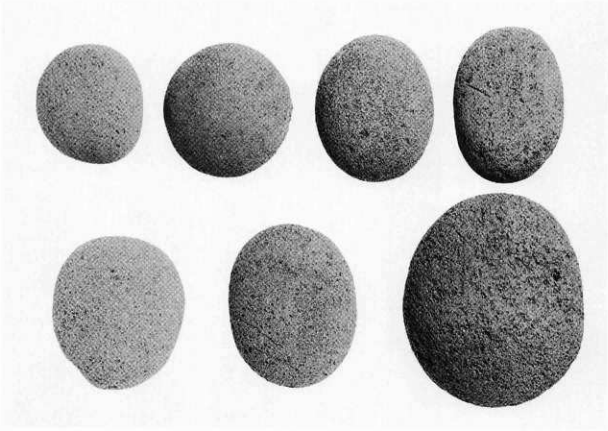


包含層出土石器

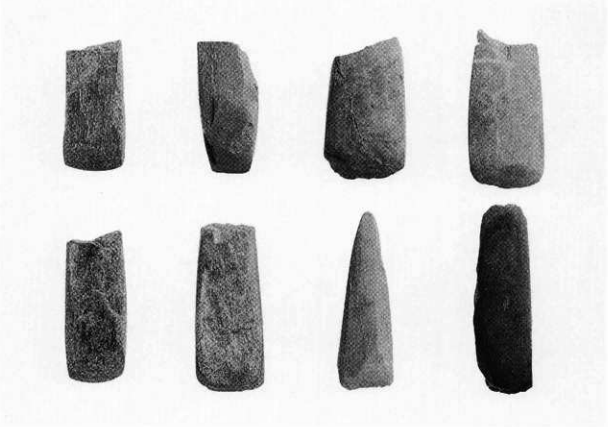


包含層出土石器

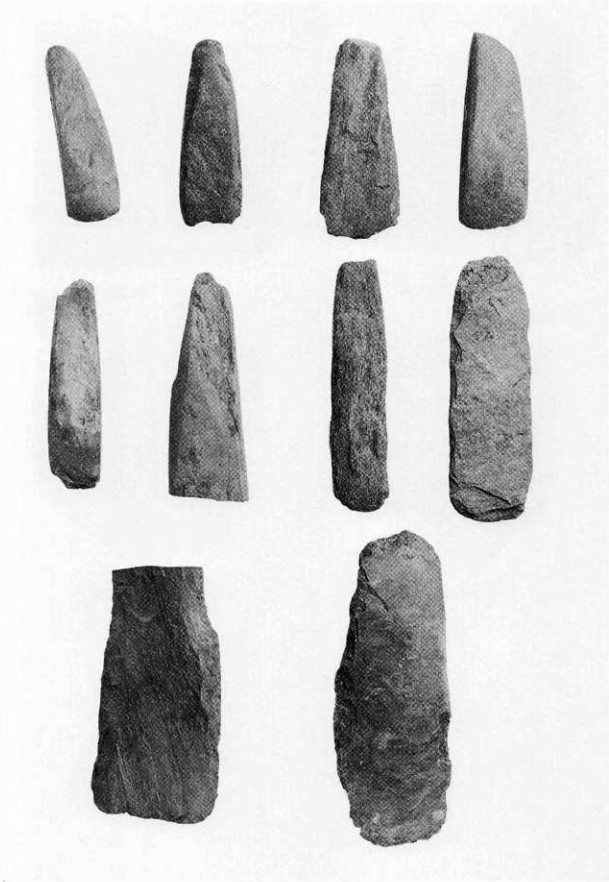
図版34



1　包含層出土石器



2　包含層出土石器



包含層出土石器

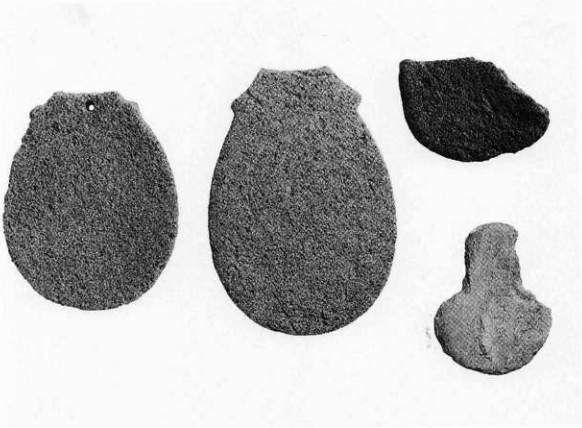
図版36

1　包含層出土石器

2　包含層出土石器

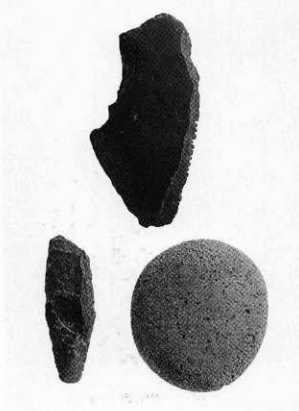
3　包含層出土石器

4　包含層出土石器

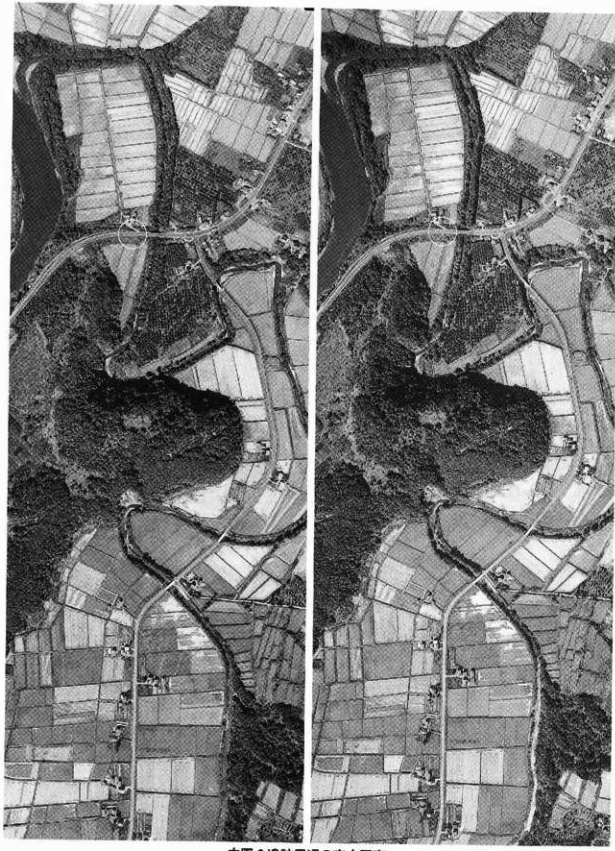


1　包含層出土石製品

2　表採石器



3　表採・Ⅳ層出土石器



内園 6 遺跡周辺の空中写真

（この写真は財団法人日本地図センター発行の空中写真に加筆して作成したものである。）

引用参考文献

論文等

阿子島香　1983　「ミドルレンジセオリー」『考古学論叢』Ⅰ　芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会編
五十嵐彫　1999　「遺跡形成」『用語解説 現代考古学の方法と理論Ⅰ』　同成社
氏江敏文　1999　「遺生地区の概況（空知・上川・留萌・宗谷）」『北海道考古学会 1999年度遺跡調査報告会資料集』
大久保雅弘・藤田至開　1984　『地学ハンドブック・新訂版』　築地書館
大沼忠春　1986　「北海道の押型文土器」『考古学ジャーナル』　267
葛西智義・菅川洋一・越田賢一郎　1992　「深川市納内遺跡出土の遺物について」『北海道考古学』　28
葛西智義・菅川洋一・越田賢一郎　1993　「深川市納内出土の擦手刃について」『北海道考古学』　29
葛西智義　1998a　「石狩川中流域の先史遺跡その後―北空知の場合―」『北方の考古学』　野村崇先生還暦記念論集刊行会
熊谷仁志　1993　「押型文土器の変遷と縄文文化への位置付け」『先史学と関連科学』　吉崎昌一先生還暦記念論集刊行会
河野常吉　1918　「納内及神居古潭の遺跡」『北海道史』附録地図　北海道庁
河野広道・喜　雅夫　1952　「カムイコテンのストーン・サークル」『考古学雑誌』　38-5・6
小林公治　1997　「遺物包含層をどのように復原するか？―旧石器時代文化層分析を通じて」『遺跡・遺物から何を読み取るか（Ⅰ）』
帯広大学山梨文化財研究所
駒井和愛　1959　「音江―北海道現状列石の研究―」
斉藤　傑　1969　「旭川市神居古潭・水沢遺跡出土の土器」『Finld』 7　北海道青年人類科学研究会
斉藤　傑・瀬川拓郎・友田哲弘　1994　「上川の先史文化」『新旭川市史』第1巻・通史1
瀬川拓郎　1996　「擦文時代における地域社会の形成」『考古学研究』43-3
西田　茂　1991　「国見峠から見渡せば―深川近辺の遺跡の研究史―」『北方文芸』　第281号
深川市　1977　『深川市史』
ペドロジスト懇談会　1984　『土壌調査ハンドブック』　博友社
北海道旭川土木現業所　1995　『平成7年度 内大都川改修工事地質調査報告書』
北海道開拓記念館開設準備事務所　1970　『中川弥一寄贈資料目録』
本堂寿一　1977　「石狩川流域のチャシコツ」『石狩川中流域の先史遺跡』　空知地方史研究協議会
御堂島正　1991　「考古資料の形成過程と自然現象」『古代探究』Ⅲ　早稲田大学出版部
宮　宏明　1983　「押型文土器管見」『考古学研究』　116
民族考古学研究会編　1998　『民族考古学序説』　同成社
山田秀三　1977　「深川のアイヌ語地名を尋ねて」『モレウ・ライブラリー』（原典は1997刊深川市史）
Binford, L. R. 1977 Theory Building in Archaeology. Academic Press.
Schiffer, M. B. 1972 Archaeological context and synytematic context. American Antiquity 37
（西藤清秀訳 1983 「考古学的情況と体系的情況」『履修考古学研究所紀要 考古学論攷』9）
Willey, G. R. and Sabloff, J. A. 1974 A History Of American Archaeology.
（小谷凱宣訳　1979　『アメリカ考古学史』　学生社）

報告書

氏江敏文　1988　『名寄市　日進33遺跡』　名寄市教育委員会
大矢義明　1991　『深川市　内園3遺跡』　深川市教育委員会
大矢義明　1992　『深川市　内園4遺跡』　深川市教育委員会
大矢義明　1993　『深川市　内園吟遺跡』　深川市教育委員会
葛西智義　1996　『内園6遺跡』　深川市教育委員会
葛西智義　1997a　『内園6遺跡Ⅱ』　深川市教育委員会
葛西智義　1997b　『東納内遺跡』　深川市教育委員会
葛西智義　1998b　『内園3遺跡』　『市町村における発掘調査の概要（平成10年度）』　北海道教育庁生涯学習部文化課
葛西智義　1999　『内園3遺跡Ⅱ』　深川市教育委員会
斉藤　傑　1979　『神居古潭8遺跡』　旭川市教育委員会
斉藤　傑　1984　『忠和2遺跡』　旭川市教育委員会
佐藤忠雄・近藤祐弘　1980　『多寄』
瀬川拓郎　1988　『錦町2遺跡』　旭川市教育委員会
瀬川拓郎　1990　『神居古潭ストーンサークル遺跡調査報告書』　旭川市教育委員会
瀬川拓郎　1995　『神居古潭7遺跡Ⅲ』　旭川市教育委員会
杉浦重信　1989　『西遠者2遺跡』　富良野市教育委員会
田中哲郎　1991　『深川市　納内3遺跡』　北海道教育庁生涯学習部文化課
友田哲弘　1992　『神居古潭7遺跡』　旭川市教育委員会
友田哲弘　1993　『神居古潭7遺跡Ⅱ』　旭川市教育委員会
友田哲弘　1995　『神居古潭7遺跡Ⅳ』　旭川市教育委員会
福田友之・中村福彦　1977　『深川市　東納内2遺跡発掘調査報告書』　北海道教育委員会
北海道埋蔵文化財センター　1988　『深川市　内園2遺跡』　北埋調報　51
北海道埋蔵文化財センター　1989a　『深川市　納内6丁目付近遺跡』　北埋調報　55
北海道埋蔵文化財センター　1989b　『深川市　納内3遺跡』　北埋調報　60
北海道埋蔵文化財センター　1990　『深川市　納内6丁目付近遺跡Ⅱ』　北埋調報　63
北海道埋蔵文化財センター　1998　『恵庭市　ユカンボシE10遺跡』　北埋調報　129
北海道埋蔵文化財センター　1999　『恵庭市　ユカンボシE7遺跡』　北埋調報　132

報告書抄録

ふりがな	ふかがわし　うちぞの　いせき
書名	深川市　内園6遺跡
副書名	内大部川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書（北埋調報）
シリーズ番号	第145集
編著者名	高橋和樹・末光正卓・石井淳平
編集機関	(財)北海道埋蔵文化財センター
所在地	〒069 - 0832　北海道江別市西野幌685番地1　℡(011)386 - 3231
発行年月日	西暦　2000年3月27日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
うちぞの 内園6遺跡	ほっかいどう　ふかがわし 北海道　深川市 おとえとちょうあざうちぞの 音江町字内園 435ほか	01228	53	43度 42分 54秒	142度 10分 54秒	19990903 ～ 19991027	2,000㎡	内大部川改修工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
内園6遺跡	散布地 集落址	縄文時代 中期 後期 晩期	土壙：28 柱穴・杭穴：48 焼土：15 集石：4 石器埋納：1	土器 中期：押型文土器 後期：手稲式、ホッケマ式 堂林式 晩期：晩期後半の土器 石器 石鏃、石槍・ナイフ、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー 石斧、たたき石、すり石、台石等	2本の流路と段丘 (うち1本は改変の可能性)

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第145集

深川市　内園6遺跡

平成12（2000）年3月27日

編集・発行　財団法人　北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832　江別市西野幌685番地1
TEL　(011)386-3231
FAX　(011)386-3238

印　　刷　株式会社 北海道機関紙印刷所
〒060-0806　札幌市北区北6条西7丁目
TEL　(011)716-6141
FAX　(011)717-5431